
【精霊憑きと魔法使い】

伊丹静生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【精霊憑きと魔法使い】

【コード】

N8850T

【作者名】

伊丹静生

【あらすじ】

不思議な力をもった武器、“神器”を生み出す能力を持つ“精霊憑き”の少年と、“魔法使い”の少女の物語。

厨二色強し。

第一閃『精霊憑きと魔法使い』（前書き）

随分前に書いたモノですので、三点リーダーの使用が無く、文章もいまいちと、多少読みづらいかもしれませんが、ご了承くださいを。

第一閃『精霊憑きと魔法使い』

第一閃『精霊と魔法使い』

「ばけ……もの……」

「オレはそのとき地獄の中で理解した。」

オレも目の前の男も『化物』なのだ。

だが、目の前の男は「違う」と言った。

「お前は精霊に、神に選ばれた。」

だが『違う』。

私の求める精霊はお前ではない」

男はおもむろに右手の剣を振り上げ、そして、オレに向かって振り下ろした。

そこから先は覚えていない。

そこにあつたのは赫さを増しただけの変わらない地獄。

オレの左手には精霊 否、化物が握られていた。

左手の大剣に、血は付いていなかった。

アイア・シルストームは魔導師である。

もっとも、この世界では別段珍しいわけではなく男も女も一緒にして“魔法使い”^{ウィザード}と呼ぶ事になっているのだが。

特徴的な大きなポニーテールと、首に下げた水晶をあしらったネックレスを揺らしながら、

ファートスと呼ばれる街の大通りを歩いていた。

そこまで大きな街ではないとはいえ、人通りの多くなる時間の大通り、雑踏はうんざりするのに充分だった。

薄暗い路地に入って溜息一つ。

「まさか早々に迷子とは・・・」

どうやら、人を探しているようだ。

ロンガ・シーライドは剣士である。

もつともそれは自称であり、彼は剣どころか一本のナイフすら持っていないのだが。

耳を覆い隠すほどの髪は根元から毛先まで真っ白だった。

着ている服も白く、男には似合わぬほどに肌も白かった。

円形をしたファートスの街で、人通りを避けて歩きながら気だるそうに呟く。

「オイ・・・アイツ、どこ行きやがった」

こちらにも、人探しの途中のようだ。

ほんの少し前。

ファートスの街を取囲んでいる鬱蒼とした森 正確にはその森

をくり抜くようにしてファートスの街を造ったのだが で、アイ

アは森の大木に背中を預けていた。

歩けないほど痛む左足を憎々しげに睨む。

「くそ、崖から足を滑らせるなんて・・・」

まだ朝方なので、夜になる心配はしなくていいが、このままここには獣や怪物の類のいい餌食になる。その前にここを離れなければ。

焦る気持ちに唇をかむが、一向に足の痛みは治まらない。

魔術の修行は故郷で三年程こなしては来たが、別に旅慣れているわけではないので、彼女にはこの状況がすでに危険なものだとは解らなかった。

ズルリ、ズルツズルル、ズルリ

《ガルアアアアアアアアアアアアアアアア》

「……え……?」

現れたのは。でかい、アリアを十数人は飲み込めそうな大蛇だった。

「な……ちよつと……今、魔法使えないのに!!」

万全の状態の彼女ならば。

追い払う事もきつと出来た。

だが、今は魔法を使用する際の媒介となる杖も折れて、怪我で立つ事さえもままならなかった。

《ガルアアアアアアアアアアアアアア》

大蛇は吼える。

鎌首をもたげ、大口を開け、狙いを定め、弾丸のような速度で獲物へ襲い掛かる。

「ひつ……!!」

ズ、バン

恐怖につぶつた眼を再び開けたとき、そこにあつたのは白い髪の少年の後姿だった。

《ヴァルアアアアアアアアアアアアアアアアアア》

左眼を縦に斬られた大蛇が痛みに暴れる。

少年の左手には、身長と同じぐらいの諸刃の剣が握られていた。

「(え……今、斬つたの……?)」

その剣で、その持ち主が大蛇の眼を斬ったことは明白だったが、その剣に一切の血液や体液の類はついていなかった。

「なあ・・・アレ、お前の獲物だったりするの？」

少年は大蛇を指差し、唐突に問う。

激しく首を振って否定するアイア。

それを見て少年は

「そうか。じゃ、いただきます」

と、チロリと舌を出して言った。

《ヴァルルルルルルル・・・》

痛みをピークを過ぎたのか大蛇は低く唸り、残った眼で食事の邪魔をし、片目をつぶした犯人を睨む。

ダァン！！

助走もつけず、バネが弾けるように、少年は跳ぶ。

それに呼応するかのように、高い位置にあった大蛇の頭が、牙が、始めにアイアへ向かったのと同じ速度で再び襲い掛かる。

今度は獲物ではなく、害敵エサに向かつて！！

ガツガツ、ぐにつ、ブチッ、
ガツガツ、ゴクッ

「・・・えつと・・・その、ありがとう。助けてくれて」

アイアは迷ったように、目の前の白髪の少年に話しかけた。

「ん？ 別に。オレは腹減ってたからさあ。あの蛇、喰おうと思っただけ」

今や横たわる大木のような大蛇の屍を指差し言う。アイアが熾した火で焼いた蛇の肉をガツガツとむさぼりながら。

「・・・」

アイアが言葉に詰まったのは、自分とほとんど歳も変わらないよ

うな目の前の少年の台詞が照れ隠しなどではなく、どうやら本気らしいからだった。

「（じゃあ、お腹が減って無かったら今にも食べられちゃいそうな私を見ても助けなかつたって事!?!）」

とは思ったが、結果的には助けられてしまっているので口には出せない。

「・・・じゃ、名前は？ 私はアイア。アイア・シルストームよ」「オレは・・・ロンガ・シーライドだ」

もちろんその台詞は、噛み千切った肉をもぐもぐやりながら。

「・・・いきなりこんなこと言うのもなんだけどさ・・・」

少しばつが悪そうに切り出した。

「ん?」

「君・・・人間じゃないよね?」

その言葉に、ロンガはピタリと食事の手を止めた。

「確かに・・・普通の人間ではないな。」

今じゃある程度知られるとは思うのだが、オレは“精霊憑き”つてやつだ」

「へえ・・・やっぱり精霊憑きか。初めて見たよ」

「やつぱり・・・?」

「うん。さっきの剣が“神器”だよな? いつの間にか消えてるし。実は私、少し詳しいんだよ」

精霊憑きスピリウル。生まれながらにして精神こころに、身体に、精霊を宿し、魔力によつてその能力の一部を“神器スキル”と呼ばれる武器の形で具現化することができる、能力者。

「ねえ、なんでこんな森の中にいたの? しかも私がいたところよりずっと深いところにいたでしょ」

「・・・別に。お前みたいに迷い込んだわけじゃない」

「!?!? なんで迷つたつて解つたの!?!?」

「冗談のつもりだったんだが!？」
本気で。

「ま・・・まあ、いいわ・・・ あんたは街の方向とか分かる？」
「ああ。一応はな。オレもこの近くの街に用があるんだよ。迷うのが怖いなら一緒に行くか？」

「なっ、別に怖いなんて・・・」
「そこまで言ってしまったから、アイアは顔を赤らめてうつむき、
「いや・・・やっぱ・・・一緒に行ってもらえると・・・助かり、
ます・・・」

そう、ぼそぼそと訂正した。

しばらくの後。

ファートスの街に着いた二人は別行動をとることにした。
といっても、今さっき会ったばかりなので親しいわけではなく、
さらにロンガからしてみれば、ただ気まぐれで街まで送ってきただけなのだが、アイア曰く、礼をしないと気が済まないそうなので後で落ち合う約束をしたのだった。

「て言うか・・・たった二行の空白で街に着くなんて・・・今まで
迷いまくってた私は何なの？」

ぶつぶつ言いながら宿のチェックインを済ます。

「結構旅慣れてたみたいだけど、結局目的とか聞けなかったな・・・」

「やあ。久しぶりですね。ロンガさん」

貼り付けたようになにこやかな笑顔で、店の店主は言った。

「ほら。約束の」

ドサツ と、無造作にカウンターに置いたのは、金貨の詰まった袋。

「へえ・・・ホントに一ヶ月で集めてくるとは。一体どんな悪いことしたんですか？」

「御託はいい。さつさと話せ情報屋」

表向きは酒屋。裏ではアブナイ情報屋。この世界にはそんなのいくらでもある・・・ってことで。

ただ、ロンガのいる情報チャ(さか)一屋は金さえあればどんな危ない情報でも集めてくると評判だった。あくまでも裏社会で。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

しかし、カウンターに座る男は一言も発さず、心なしか冷や汗をかいているようだった。

「・・・・・・・・？・・・・・・・・どうした。まさか集まらなかったのか？」

「いえ・・・」

そう言うわけではないんですが・・・」

チラリ、と開けっ放しの入り口を見やる。

それにつられロンガも振り返るとそこにいたのは、

「・・・・・・・・！！」

筋骨隆々、スキンヘッドのいかにも悪役風な大男だった。

「貴様・・・バラしたのか!？」

再度振り返り、情報屋へ怒鳴る。

未だカウンターに座り、顔の笑みも消えてはいないが今度は確かに、

ダラダラと冷や汗をかいていた。

「いや・・・けっしてバラしたのではなくてですね・・・・・・・・」

「バレたんだよなあ・・・」

店主の言葉を引き継ぎ、店の奥から現れたのは、線の細いひよろりとした、これまた張り付いたような笑顔が特徴の金髪の男だった。

「駄目だよなあ、仮にも政府高官の情報を盗もうだなんて」

「……盗もうとしただけなんだけどなあ……」

「だから見逃せと？ それは無理だね。」

「ご本人様から見つけ出して始末しろとのご命令だからな」

「なるほど……危険因子は潰しとけてかよ……」

「ハツ……その通り。やれ、ゲーム」

その台詞を合図に、ゲームと呼ばれた初めの男は握りこぶしを高く振り上げて、

「スキル“神器”発動、【アクス・オヴ・フレアリザード火蜥蜴の戦斧】」

と、言うと同時にロングに向かって振り下ろした。

バキイイツ！！！！

振り下ろされた腕にいつの間にか握られていた斧がロングからはずれて、店の床を破壊する。

その斧の刃は炎に包まれていた。

「スレリウル“精霊憑き”か……！！」

間一髪、斧をかわしてそう言った次の瞬間、

「ぐあああああああ！？」

右肩の鋭い痛みと共に体中に走る電撃。

「スキル“神器”【ダガー・オヴ・スパーク雷光の短剣】」

膝をついて、歯を噛み締め右肩に刺さった短剣を引き抜くロング。その短剣を投げたのは、言うまでも無く後から現れた方の男である。

「く……」

ひよろりとしたその男は、下卑た笑いを浮かべてこう言う。

「どうした。お前もスキル神器を出さないのか？」

明らかに自分達が有利であることを確信している笑み。

「くつ……仕方ないか……」

その言葉とは裏腹に、ロングは楽しそうな笑みを浮かべそう言い、さらに続ける。

「……“スキル神器”発動……」

水平に上げた左腕の拳が光る。

「【ブレード・オブ・シルフ風霊の大剣】！！」

光が形作ったのは、大蛇の時と同じ、左右対称、諸刃の大剣。違うのは。その剣が纏う、風。その風圧だった。

大剣の具現化の直後、ひよろりとした男に貼り付いていた笑みは信じられないものを見た時の苦笑いに変わった。

「な!!! し・・・風霊シルフ・・・!?」

「バカな・・・こんなガキが、四大元素クラスだと!!!?」

「ヒ・・・ヒイイイ・・・」

そろって驚きと恐怖の声を上げる、

【ダガー・オブ・スパーク雷光の短剣】の男とガームという大男、そして蚊帳の外だった店の店主。

「スヒルウル精霊憑き”の能力は先天性だから、年齢は関係ないだろうが・・・」

機嫌を害したように言う。

「そうだ、年齢だ！ 風霊シルフなんて高ランクの精霊を、こんなガキが使いこなせる訳ねえ！ガーム！今のうちにぶっ殺すんだ!!!」

「オオオオオオオオオオ!!!」

火力を上げた燃える斧がロンガへ襲い掛かる。

ガギイイイ・・・ン・・・

大剣を盾のように使い、難なく攻撃を受け止める。

「な・・・!!!?」

驚きの声はあっさりど攻撃を防がれたからではなく、その剣が纏う風によって簡単には消えるはずの無い火蜥蜴フレアザードの炎が掻き消されたから。そして、その風圧によって斧本体が剣に触れる前に著しい減速を余儀なくされたからである。

大剣を包む風圧が上がる。

【アックス・オブ・フレアザード火蜥蜴の戦斧】を薙ぐような一太刀で破壊し、そのまま右手を添えて突きの動作。

「くっ・・・!!!」

ガームは間一髪、後ろに跳んでギリギリのところまで切っ先をかわした。

「吹っ飛べ!!! 突風!!!!」

「な!? ガ、ガアアアアアアア!!!」

大男は、盛大に吹っ飛んだ。

店の壁を破壊せんがごとき勢いで。

確かにゲームは剣の切っ先はかわしたが、

圧縮された風による、大砲のごとき突きまではかわせなかった。

「フン。なんだ、結局雑魚か」

視線を金髪の男に向けるロンガ。

「それで? お前は、どう料理されたい?」

「く・・・くそ・・・」

今や苦笑いすら消えた怒りと恐怖の顔で、本来なら取るに足らぬはずの少年を睨みつける。

「この・・・覚えてろよ! 絶対後悔させてやるからな!!!」

最後まで名前が出てこなかった短剣の男はベタすぎる、いかにも悪役の捨て台詞を吐いて店の裏口から消えていった。

「なんだったんだあいつは・・・」

風霊シルフを宿す白髪の少年はそうぼやいてから

最後まで震えていた店主に向かって、

「またいつか来るから、その時はよろしく」

と言い残したのだった。

太陽は沈みかけ月は上りかけ、いつの間にか時刻は約束を過ぎていた。

杖の新調したり旅の道具そろえたりしてたら遅くなっちゃった。

「無視して帰ってないといいいけど・・・」

待ち合わせ場所は、街の中心の広場。

なんかベタな気が……

広場をくまなく見て回ったが、結局ロンガの姿を見つける事はできなかった。

「……まだ来てないのかな……」

ボソツとつぶやきながら、自分でもばかばかしいと思いながらも狭い路地をのぞいてみたりする。

「……どうしようかな……」

諦めて宿に戻ろうかと思ったとき。

バチイイッ

「！？」

首筋に走った鋭い痛みにも、その場で倒れてしまった。

太陽は眠りにつき月が顔を出し、いつの間にか夜と呼べる時間になっっていた。

右肩の処置に随分と時間がかかってしまった。慣れてないことはダメだな、全く。

とつくに時間は約束を過ぎていた。

「今ならまだいるかと思っただが……」

やはり諦めてどこかにいったのか。

ふと、今朝知り合ったばかりの奴を焦るような気持ちで探している自分に気付く。

「バカみたいだな、オレは」

そもそも気まぐれで知り合った仲だし、本当ならこちらが無視してやるところなんだが

.....

「このやるせない気持ちは何だ？」

「今までずっと一人で旅をしてきたしそれで不便もなかった。むしる連れなど足枷に他ならない。」

「こちらも諦めて、今夜泊まるところを探そうとしたとき。そのとき。」

「家路につく人の群れの中で、見覚えのある顔を見つけた。」

「ひよろりとした背格好、金髪で、顔に張り付いた他人を見下すような笑顔。」

「間違いない。オレを襲った二人組の短剣の男だった。」

「その男がじやらりと、手に持った物を胸の前まで上げた。それは、紛れもなく、アイアがつけていた、水晶の首飾りだった。」

「貴様……!!」

「オレが気付いた事を悟るやいなや、金髪の男は走り出した。」

「逃がすものか。」

「脚力には人並みならぬ自信がある。」

「しかし、男のほうも逃げきれるとは思っていなかったようで、いまは使われなくなったと見える、廃墟となった教会へ逃げ込んだ。」

「追いかけてここは終わりか、ゴミクス」

「……俺にはアルフレッド・ラインって名前があるんだが……今は関係ないか」

「……なんでお前がアイアの首飾りを持ってるんだ？」

「それは……本当に偶然なんだよ」

「頬を吊り上げたままアルフレッドは言う。」

「確かに俺達はお前を殺しに来たが、お前の顔を知ってたわけじゃ

ない。情報屋の店主から聞いたんだ。　だけど、お前の白ずくめは少し目立つからな。情報屋に行く前に少し見かけたのさ」

アルフレッドはその笑みをいつそう強くして、言う。

「それを、そいつが覚えてた」

ドツ

「ガふ……っ!!!」

ロンガの背後から、不意打ちをしたのは火蜥蜴を宿す大男、ガームだった。

「ガハハ、どうだ【火蜥蜴の戦斧】の味は。　喰らうのは初めてだ

ろ」

「く……クソがあ……」

脇腹を切り裂いた傷と火傷は、急所こそ外れていたものの、二人の“精霊憑き”スレリウルを相手にするには致命傷に近かった。

「【雷光の短剣】。　さて……死のうか」

手に稲妻を纏う短剣を持ち、教会の際壇上からロンガを見下ろす。その視線を、ロンガは睨み返し、憎々しげに言う。

「ふざけんなよ、クソが……」

獣のように低く唸って、“神器”スキルを生成ろうとする。

「【風霊の……」

「ウオオオオオ!!!」

「っな!?!」

バギイン!

ロンガを狙って再び放たれた燃える斧の一撃は、教会の石の床にヒビをいれた。

攻撃をかわしたロンガへ、今度は短剣が飛んできた。

ドズツ　バチイ!

右腕に刺さった【雷光の短剣】ダガー・オウ・スパークの電撃が、ロンガの身体にダメージを与える。

「ぐ、があああああ!!!」

「く……この……っ」

ロンガはヒザをつき、右腕に刺さった短剣を抜く。その短剣は床に音を立てるより早くかき消えていた。

「つく・・・（くそ、こいつら、まさか）」

「ハハハ、その顔、気付いたか」

その言葉の終わる前に、ロンガは右腕と脇腹から血飛沫を飛ばしながらも、床を蹴って二人と距離を取ろうとする。

「ガツハハ、にがさんぞお！」

回りこんだガームが斧を振るう。

ロンガはそれをかわすが、斧から飛んだ火花に怯んだ隙に左脚に後ろから短剣が突き刺さった。

「がっ・・・（やつぱりか・・・！）」

倒れそうになるものの、振り下ろされた斧をガームの腕をつかんで止める。

「フツ、バカめ」

バキイイ

しかし結局、ガームの空いていた左腕に殴り飛ばされた。

「（やつぱり・・・こいつら、オレに神器スキルを使わせない気だ・・・！）」

仰向けに倒れたロンガはそう確信した。

「ハハハハ、やつぱり。風霊シルフさえ封じればお前なんて大したことなかったか」

つかつかとアルフレッドが歩み寄る。

「剣から放たれる風でいくら斬ろうと血液一つつかず、その風圧は盾にも武器にもなる。そんな大層な“神器スキル”も使えなきや意味ないな」

【ダガー・オブ・スバーク雷光の短剣】を逆手に持ちさらに迫る。

「大剣タイプの“神器スキル”はその大きさをゆえ、生成に時間がかかる。この作戦を使うにはもってこいだ」

ロンガは仰向けのまま、荒い息を吐いていた。すでに右腕は刺し傷と感電でボロボロ、左脚もほとんど同じで、腹の傷は血を流し続

けていた。

「（隙だ・・・“神器”^{スキル}を生成る隙さえあれば・・・！！）」

アルフレッドが腕を振り上げ、ロンガにとどめを刺そうとした、その瞬間、

「エイク・ブリザ・ウォク！！！」

バギン！！！！

そんな音と共に、アルフレッドの腕が弾かれると共に凍りついた。比喻表現ではなく。

実際に氷漬けになったのだ。

「ひ、あ、ああ、あああ！？」

一瞬何が起こったかわからず、情けない声を上げるアルフレッド。

「だ、誰だ！？」

ゲームが教会の入り口の方を振り向く。

そこにいたのは、自分達がさらってきた筈のアイア・シルストームだった。

「ロンガ！！ やれええええええ！！！！」

「おおおおおおおお！！！！！！」

アルフレッドの顔へ、下から打ち上げるような蹴りが炸裂する。

「ぐあ・・・！！！！」

「又！？」

さらに、吹っ飛んだアルフレッドに気を取られたゲームの顔面へ渾身の左ストレートが直撃する。

「ぐぶあ、ああああああ！！！！！！？」

一気に二人を同じ方向にぶっ飛ばしたロンガは、腹と右腕、左脚から血をダラダラと流しながらも、

「形・・・勢、逆・・・・・・・・・・転・・・・・・・・！！！！」

そう宣言した。

「ぐ・・・ゲーム・・・とりあえずお前の【火蜥蜴の戦斧】^{アックス・オブ・フレアリザード}で腕の氷を溶かしてくれ、痛すぎる・・・腕が千切れそうだ・・・！！！！！！」

「あ・・・ああ・・・わか・・・」

「その必要はねえよ、クソども！」

「「んな!?!」」

そこに、血みどろになりながらも凶悪な笑みを浮かべて立っていたのは、当然、左手に【風霊の大剣】フレッド・オブ・シルフを持ったロンガである。

「まあ・・・もう全力とはいかないけどさ、

オレの必殺技、冥土の土産に見てけよ」

そう言つて、大剣を強く握る。

剣が纏う風が強くなる。

強く。強く。強く。

やがて剣を包む様に回っていた風が、教会の内部全体を埋め尽くす程の、暴風になつた。

「「「な・・・・・・」」」

ロンガの敵の二人のみならず、アイアまでも驚きの声を上げる。

さらに、嵐のように暴れまわっていた風が再び、ロンガが高く掲げた剣の周りに集まつて来た。

体中の傷から血が噴出す。

「ちよつ、ロンガ!?!」

これだけの量の風 空気を操るのは並大抵の技ではない。

「風絶一閃・・・・・・テラ・咬バイト・スラアアアアアアッシュ!!!」

大剣を振り下ろすと同時に放たれたソレは

様々なファンタジーに描かれる「飛ぶ斬撃」の類・・・ではあったが、それらとは一線を画すものだった。

その風量は、その迫力は、その勢いは。

まさに竜巻。カマイタチ鎌鼬の竜巻。

《ヴオオオ》

巨竜の牙のようなソレは、唸り声を上げてアルフレッドとガーム、その背後の壁までも飲み込み、破壊した。

文字通り半壊した教会の中で、ロンガとアイアの二人はボンヤリと立っていた。が、その言葉通りなのはアイアだけで、ロンガの方はどう声をかけていいか分からないだけだった。

人を超える存在、“精霊憑き”^{スピリチュアル}。その真価を見てしまった人間^{ヒト}が抱く感情。

それは最早、猛獣や魔獣を前にしたときと変わらない、恐怖。人間の使う“魔法”ですら、常識を超え、使い方を誤れば使用者にすら牙をむく。

神の創り給う、人を超える存在の能力^{ちから}など理解される由も無い。

ロンガの旅の理由には、そんな感情を向けられることを嫌っての事もあるのだ。

やっぱり、怖いか？ 諦めをつけたようにアイアにそう問おうとしたとき。

「す……ごい……」

当のアイアは、感嘆の溜息と台詞をもらしたのだった。

「は……？　すごい……？」

「すごいよロンガ！ あんな魔法、私の師匠でも使えないよ……！」

「いや、アレは魔法じゃなくて“神器”^{スキル}なんだが……」

「細かい事はどーでもいいの……！」

「……恐く……ないのか……？」

「へ？」

「いや、あの能力^{ちから}とかさ……」

そういわれると、アイアは逡巡の後、

「うーん……確かにアレを自分に向けられたら怖いけど、別に口

ンガ自身を恐いと思ったりはしないよ？

それに、二回も助けられちゃったしね！」

そういつて、ロンガの腕にしがみつく。

「……………！！」

（ああ、そうか、恐れていたのはオレの方が……………）

そう安堵した直後、急激な眩暈めまいに襲われて

バランスを崩してしまった。

「え、ちよ、ええ！？」

ロンガはそのまま意識を失った。

それも当然。彼の負った傷による出血が、ついに立っていられる限界を超えたのだ。

翌日

ガバツ！

と、毛布を跳ね飛ばして、白髪の少年はベッドから起き上がった。

「……………？」

周りを見回して、自分のおかれた状況を理解する。

「ここは……宿……か。てことは、あの後……………」

ス……………ス……………

「……………」

思考を寸断する警戒心ゼロの寝息。

ロンガの寝ていたベットにもたれかかるようにして、ポニーテールをほどくこともせずアイアは眠っていた。

「えーと…………？」

傷の手当てとかされてる所を見ると、病院にでも連れて行ったか……………？

いや、宿にいるところを見るとコイツが手当てしたのか・・・」
全く・・・仮にも男なんだけどな・・・

アイアを起こさないようにベットから降りて、部屋の戸に手をかける。

「何処に 行くの・・・？」

背後から呼び止められる。

「まだ聞いてないよ、ロンガの旅の目的」

ロンガは振り向かず、扉の木目を見つめて答える。

「オレの目的は・・・二つ。」

オレの能力に向けられる忌避の眼から逃れること、そして「

まさかコレを他人に話す時が来るとは。

適当に誤魔化してあしらうことも出来ただろうが、なぜかそんな気にはならなかった。

「とある奴を探し出して殺すことだ」

「・・・じゃあ、あの二人は」

「まさか“探し出す”過程で恨みを買うとは思ってなかったが、まあそういうことだ」

「これから・・・どこに行くの？」

「わからない・・・が、とりあえずセドソンの街にでもいってみようと思ってる」

「私も・・・一緒じゃダメ・・・？」

「・・・多分・・・危険な道だぞ？」

まだ扉の木目から目を離さない。

そんなロンガの後姿を見ながらアイアは不適に笑った。

ロンガもそんなアイアの気配の変質に気付いたのか、ふと振り返る。

「私はさ、結構強情だね」

「・・・？」

「拒否しなかった時点で、あんたの負け！

なんと言われてもついてってやる！」

「なっ・・・はあ!？」

急に破顔するなり、そんなことを言われては、うろたえるのも当たり前である。

「そうと決まったら旅の支度しなきゃ!

ここからセドソンまでは、丸一日はかかるよ!」

そう言うなり、立ち上がって、髪を結びなおす。

「ちょっと待て、そもそも何でお前はオレについてきたがるんだ!？」

「んー? ソレはまあ、またにしようよ。

もう四捨五入で三十ページになるしさ」

「!?!?!? 何の話だソレは!？」

アイアの言動に振り回されてる感を感じながらも、ロンガも共に昼前の街に出るのだった。

数十分後

「そついえばアイツ・・・迷子キャラだっけ・・・?」
苦笑いしながら、人通りの増えてきた街を探し回るハメになる口
ンガだった。

第二閃『修道女と妹』（前書き）

前回到引き続き駄文です。
おまけに長いです。

第二閃『修道女と妹』

第二閃『修道女と姉妹』

わたしは知っていた。

誰よりも。あなた自身よりも。

あなたの辛さを。

私とも、お母さんともお父さんとも違う、先祖にたまたまその血が混ざっていたがために、その血があなたの中で覚醒したがために家を離れ、敵であるはずの教会で修道女なんかになった。

運命を呪うとはこのことか。

仕方がないのはわかってる。

でも、だからってこんなこと

だから、わたしはあなたを、あなたの血を

決して許さない。

そろそろ昼の陽射しを放ち始めた太陽の下で“魔法使い”ウィザード アイア・シルストームと、自称剣士、ロンガ・シーライドは肩を並べて道を歩いていた。

「ってロンガさあ、第一閃でも自分で自分のこと“剣士”って名乗ってないじゃん。」

何処が自称剣士なのよ」

アイアは持っていた地図から目を離してロンガに言った。

「登場後初めての台詞がそれか…破天荒もいいトコだな…」

「そういえばさ、誰か探して殺す…とか物騒なことやってたけどさ、手掛かりとかはあるの？」

ロンガのツツコミ、完全無視。

「……まあ、はつきり言つて、手掛かりと呼べるものは全くない」

そこで怒らないロンガは、意外に大人なのかも知れない。

「え……じゃ、ゼドソンに行くつてのは？」

「完全に気まぐれ、というか気まぐれ」

「はい…？」

「ソレはあくまで最終目標。」

確かに少しずつ手がかりとかは集めてはいるが、見つかるまでは気まぐれで動くんだ」

「…じゃ、怨恨より気まぐれで動くんだ、ロンガは」

「そういうこと。」

もっとも、前回二人倒したせいで、追手とかが出てこないとも限らないからな。

行き先を判別させなけりゃ追われる心配も無い」

「一応はいろいろ考えてるんだ…」

「ああ、まあな。つてオイ。どこ行く気だ」

「ふえ？」

地図を持っているにもかかわらず、アイアは分かれ道で進む方向を間違いかけていた。

はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、

結局……逃げることもしか出来なかった。
ダメだ。このままじゃ。

早く あの人を止めなければ。

これ以上、あんなことをさせる前に。

「
ソワッ

「！？」

「ん？ どうしたのロンガ」

「いや……なんか……」

《ド》

「ッ……！！！」

昼間の空気を揺らす爆発音。

見上げれば道を外れたところの森の一角から、白い煙が上がって
いた。

「……ロンガ、行ってみる？」

「ハッ、ここで行かない主人公ってどうなんだよ」

「それもそうか。」

「じゃ、行ってみよー！」

「何故テンション高い……？」

「って、おい、だからどっち行く気だ！」

思ったよりは、その現場の有様はマシな方だった。

広い範囲で木や地面が焦げていたりはしたが、中心地はクレーターのような窪みくぼを作るでもなく。ただ、数匹の角の生えた狼型の怪物モンスターの死体と、女の子が転がっていた。

「死んじゃ……いないな」

倒れている女の子を見ながらロンガは言った。

「ナイフ（刃角）—ウルフ（狼）か……」

「そんなに強い怪物モンスターじゃないよね？」

「ああ。その辺にゴロゴロいるレベルだな。」

それに、コイツの傷は狼によるものには見えない」

「ふえ？」

「まあ、それより腹減らねえか？」

【ブレッド・オブ・シルフ風霊の大剣】を手に握ると、ロンガはそう言った。

「るあああああ！?!?」

「何!? 何事!?!」

「落ちて着けアイア。お目覚めみたいだぞ？」

「え……え……え……?」

赤毛のショートカットを揺らして、少女は

ロンガとアイアの顔を交互に見ていた。

「え〜っと、うん。アイア、こういう時どうしたらいいんだ？」

「えええええええええ、丸投げ!?!」

と、とりあえず……名前は？」

作者がカスでさあ、名前出てないと書きづらいつてイタミ

「（……ここでツッコんだら負けなんだろうか……?）」

パチツとロンガの熾おこした焚き火が爆はぜる。

「えっ……と、メイコ、メイコ・フレアライズです。 助けて……下さ

ったんですよね。

その、ありがとうございます……」

最後の方は消え入りそうな声だった。

「…アイア、先にオレ達の自己紹介からやるべきだったのでは……」
「？」

「うるさい！丸投げしたくせに！

エイクー！」

「ぐあ！ いてえ！いや、つめてえ！？」

「いや、あの、えつと、え……？」

メイコは慌てながらも手と目で強烈に、「落ち着いてください」と訴えている。

「…ええと、私はアイアでこっちはロンガ。

よろしくね、メイコちゃん」

「あ…よ、よろしくです……」

あ、アイアさんも魔法使いなんですか？」

「うん、そうだよ。さっき使った魔法で判ったのかな

って、『も』？」

「ほら、狼の肉が焼けたぞ。

話は食いながらでいいんじゃないか？」

今にも涎を垂らしそうな顔で焚き火の中から、串に刺して焼いた肉を取り出しながらロンガは言った。

「へえ、じゃあメイコちゃんはセドソンに住んでるんだ」

「ちょうどいいな、一緒に行くか？」

「ええ、そうしてもらえると助かります。

私も魔法は使えるんですけど、まだ失敗が多くて……」

「そういえば、何で倒れてたんだ？」

「いや……それも…実は失敗しまして……」

顔を横に向けて、メイコは決まり悪そうに続ける。

「ちよつと…爆発を……」

「え………」

「魔法つて失敗したら爆発するんだっけ？」

困惑するアイアとロンガ。

それを見たメイコも慌てて、

「あ、いや、アイアさんみたいな氷属性の魔法なら、そんなことは無いと思いますが……」

わたしのは……」

そう言つと、服のポケットから短い、金色をした短剣のようなものを取り出した。

短剣…と言うよりは、短い長方形の鉄の棒に取っ手を付けたようなソレは、丸い宝石が並んで埋め込まれていて、どう考えても物を切ることは出来ない形だった。

「フェリ・ウオク！」

メイコが“火属性の弾丸”を意味する呪文を唱えると手に持った魔道具の先から火球が現れ、焚き火にあたるとその火力を上げた。

「へえ…火属性かあ……」

「えへへ…まだまだなんですけどね」

横でソレを見ていたロンガが不思議そうに

「なあ、アイアが火の魔法を使つたり、メイコが氷の魔法使つたりは出来ないのか？」

と、言った。

「出来ないことも無いけど難しい…かな？」

「はあ？」

アイアの代わりにメイコが説明する。

「えつと、“魔法”やそれを使うために必要な“魔力”には、いくつかの“属性”があるんです。人によってどの属性を扱うのが向いているかという適正が違うんですよね」

「なるほど……」

「ロンガ…さんは、魔法使いじゃないんですか？」

「あ、ロンガは……」

「ああ、オレは魔法使いじゃなくて剣士だ」

「……剣士……？」

怪訝な顔をするメイコ。それも当然。

魔法使いなら、魔道具を。

剣士ならば、剣を。

ロンガは一振の剣も持っていない。

「自称、だけどな」

ザリッ

という唐突な音はアイアが杖で地面を引つ掻く音。

「ねえロンガ、そろそろ行かないと日が暮れちゃうよ」

「む、そうか。じゃ、そろそろ出発するか」

「あ、はい！」

アイア、ロンガに引き続いて、メイコも立ち上がる。

「んじゃ、いきますか！」

「で？ 前回、丸一日かかるとか言ってたの誰だったかなあ……？」

「あ…あれ……？ 絶対その位かかると踏んでただけどなあ……」

「確認なかったのかよ！」

「まあ、いいんじゃないですか？」

早く着いたんですし、遅くなるよりは」

そう。セドソンには思ってたより早く着いた。

ただ、それが想像を超えて早すぎたのだ。

具体的には、丸一日かかると思っていたものが、日が暮れる前に着いてしまった。

「ふう……まあいいか。」

「お前は先に宿にでも行ってる」

「ふえ……？ ロンガは？」

「オレは……まあ野暮用、というか？」

「まあ、後から行けさ。」

「ところでメイコ。この街で、肉屋と衛兵所は何処だ？」

「えっと……肉屋はその道の所に、衛兵所は東西の門の近くにあります。」

「今さっきわたしたちが入ってきたのが東門ですね」

「おう、サンキュー。じゃ、また後でな」

「ロンガはそう言い残すと遠くへ走り去っていった。」

「そんな勝手な……」

「あの、宿はすぐそこにありますから」

「あ、うん、ありがとう」

「笑って答えるアイア。」

「じゃ、わたしはこれで。」

「ロンガさんにもよろしくお伝えください」

「あ、そうかメイコちゃんはこのに住んでるんだったね。じゃあね」

「」

その時、私たちは気付いていなかった。気付くはずも無かった。

「私たちを見つめる、殺意の炎に。」

結局、ロンガが戻ってきたのは日も沈んで暗くなってからだった。

「ふう……疲れた……」

ドチャツと音を立てて、持っていた布袋を机に置いてからベットに倒れこむ。

「ちよっと……今までどこ行ってたのさ」

「いや、その袋の中……」

「ふえ？ コレのなかぁ!？」

「違う……中…開いてみる……」

アイアは袋を取り上げて開いてみる。

「え……コレは……」

中に入っていたのは、結構な量の金貨や銀貨だった。

「ちょ、どこから盗ってきたの!？」

「人間きが悪い!ちゃんと稼いだんだよ!」

「どうやってよ!」

「…簡単だよ。その辺の森で狼狩りしてた」

「狼…ってあの……」

「ああ、ナイフウルフだ。」

刈り取った首を衛兵所に持ってって、賃金貰って、肉を捌いて肉屋で売る。

コレで結構手に入る」

「……今までそんなこととして生計立ててたのかよ……」

「ああ、肉屋はともかくとして、最近は凶暴な怪物モンスターが増えるからな。

衛兵所の奴らは奮発してくれるぜ」

ロンガは大きな欠伸あくびをして、仰向けになると、

「それより……どうやら火事が多いみたいだなこの街」

と言っ。

「うん、焼け落ちた建物多かつたね」

事実、アイアとロンガのいる宿の周辺にも二つ三つ、黒く焼けて原型をなくした建物があった。

「なんか気になるの……?」

「いや……なんと……なく……な……」

「ふーん……って、ロンガ……?」

白髪の少年はすでに寝息を立てていた。

「……………」

ソワッ

「！！!?」

前にも感じたことのある、全身の毛が逆立つような感覚を感じて
ロンガは跳ね起きた。

「……………何だ……………?」

音の無い、静寂の夜。

しかし、ロンガの本能は警戒を続けると命じていた。

「ッ!?」

不意に、窓から差し込んでくる月明かりを影が刹那に遮った。

そう思った瞬間

窓の張られた壁が、否、宿の建物が、紅い炎によって縦に切り裂
かれた。

《ゴオオオオオオオオウ》

「なあっ!!!?」

くっ……………アイア!!!」

「ふあ!? え、何!??夜這い!?!」

「んな訳あるか、くそっ!!!」

スキル
フレード・オブ・シルフ
神器! 【風霊の大剣】!!!」

左手から放たれる魔力が、強い光を伴って剣を形作る。風霊の宿
るソレは、完成と同時に風を纏い始める。

「風絶!!!!」

大剣が放つ突風を炎にぶつけて、炎が弱まった隙に、まだ寝ぼけ
ているアイアに担いで荷物を持たせ、窓 だった所から飛び出し
た。

「ちよ、ロンガ!ここ二階!!!!」

「三階だ、バカ!!!」

「バカとは何をお!?」

つかかるアイアを無視したロンガも、何も考えず飛び出したわけではない。

左手に持った剣を地面に投げつけて突き刺し、剣から放たれる風で器用に落下の勢いを弱めた。

「……ツツ!!!」

「ちょ、ロンガ、大丈夫!?」

「……ちよつと痛いけど……大丈夫だ」

すでに道には、宿の主人やその他の宿泊客が逃げ出してきていた。そこにド派手な登場をしたのである。

否応なしに好奇の眼を向けられるのだが、

ロンガは気にする素振りも見せずに言う。

「アイア、その荷物の中にちゃんと杖、入ってるな?」

「あ、え〜つと……うん。あるよ」

「よし。じゃあ追うぞ」

「追う……って誰を?」

「さっきオレ達が飛び出したとき、向こうのほうに逃げていくのが見えた。」

まだ追いつけるかも知れん」

集まり続ける野次馬や火消しでこった返す道の先を指さしてロンガは言った。

「いや、私寝間着なんですけど。」

髪も結んでないし……」

「んなもん気になるな」

「んなもんで!!!」

て、この荷物、服入ってない!!!」

うそ、燃えた!?」

バツ と赤く燃え上がる宿を見上げる。

「!!!」

アイアの驚愕と同時に、野次馬から上がる叫び声。

「あ！あそこ！子供がいる！！！」

「って、んなベタなあ！！！！！」

まさにご指摘の通り。

「でもロンガ！確かにベタだけどホントにいるんだってば！」

アイアの指差す先には、確かに、黒煙の立ち上る窓から微かに身を乗り出している子供がいた。

丁度、ロンガ達のいた階の一番端の部屋である。

「ち……あの背丈じゃ、飛び降りろってのは無理か……」

「ロンガなら助けられないの？」

「そうしたいところだが……」

チラツと、人ごみの中に一瞬眼を向ける。

「……？……！！ 教会か……」

野次馬にまぎれて、黒い礼服が数人。

—サーチエ（Sirtch）教の信者である。

教会は魔力を「神に背く悪魔の力」として、魔法の使用だけでなく、“精霊憑き（スピリウル）”の存在すら否定している。

そんな者たちの前で能力ちからを行使すれば、厄介なことになりかねない。

「でもロンガ！今はそんなこと言ってる場合じゃ……！」

少し離れたところから、子供の母親らしい人物の叫び声が聞こえる。

「ああ、わかってるさ」

そう言っってロンガは地面を蹴って燃え盛る建物へ突っ込んでいった。

「チツ……せめて水ぐらいかぶって来るべきだったか……」
後悔しても今更遅いな。

その上、炎と煙で前も見えんし……

「ゴホツゴホツ……!!」

ち……まあ、この中なら分かんたる！」

フレッド・オブ・シルフ

【風霊の大剣】を発動し、その風圧で炎と煙の壁を切り開いていく。

階段は……あそこか！

三段飛ばしで階段を駆け上がり、二階まで一気に上がる。

たしか、一番奥だったな……!!

《バキイイイツ》

ドアを縦に砕き斬ると子供の泣き声が聞こえてきた。

「そこか！」

つて……え……？

泣き声の発信者をみたとき、思わず絶句してしまった。

いや、発信者達というべきか。

「「「うわあああああん!!」「」「」

さ……三人も居やがる……!!」

「ゲホツゲホツ!!」

くそ……煙も充満してきやがった……

「あああ!!!!もう!!全員こつち来いやあああああああ!!

!!」

「へ、わあああああ!!」

驚く子供を無理矢理抱えてドアから出る。

外に教会の奴らがいる以上、さっき使った方法は使えない。

つてか、そもそも両手にガキ抱えてる時点で使えないんだが。

「二人までなら片手で抱えられるんだが……

うおっ!？」

焼け落ちた天井が炎を纏って落ちてきた。

「「「うわああああああん!!!!」「」「」

「だああああ！！叫ぶんじゃねええ！！！！
つて、ゲエツホゲホツ……！！！」

自分で叫んでむせてたら世話あねえな……
両手がふさがっては神器スキルも使えないので、無理に炎の中を行くし
かない。

くそ……煙の吸いすぎだ……意識が……

子供達も咳き込み始める。

まずい、速く、はやく

そのとき、

「おい、君！！大丈夫か！！！」

炎の向こう側からその声が聞こえた時は流石に救われた気がした。

「ロンガ！ 大丈夫だった？」

「ああ……まあ、な……」

でも逃げられちゃった」

悔しそうに道の向こうを見るロンガ。

「もう、今はそんな事どうでもいいでしょ？

あんたが持ってきたお金も火の中だよ。

これからどうすんのさ」

「……………お前、髪下ろしてると別人みたいだな……………」

「んな事あ今関係なあああい！！！！！」

「ごあつ！！ コラ、杖で殴るな杖で！！！」

「あ、あのっ！」

横からかけられた声に振り向く二人。

「あ、メイコちゃん！！！」

「よかった……無事だったんですね、お二人とも……………」

そう言いつつも、その眼はずっとアイアを見つめていた。

「……………？ どうしたの？」

「アイアさんって、髪下ろしてると印象全然変わりますね！」

「プフっ！！！！ ゲホッごほっ…！！！！」

盛大に吹き出すロンガ。

「つな…………… そ、そんなに……………？」

顔を真っ赤にして狼狽するアイア。

「フフフ…………… よければ私の家へどうぞ。

服もお貸しできますよ？」

奥まった、日も届かなさそうな路地にあるそこは、家と言うより、隠れ家、と言った方がしっくり来るような場所だった。

一通りの家具がそろっている 逆に言えば、それだけしかない 殺風景な部屋の中でアイアはメイコが着替えをもってくるのを待っていた。

当然、隣にはロンガがいるが、彼は普段の服のままなので着替える必要は全く無い。

全く無い…………… 事も無いのだが。

彼の服は昨日から変えてない上に、火の中への特攻もあり、随分と薄汚れて所々焦げていた。

「はあ…………… 何でこんな路地裏みたいな…………… 家…………… なのかココ？」

「ロンガ…………… ちよつと失礼じゃない？」

そこに奥からメイコが服と淹れたたてのお茶を持って現れた。

「フフ、仕方ないですよ。」

私の家は、曾祖父の代から魔法使いウィザードですから、教会の眼の厳しいこの街ではどうしても隠れ住みたいになっちゃうんです」

「でも昔からこんなトコに住んでたわけじゃないだろ？」

出されたお茶を啜りながらロンガが言う。

「ええ、まあ……」

あ、それよりアイアさん、はい服！」

「ああ、ありがとね」

……ええ〜つと……」

チラリ

「……………」

空気を読んだのか、ロンガは無言のまま外に出て行った。

外に出たオレは、火事のことを考えていた。

どう考えても、建物を二つに割るような、あの発火の仕方はおかしい。

少なくとも普通の人間の仕業ではない。

だとすれば、あの火事は スレリウル いや、そんな事考えなくてもわかってる ウイザート 間違いなく、“精霊憑き”の仕業だ。

“魔法使い”の可能性も考えたが ウイザート 今。今この場で、その可能性は消えた。

路地から出て、しばらく行ったところの大通り。

当然、火事も収まっている上に、現場から離れたこの場所の、この時間に、人通りなどあるはずも無く。

故に。

ロンガは目の前に現れた、黒衣の人影を、

「敵」と見なしていた。

「スベリワル精霊憑き”……しかもやる気満々か」

ロンガがそう判断する材料は何を隠そう、その人物の右手に握られた、巨大な剣。それも、今日の宿のように轟々と燃え盛る大剣だった。

「ち……何だお前……何の用でもいいが、今日はもう疲れてんだ。またにしてくんねえか」

ジャキツ

人影が、大剣の切先をロンガに向ける。

明らかな敵意の表れ。

「……………!!」
けれどロンガの驚きは、全く別のところから沸いて出たものだった。

燃え続ける剣が、松明のようにその持ち主のシルエットを浮彫りにする。

女だった。早い話が、その体型が女でしかありえないものなのだ。

「……とりあえず……またにはしてくれそうに無いな」

「……………」

黒い革素材のコートは中心に大きく十字架があしらわれ、教会の関係者であることを示していた。

顔は同じく革素材であろう仮面に隠れてわからないが、その後ろからは赤茶色の髪の毛がふわりと腰まで流れている。

タン！という音は、その髪をなびかせて地面を蹴り、ロンガに襲い掛かる音。

「オオオツ

「くつ、フレード・オブ・シルフ【風霊の大剣】ツ！！！！」

ガギイイイイイイ！！！！

剣と剣、風と炎がぶつかり合う。

ゴオオオオオオオオ！！！！

勢いのやまない炎と大きな刃を防ぎながらロンガは問う。

「ハ、今日の火事もお前か！」

どうやら狙いはオレなみたいだが、わざわざ建物ごと燃やす必要あつたのかよ!？」

「……手加減はしたさ。お前らだけなのがわかっていたら全力で灰にしてた」

仮面の裏から聞こえてくるくもった声はされどやはり、女のものだつた。

「お前ら……って事は狙いはオレだけじゃないのな」

「……!!」

大きく後ろに下がって距離を取る女。

チャキツ

ロンガは左手に持った大剣の切先を相手に向けて続ける。

「まだまだ訊きたいことは沢山あるんだぜ」

「貴様に……答えてやることなど何も無い」

同じく彼女も切先をロンガへ向ける。

ゴツ

風と炎が勢いを増す。

「風絶……」「劫火……」

互いの必殺技が放たれる　その刹那

「ちょ……ちよつと待ってください!!!」

「……!!!?」

息を切らして現れたのは他ならぬアイアとメイコだつた。

「ハア……は、は、ゴホツゴホツ!」

全力で走ってきた上に大声で叫んだためか息切れするどころか、むせるメイコ。

「ロンガ、ちょ、ちよつと……待って……!」

アイアも息を切らしながらメイコの言葉を引き継いだ。

「メイコ……何故戻ってきたの?」

「……!!!?」

ロンガの驚きは、されど無理も無かった。

なぜならその声は、先程までロンガの戦っていた女から発せられていたからだ。

「……お姉ちゃん……」

「なにいいいい！！？ し…姉妹！？」

「……」

連続で驚きの声を上げるロンガに対し、すでにメイコから聞かされていたのか、アイアは言葉を発さない。

「私は……止めに来たの……」

もう……やめてよ、キョウコお姉ちゃん！！

これ以上……そんなことしないで……！！」

メイコの嘆願に、黒衣の女、キョウコ・フレアライズは感情のこもらない声で答える。

「今更……今更後には引けないわ。」

あなたが望むなら、今、此处で、終わらせてあげる」

右手の大剣が炎の唸りを上げる。

「！？ あぶなっ……！！」

「劫火（げんか）（ごうか）一剣嵐！！」

炎が、無数の刃となり、まさに嵐の如く、メイコに襲い掛かった。

ポタッ… ポタッ…

「あ……ロンガ…さん……」

「へえ……身体を張って女の子を守るなんてカッコイイじゃない。

でも……いくら風の守りがあるからって、今の技を真正面から受けちゃマズいんじゃないの？（まあ、“受けきれた”時点で賞賛モノなんだけど）」

「ハ……風絶…一閃！！！！」

切先が弧を描くと同時に放たれる風の刃。

「フン」

かわされた風の刃は女の元いた場所の地面をえぐった。

「アイアアあああ!!!」

「エイク・チエイン!!!」

「なっ…!?!」

ガチイイ

突如、キョウコの足元に氷の鎖が現れ、地面に足をくりつけた。

「フン!こんなもので、動きを止められる訳が!」

確かに、炎の大剣に氷の鎖では、どう考えても圧倒的な優劣がついてしまう。

だが、その一瞬の間だけで充分だった。

「風絶一閃!メガ・咬^{バイト}・スラァツシユ!!!」

《ゴオオアアアア!!!》

圧縮され、密度、速度ともに増した風の刃が唸りを上げて、獣の牙のように標的へ襲い掛かる。

「くっ…劫火剣嵐!!!」

「いけえええええええ!!!」

結果から言えば。

その夜最後の風と炎のぶつかり合いは、僅かな差だが、風の勝ちだった。

本当に、僅かな。

最後に残った風の刃の欠片が、キョウコの仮面を破く程度の。

仮面に隠されていた顔は、浅く切れた額から血を流してはいたものの、敵意と殺意をいまだ放っていた。

だが、それがロンガには、なぜか悲しいものに思えて。露になったその顔をずっと見つめていた。

「お姉…ちゃん…」

キョウウコは声を放ったメイコの方には一瞥だけして、白み始めた東の空へ顔を向ける。

「ふう……いいわ、決着はまたにしましろう白髪のボウヤ」

「白髪って言うんじゃねえ、コレは銀髪だ！」

それからボウヤじゃねえし。

オレの名前はロンガだ！！

ロンガ・シーライドだ！！！！

そもそも、こっちは何で襲われてんのかもわかってねえんだよ！

ふざけんなあ！！！！」

ロンガが呼吸も挟まずに放った台詞には、軽い笑みだけを返して朝靄の中へ消えていった。

「ちょ、ロンガ！」

「どついうことだよ、オイ。」

アレがお前の姉貴！？

何なんだアイツは！

何で“スピリチュアル精霊憑き”が教会にいる！

何でオレを襲ってくるんだ！

お前は全部分かってて何も言わなかったのか！？

「……エイク・ブリザ！！」

がき　　ん

「があああ！！つ、冷たあああああ！！？」

「頭冷やせ、バカ。」

そんな一気に詰め寄られても答えられないし！　メイコちゃんが
可哀想でしょうが！」

「あ、いえ……大丈夫です……」

順番にお話しますから……」

メイコの回想

～あの頃のフレアライズ家～

私のお父さんもお母さんも、二人とも立派な魔法使いだった。ウィザード

毎日研究は欠かさなかったし、近くの森で怪物が暴れたりして街が危なくなると率先して戦ったりもしていた。

街の人や、教会の人たちには好かれなかったけど、私はそんな両親が誇りだった。

私自身はそんなに魔法は上手くはなかったけど、そんな両親の血を引いていることが誇らしかった。

きつと、お姉ちゃんもそうだったと思う。

私より七歳も上なのに魔法は私と同じぐらいしか使えなかったけれど、私よりもずっとずっと努力していたし、いつも私には優しくしてくれた。

私は、とても幸せだった。

あの日、私の四歳の誕生日までは。

メイコの回想、 続き

～すべてが狂い始めたあの日～

今から言えば、十二年前になる。

その日、私はいつもより早く起きた。

何のことはない。ただ自分の誕生日に浮かれていたただけだったと

思う。

隣で寝ていたはずのお姉ちゃんは、すでに布団から抜け出した後だった。

「お母さんももう起きてるかな」

寝室のドアを開ければ、短い廊下。

とたとたと、リビングへ急ぐ。

リビングのドアを開ける前に、私は視界が少し霞んでいることに気付いた。

目をこすってみるけれど、なんら変化はない。そういえば変なおいもする。

不審に思いながらもドアを開ける。

「ああ。おはよう、メイコ」

そこに、お母さんとお姉ちゃんは居た。

所々火が燻って煙が薄く立ち込める部屋の中に、床に倒れ伏したお母さんと

右手に大きな、火を纏った剣をもったお姉ちゃんが。

「^{スキル}“器”の暴走……か」

ロンガが頭をかきながら呟く。

「あるの？そんなこと」

「ああ。“^{スピリチュアル}精霊憑き”が“^{スキル}神器”を使うときは普通、遺伝子に刻まれた感覚と、無意識になんだが、過去に使ったときの記憶を元に魔力で生成するんだけど、一番初めの発動は過去に使った記憶なんてあるはずもないし、そもそも^{そんなモノ}神器が使えらることも知らないから、その代わりに何か、強い感情や想いが引き金になることが多いんだ。

でも、幼い、心の不安定な時期にそんな発動をすれば、御し切れ

ずに滅茶苦茶な発動をしてしまう……なんてことがままある」

「へえ……」

「きつとお姉ちゃんもショックだったんじゃないでしょうか。かなり動揺してましたし」

「まあ、大体暴走やらかすと、人を傷つけるからな。相当な心の傷だろうよ」

「大人の精霊憑きスピリチュアルでも暴走つてするの？」

「さあ…大人になってから初めて発動させることもあるし、情緒不安定なまま使うとかするとあるかもな」

「……」

「で？ さっきの回想、もう充分長いけどまだ続くんだろ？」

「え、長い……ですか？」

「ああ、もう！」

まだ第二閃の中盤終わったトコなのに！

無駄に行数浪費しないの！

作者としてもそろそろ展開早めていきたいところなので、お願いしますメイコさん。

「は、はあ……わかりました」

当然、アイアの台詞後の作者のぼやきはメイコには伝わっていないので。お忘れなく。

メイコの回想、続きの続き

～そしてお姉ちゃんは～

どこに行っていたのか、外から帰ってきたお父さんに火は消し止められ、火事にはならなかったけど、お母さんは体の左半分に大火

傷を負っていた。

お姉ちゃんが火竜サラマンダーを宿す“精霊憑き”スレリウルだと分かった後も、お父さん、お母さんは変わらずお姉ちゃんに接した。もちろん私も。

だけとお姉ちゃんはそれつきり口数も減った、笑顔も減った、私の相手もあまりしてくれなくなった。

魔法も全く使えなくなつたみたいだった。

そしてお姉ちゃんは、何年か経つと家を出て行った。

その頃からだ、教会が異能者を取り締まる目がきつくなつていったのは。

メイコの回想、続きの続きの続き

（地獄）

五月の、暖かな日だった。

その日の午後、私は外から家に帰ってくるところで、家の中の異変に気付いた。

家に居るはずの両親の音が聞こえない。

代わりに何かが爆ぜる音。

煙の匂い。

「まさかっ……！！」

ドアを開けてそこにあつたのは、あの日の出来事をそのまま地獄にしたような空間だった。

燻るところか燃え続ける家具、壁、床。

全身火達磨で倒れるお母さん。

真つ二つにされたお父さん。

十字架をあしらつた黒いコートでそこに立つお姉ちゃん。

「ああ、お帰り、メイコ」

「な……なん……で………？」

ジャキッ

「せめて、せめてあなただけでも逃げて、メイコ」
お姉ちゃんは、泣いていた。

「逃げてメイコ。私の前に現れないで。」

「でないと、あなたも殺しちゃう」

「なん…で、あ、ああ、ああああ、」

ああああああああああああああああああああああああ

あああ……………

ああああああああああああああああああああああああ
あああああああああ

「え、ちよ、メイコちゃん!？」

「な、おい!!」

回想の途中、メイコが頭を両手で鷲掴みにするように耳を押さえ
て、両眼をギリギリと見開き、うつむいて震えながら叫びだした。

「だ、大丈夫か…………？」

「ああ、ああああ…………、」

「だいじょ…………う、ぶ、です…………」

「全然大丈夫に見えないよ!

汗もびっしょりじゃない!」

「ハア、ハア、ホントに、大丈夫、です」

「……………つらいか？」

「……………つらい、ですが…きっと、お姉ちゃんもつらかったんでしょ
うね。」

「私は……………解ってあげられなかった」

「……………」

ロンガは悲しそうな眼で、息を整えるメイコを見つめていた。

「それから…私は、にげて、にげて、コレだけ持って逃げて、ココに逃げ込んだんです」

短剣のような魔道具を机の上において、言う。

「ココもこの魔道具も、お父さんが魔道の研究に使っていたものです。」

それから、後から知ったことですが、あのコートは、教会の中でも“断罪者”と呼ばれる人たちが着る服だそうです」

「“断罪者”？」

アイアの疑問符にロンガがその辺の本棚にあった本を取り出し、項を探して音読する。

「『別名、粛清者、教会の異端、魔力やその使用を「異端」の技として認めていないサーチエ教会が、異教の取り締まりや、街を守るため特例として異能力の使用や戦闘を認められた集団』……だ、そうだ」

「つまり…異能者の掃討のために、異能者を使うってこと……？」

「そういうことです……」

「大方、自分に宿るチカラを罪にでも感じて神とやらに許しを請うたんだらうよ」

「でも…いくらなんでも、あんな、他人を巻き込むようなやり方でいい訳がないです。」

教会がよしとしてるのが信じられません」

「まさか、この街で焼け跡が多いのは……」

「……全部、お姉ちゃんのせいです……」

初めは元いた“魔法使い”^{ウィザード}の家、残った人たちが同志の死や教会を恐れて移住すると、旅でやって来た“魔法使い”^{ウィザード}や“精霊憑き”^{スピリチュアル}が泊まった家。

でもまさか、他にたくさん人の居る宿まで襲うとは……

「ごめんなさい！私があそこに泊めなければ襲われることもなかったのに……！！」

目に涙を浮かべて謝るメイコ。

「まあ、そんなことはどうでもいい」

「「「どうでもいいって!?!」」」

「それより解んねえのは、なんで両親まで殺す必要があったのか、いくら“断罪者”とはいえ、教会のイヌになつたわけでもないだろ
うが」

「なにか弱み握られてるんじゃない？」

「メイコちゃんだけはわざと逃がしてるし」

「ハ、かもな。」

「で？　メイコちゃんとやらはどうしたい、いや、どうして欲しい
のかな？」

「え……」

「（あ……この顔は……）」

「アイアはロンガと始めてあったとき、大蛇と対峙したときのロン
ガの表情を思い出していた。」

「お姉ちゃんを……助けてください」

「今までで一番意志のこもった声で、メイコは言った。」

「で？　助けるって言ったって、あんたにどうにかできるの？」

「次の日…厳密には同日の午後、町の往來を行くアイアは、いぶか
しむような口調で隣のロンガに言う。」

「まあ……囚われの姫を助け出すわけじゃねえから、物理的手段だ
けじゃ無理だよな」

「だから、あんたに説得とかが出来るとは思えないんだけど？」

「アイアの言葉にロンガは笑って答える。」

「まあ、『拳で語り合う』とかいう言葉があるくらいだし、何とか
なるんでねえ？」

「適当!!!?」

「あんだ解ってんの!？」

「今回は自分だけの問題じゃないんだよ!？」

「解ってる。わかってるさ。でもな、アレがいまさら言葉でとまると思うか？」

「十中八九とまんねえよ。それも解ってる」

「……………」

「だから、とロンガは続ける。

「だからオレが、一発ぶつ飛ばしてやるんだよ。教会とやらも気に入らねえしな」

「その台詞は、左手の拳を右手で受け止めながら。

「ロンガ……………」

「あの……………ロンガ・シーライドさまでございますね?」

「!!!!!!!」

「突如、後ろからかけられる声。

「振り向くとそこに居たのは、白いローブの男。細く黒い髪の毛をボサボサにのばし、鋭い目でこちらを見つめていた。

「ワタクシ、キロ・ウッドビレッツジと申します…て、そんなことはどうでもいいですね」

「突如現れた謎の男。けれどロンガはその男の首に、ロザリオが掛けられているのを見逃さなかった。

「教会……………か……………?」

「…察しがいいですね。

「ええ、キヨウコ・フレアライズ様がお待ちですよ」

「ロンガ……………!」

「ロンガは、前に出ようとするアイデアを遮って言う。

「ここはオレ一人で行く。

「お前はメイコと一緒に居ろ」

「え、ちょっと!何だよ!!!」

「昨日の傷も治ってないのに!」

「ハア……お前の魔法、氷ばっかだろ……」
「あ」

「あの炎の大剣に通用なんてしないし、メイコは戦うどころか、一人ではつとくのも心配な状況だ。」

「だから、オレが一人でぶっ飛ばしてくる」

「……………わかった。」

「…無事で帰ってくるよね？」

杖で小突いてくるアイアにロンガは、

「そんなもん、言わずとも心得てる」

「そう胸を張って答えた。」

「さあ、案内してくれるんだろ？」

「そういつて、キロの方を向く。」

「はい。」

「キョウコ様は大聖堂でお待ちですよ」

「大聖堂……言うだけあってデカイな……」

「もちろん、建物のでかさでビビるロンガではない。」

「では、ワタクシはこれで」

頭を下げてから去っていくキロという男。

「ハ、まあ、巻き込まれたくは無いよな」

ロンガは門の取っ手に手を掛けた。

「ようこそ。ロンガ君」

サーチエ教の聖堂には、信者席というものが存在しない。信者はミサなどでは石でできた床に正座をし、ひれ伏すようにして神に祈

るのだ。

この地形条件は、心の底から神など信じていない二人にも好都合だった。

つまり

「先に確認しときたいんだけどさ、ココ……そんなに簡単に崩れたりしねえよな？」

好き放題暴れることが出来る、と。

「安心して。それに今日は他の人は誰もいないし、信者もたまにしか大聖堂には入らないわ」

キヨウコは長い髪の毛を後ろに流しながら言う。その顔には仮面はつけられていなかった。

「なるほど、邪魔は入らないってわけだ」

「私も、君が一人できてくれて嬉しいわ。」

「……思いつきやり合いまししょうか」

「カタカナで言うな…… 誤解を招くだろ」

ロンガの左手が、キヨウコの右手が光に包まれる。

「そう？」

「じゃあ、思いつきり殺り合いましょ……！」

光が、さらに強くなる。

「“神器”発動……！」

そろそろ声、そして、

「【風霊の大剣】……！」

「【火竜の大剣】……！」

形作られる、二振りの、されど形の全く違う、大剣。

ロンガとキヨウコの視線が交錯する。

両者共に大剣タイプの神器、宿る精霊は互いに四大元素クラス

「（パツと見、互角ってトコかしら……）」

「（基本性能は五分 差がつくとすれば……）」

両者の剣が、虚空を斬り裂く

「風絶一閃……！」 「劫火剣嵐……！」

ガアアアツ

炎と風の刃が激突する。

「なっ……………!?!」

五分に終わるかと思われたその激突は、実にあっさりとロンガの負けだった。

「うおおおおおう!!!」

ドガガガガアアア!!!

間一髪、劫火剣嵐をかわしたが、みつともなく床に手を着くハメになった。

「ほらあ、言ったじゃない。思いつきり殺り合いましょってさ」

「ハ……………前は本気じゃなかったのか……………」

（てか、そもそも“メガ”でギリギリだったんだ、押し切れるとはおもってなかったが……………こうもあっさりとは……………）」

「ホラ、次行くよ?」

二方向からロンガを挟むように放たれる火炎。

「ハ!ただの炎で、オレに通用するわけねえだろ!!!」

ロンガも剣を振り、風圧で薙ぎ払う。

地面を蹴り、キョウコへ接近する。

轟、と襲い掛かる炎をかわし、防ぎ、

ガキイイイイ!

剣による小競り合いに持ち込んだ。

ギリギリギリ……………

「お前……………なんで断罪者なんかになったんだよ……………?」

剣の切先はどちらにも動かないまま。けれど攻めたはずのロンガは逆に押されていた。

何せ、身長と変わらない大きさの剣が燃え盛る炎に包まれているのだ。その熱量は半端ではない。

「それをきいてどうするの? 何も知らないボウヤの癖に!!!」

「ぐっ……………」

さらにきつくなる炎。

今も、逆巻く炎を風で防いでいなければ、ロンガはとっくに消し炭になっっていることだろう。

「劫火!!!」

「なっ!?! 剣を振らずに……!?!」

「剣嵐!!!」

ゴガガアア!!!

「がああああ!!!」

高く吹っ飛ぶロンガ。

そこにさらに追い討ちがかかる。

「劫火剣嵐!!!」

逃げ場の無い空中で、ロンガの眼には襲い来る炎がはつきり映っていた。

「ぐ……!!!」

メイコの隠れ家で、アイアは向かいで机に伏したままのメイコを眺めていた。

「……メイコちゃん、生きてる?」

「はい……生きてます……」

「何か食べる?」

「いえ……食欲無いです……」

そっけない返事にアイアは溜息を返す。

今日アイアが戻ってきて、キョウコが使者を通じてロンガに宣戦布告をしたと聞いてからずっとこの調子なのだ。

「何で……お姉ちゃんはあることやってるんでしょうか……」

「多分……何かを守るため……じゃないかな」

「守るため……ですか……」

顔を上げずにアイアの言葉を反芻する。

「どうしてそう思うんですか？」

「う〜ん……なんていうか、ほんとうに、なんとなくなんだけど、そんな必死な感じがしたんだ」

「必死、ですか」

メイコは顔を上げた。

「じゃあ、私は、どうすればいいんでしょうか」

「さあ？それは自分で考えなよ」

ニコリと笑ってアイアは言う。

「さあ、つて……（いきなり適当ですか）」

「ねえ、メイコちゃんさあ……」

「はい？」

自分のポニーテールの毛先をいじりながらアイアは頬を緩めて言う。

「行っちゃおうか、教会大聖堂」

ガラッ

瓦礫を払って起き上がる。

キョウコの攻撃は、ロンガを容赦なく壁面に叩きつけていた。

「く……」

ブレード・オブ・シルフ

【風霊の大剣】を横に振って持ち直す。

体中傷だらけだった。

「ふ〜ん……やっぱりタフだねえ……」

「ハ、それほどでも」

ボタリ、と血の塊が床に落ちる。

「お前……やっぱり強いな……」

「それはどうも」

ニコリ、と笑み。

「ハ、劫火剣嵐……単純に炎を刃にするのではなく、小さな炎の刃の集合体か」

「へえ、気付いたんだ。流石ね。」

そう、劫火剣嵐は【ブレード・オブ・サラマンダー火竜の大剣】の炎を固めて圧縮して作った小さな刃の集まり。

その刃の一つ一つが小さいけれど爆発性があることも……気付いたでしょうね」

「なるほど、固体でないもので刃を作ろうとすれば、どうしても切断力は落ちてしまう。けれどコレなら殺傷力は補えるってわけだ。」

（それどころか強くなってる気がするし！

しかも一つの塊じゃないおかげで、相殺するのも難しい……）」
歯噛みするロンガ。だが、その類は吊り上っていた。

「（やっぱり楽しい！！小細工じゃねえ、知恵と力を使って戦う感覚！！）」

ハッ！次こそオレの番だ！！！

喰らえ、ギガバイト（・・・）一咬・スラッッシュ！！！！」

切先が、地面すれすれを通る軌道で、薙ぐように振られた剣から放たれた風絶一閃。

《ゴオオオオオオオオオオオオオ》

それは、“メガ”のときのような、一つの塊とは違い、いくつかの風の刃が纏まってさらに大きな刃を形作っていた。

「望むところだッ！！」

劫火！！！剣ッ嵐！！！！」

おもいつきり剣を振って放たれたソレは、今まで一番デカく膨大な熱量を誇っていた。

「「おおおおおおおお！！！！！！！！！！」」

《ドガアッ！！！！！！！！》

大聖堂を揺らす、大きな音。

魔力により生成された風と炎が、互いに限界を超えて弾けた。

「ぐっ……！！（五分……！？あの子は……！！？）」

埃や煤で数瞬遮られていた視界が明ける。

そこにロンガはいなかった。

ただ、キョウコとロンガの間、ちょうど中間辺りの床には深々とロンガの大剣が突き刺さっていた。

「逃げ…… ちがつ……！！！」

反射的に、上を見る。

《ゴオオオ》

その剣は、はっきりと風を放っていた。

それどころか、その剣を中心に、大聖堂を埋め尽くすほどの風が逆巻いていた。

「うおおおおおおおお！！！！！！！！」

上空から風を纏って落ちてくる、否、突っ込んでくるロンガ。

「風絶！散刃！！！！」

「さ……散刃……！？」

壁に、床に、天井に、風による刀痕がついてゆく。だが徐々に、風の刃が精製される範囲がロンガの周りに限られてくる。

やがて、ロンガ自身が幾筋かの刃を纏うような形になった。

「おおおおおおおお！！！！」

「あアあああ！！！！ 劫火剣嵐！！！！」

もう幾度目かもわからない 風と炎のぶつかり合い。
けれど

「（な、破れ、ない……！？）」

“炎を押し固めた刃の集合体”である劫火剣嵐が、ロンガの腕、いや身体に纏わる風の刃に削り取られていく。

「な、なんで……っ！！」

ロンガの身体は、キヨウコ以上にボロボロだった。

「……あのままやってれば、魔力切れでオレの負けだったんだ」

「……………」

「なのにお前は、途中でわざと炎を緩めただろ。そのおかげで、散刃を打ち込む隙ができた」

「……ただ……『疲れた』と思っただけよ」

「……………訊いてもいいか、なんで“断罪者”になったのか」

私が、初めて“神器”^{スキル}を使ったのは十一歳のとき。

そのときから私には、いや……多分その前から、私には居場所がなかった。

もともと少ししか使えなかった魔法も、その日からなぜか全く使えなくなった。

魔法使いの家系だけで、教会や信者達からは白い目で見られるのに、“更なる異端”が家に居ることが世間に知れたらどうなることか。

何年か経ったある日。

夜遅く外から帰ってきたお父さんの機嫌は悪かった。

「教会のカタブツどもめ……」

「異能者狩りだと？ふざけやがって……」

「お父さん、異能者狩りって何の話です？」

「どうもこうも、この街から魔法使いや魔術研究者を残らず追い出す気だ。」

すでに何人が断罪者が集まってる」

「……ココも危ないんじゃないんですか？」

「……あの子のこともありますし……」

聞いてしまった。

「そうだな……“スピリチュアル精霊憑き”がいるっただけで、教会からしたらもう家ごと、格好の迫害対象だ。全く……不幸な子だよ」

聞いてしまった。

キイ

「……！」

もう寝ているかと思っていたのだろう、小さく開いた扉の音にお父さんとお母さんは驚いた様子で振り向いた。

「キョウコ……」

聞いてしまった。聞いてしまった。

きいてしまった。きいてしまったきいてしまったきいてしまった。

もう、この家にはいられない。

「なるほど、それで家を飛び出して協会に助けを求めたわけだ。

親を殺したのも教会の？」

「ええ。『穢れた血で神の加護を受けることは許されない。自らの血族の血をもって、穢れとの決別をせよ』なんて、大層なことを言われたわ……」

「……」

「でも、メイコだけは……メイコだけは、どうしても……」

キョウコの目には、涙が滲んでいた。

「アイツは……結構しつかりやってるみたいだし、気にしなくてもいいんじゃないか？」

お前らならこの街出て来ちゃってけただろ」

「逃げるの？教会から？ はあ

……無駄よ。私が“断罪者”を続ける理由の一つが、人質よ。も

ちろん正しい意味じゃないけれど、本気になれば私やメイコの命なんて軽く吹っ飛ばわ」

「……ふざけるな」

「……!!」

「何だお前、結局怖いだけか？」

バカ言ってるじゃねえよ。

少しでも今の状況を変えたいと思うなら、自分で変えに行ってみやがれ!!自分の足で歩いて見やがれ!!

臆病なお前に巻き込まれる奴らはたまったもんじゃねえんだよ!

「!」

「ロンガ……」

そうね、ホントにそう。もっと早く……気付いていれば……」

そこまで言って、キョウコの意識は途絶えた。その目から流れた涙が顔に筋を残していた。

その顔を見下ろしてロンガは、

「ハ、辞世の句でも詠んだつもりかバカめ。

急所も一応外れてるし、それほど大きな傷でもない。すぐに治療すれば、大方死なんだろう」

そう独り言を言った。

ロンガの耳には、二人分の足音と、扉を開く音が、はっきりと聞こえていた。

二日後

私たちはゼドソンを出ることになった。

一命を取り留めたキョウコさんは、メイコちゃんとも仲直り(?)してみた。

これからどうするのか、どうやって罪を償うのか、二人で話し合
っていくそうだ。

「アイアさん、ロンガさん、またいつかお会いしましょう」

「うん。今度はもっとゆっくりお話ししようね！」

「ロンガ、ちよっと……」

「ん？」

キョウウコさんに手招きされ、耳を近づけるロンガ。

ボソボソツ

「~~~~~!!!」

一気に真っ赤になった。普段の肌が白いせいか、すごく分かりや
すい。

「え!?!なに、何言われたの!?!」

「フッフ、それは秘密よ、アイアちゃん」

「……ホントに何言ったのよお姉ちゃん……」

ロンガさん茹であがった海老みたいだよ」

「ハ、な……にやんでもねえよ……」

その程度の台詞で噛む辺り、絶対なんでもなくないだろう。

セドソン西門で別れを惜しむロンガ達を、遠目から見つめる視線
があった。

西門近く、喫茶コース。

その窓際の席で、コーヒーをすするキョウウコ・ウッドビレッジ。

キョウウコがロンガを呼ぶために遣った、教会信者である。

「ええ……はい。いまからセドソンを出るようです。……ええ、
サラムンター火竜”は負けたみたいですが生きてます」

テーブルに置かれた、罽褸をかたどった蜘蛛。その腹から出る二

本の太い糸。その先端は膨らんで小さな玉になっており、キロはそれを耳にはめていた。

「成長率で言えば“風霊”^{シルフ}よりも“火竜”^{サラムンダー}のほうが今回はよかったですね。

もつとも、“風霊”^{シルフ}の方の基本スペックも侮れませんが……
はい……了解です。

次は直接接触してみます。

……大丈夫ですよ、殺してしまうことは無いですが、こちらが負けることはもつと無いです。……ええ、それでは

長らく、独り言のように何者かと会話してから、キロは向かいの席に座る女に声をかけた。

「グラム、そろそろ行くぞ」

「ん、わかった」。

でも後、三皿は食べさせてえ」

グラムと呼ばれた女の前には、すでに建築材料十二皿の塔ができていた。

「……どう考えても食い過ぎだ……」

キロと比べて数段は若い、いや、幼いこの少女の何処に朝っぱらから十五皿もの料理が入るといのか。

しかも、すべてディナー級の量と、バカにできない金額の物だった。

「ハア……あ、そうだお前、ムラマサはどうした？」

「ん、それならあそこ」

そういつてグラムは、店のカウンターのほうを指差す。

全身真っ黒なソイツは、なんと店の主と談笑していた。

しかし、そいつには小さな翼があり、大きな耳があり、拳句の果て、二本の尻尾があった。つまり、翼の生えた黒い猫又、である。

「ムラマサ、そろそろ行くぞ」

「ん？そうか。うむ。楽しかったゾ店主よ」

小さいせいか、その翼には飛行能力は無いらしく、普通の猫よろ

しく、床に下りてキロのほうへ歩いてきた。
「さあて……」

では、「暴食のキロ」始動しますか！」

暗雲が、立ち込め始めた。

終わり

第二閃

第三閃『黒猫と精霊憑き』

第三閃『黒猫と精霊憑き』

自分は捨てられたのだ、と思った。

このくだらない能力ちからを持つ前のことは思い出せない。

多分……非力な怪物モンスターだったのだろう。

その非力さゆえに、バカな人間どもに捕まって、なにやら実験台にされたようだ。

消毒液の匂い。白衣の人間。目に映る手術道具、魔術道具。

死に逝く同類たち……

口クな餌も貰えず、自分もすぐ同類たちと同じところに逝くのだ
と思っていた。

しかし、

「ったく……此処の奴らは……おい、大丈夫かお前」

予想を裏切って、差し伸べられた救いの手。

だから。

そんな馬鹿者の力になれるのなら、

自分の……小生の、このくだらない能力ちからも悪くない、と思った。

がさがさ、ガサ

「え〜と……」

セドソンからいくらか道を行った所で、アイアは荷物を漁っていた。

「……何をしてるんだ？」

アイアの後ろの木の、さらに後ろから現れたのは白い髪、白い肌、白い服の少年、ロンガ。

「んー、探し物……あ、あつた!!」

アイアが荷物の中から引っ張り出したのは水晶のネックレスだつた。

「ああ、それが。」

「そういや着けてたなそんなの」

「ふう……火事で燃えてたらどうしようかと思った……」

「大切なんだな」

「うん。宝物なんだ　って、着替えた？」

アイアがやつとロンガの方へ振り向くと、彼の服装は若干だが、前と違っていた。

「ハ、まあ、せつかく貰ったし、前のはボロボロだしな」

ロンガの着ていた、白い半袖の服は、戦闘やら火事の建物への特攻やらで、ぼろきれに近い状態になっていた。

それを見たメイコやキョウコが仕立ててくれたのだ。色は結局白だが。

「うーん……長袖つてあんまり着ないんだよな……寒いのが平気だしな……」

「でも似合ってるよ？」

「それにしてもいろいろ貰ったね」

「ああ、そうだな……」

ロンガ達がキョウコ達に貰った物は服だけではない。

食料や貨幣、その他色々、である。

「で、次はドコ行くんだっけ？」

「とりあえずこのまま行けばファフロットだな」

「ファフロット？」

「ああ、ぶつちやけ次行くトコ決めてなかったからな……メイコが勧めてくれたんだ」

「何かあるの？」

「なんか古代遺跡……が近くにある……らしい……」

そう言いながらロンガは、空を見上げて何かの匂いを嗅いでいた。

「……どした？」

「……急ぐぞ、一雨来そうだ」

ロンガ達の大分後ろ、二人と一匹の奇妙な一行はいた。

「ム、一雨きそうじゃ、いソいではどうか」

唐突に言葉を発した、二本の尻尾を揺らしているソレは当然人間ではなく。

小さいが翼を持った、黒猫だった。

「げーマジで？ ……降り出す前に追いつけるかな……」

その猫、ムラマサの目線遙か高く。

ボサボサの髪をかきながらばやくのは、ロンガ達の前に教会信者として現れた事のあるキロ・ウツドビレッジ、という人物。

「あははは、多分無理じゃなーい？」

目線はキロよりも頭二つ低く。

間延びした声で、キロの希望を打ち砕いたのはグラム、という名の少女。

「グラム……元はといえば、お前があの後追加で十皿も喰うからだろ……」

イミルさんから貰った旅費がもう尽きそうなんだが……」

「だいじょーぶだよ。あのおじさんからお小遣い貰ったし」

そういつて、グラムが掲げたのは、金貨や銀貨が大量に入っているであろう皮袋。

「……てめえ……」

んなもん持ってんだったら、食費ぐらい自分で払えやあああああ
あ！！！」

黒猫が溜息。

「……サきが思いやられるの……」

ザアアアアアア

「ハ……結局は降られると思ってました……」

雨宿りのため仕方なく道を外れ、森の巨木の下に避難した二人。

「まあ、あの流れで降られないのは二次元の世界じゃ掟破りだよな」

「小説は二次元……なのか……？」

「それにしても、ヒドイ雨だね」

アイアはそう言いながら、荷物の中から地図を引っ張り出す。

「（こいつ、またサラツとオレの突っ込み流しやがった……！！）」

「え〜っつと……」

多少憤るロンガを気にすることも無く、アイアは地図を睨む。

「……アイア、それ上下逆だ」

「ふえ、あ、地図って上下あるっけ……？」

その言葉に、ロンガは苦笑いを隠せない。

アイアはしばらく地図をジツ、と見つめていたが、突如、地図を
ロンガに突き出し、

「わ……私には無理……」

と言っ。

「ハ？（無理って…何が無理なんだか）」

ロンガは受け取った地図を、雨に濡れないよう注意して開く。

「お、この近くに村があるな……」

どうせ樹の下じゃ、雨を凌ぐにも限界があるし、ちょっと行ってみつか？」

「え〜…どっちみち濡れるじゃん……」

そのとき。急に吹いた風が、森の木々を揺らした。

「……行くか？」

「……行かせてください……」

樹が揺れれば、当然、水滴も落ちる。

結局、アイアもびっしょりだった。

その看板には『デイルズ』と書かれていたようだった。

アイアは、二つに割られ泥まみれになったその看板を杖でつつき、
呟く。

「廃…村……？」

「……だな」

最早木材の塊となった家屋を眺めながら、返答を返すロンガ。

「多分…怪物か、争いか……」

どちらにせよ、雨宿りどころじゃないな」

雨はまだ降り続けている。

「荷物は一応濡れても大丈夫なようになってるけど……このままじや風邪引きそうだよ」

「ハ……そうだな、とりあえず屋根の残ってる所探して休むか」

キロ一行がデイルズに着いたのは、そのしばらく後だった。

「わぁ……ボロボロだ〜」

「酷い有様ジャの」

「ちっ……アテが外れたか……」

雨宿りさせてもらおうと思ったんだが

キロの歩みに、泥が跳ねる。

それを気にも留めず、気だるそうに傍らの奇妙な黒猫へ視線を向ける。

「奴らの匂いとかわからないか？」

「小生は犬ではないシ、この雨ではな……」

そもが、奴らの匂いなど嗅いだことが無いゾ」

「あ、そうか」

ドビシャッ

「!?!?」

後ろで、盛大に泥が跳ねる音。

振り向くと、

「うう〜……」

グラムが木片につまずいて泥の中につっぷしていた。

「おいおい……何やってんだよ、もう……」

「えへへ、転んじやった……」

「ドロドロじゃねえか……」

「……ん……?」

「どしたの?」

「見るムラマサ。気付かなかったが……」

「ム、なるほど。コレは運がいいの」

キロの頬が両側につりあがる。

「どうやら、予想より早く帰れそうだ」

キロとも、グラムとも、当然ムラマサとも違う、二人分の足跡がそこにはあった。

ディルズ村、廃屋の中。

「とりあえず、雨がやむまでこの中だな」

「うう……早く服乾かしたい……」

「……外出てようか……？」

「……」

「……なんだその目は」

「意外に空気読めるんだよね、ロンガって」

「どういう意味だ、コラ」

『いい気なものじゃな』

「「?!?!?!?!」」

突如響く、不吉な声。

「何!?!」

「おい、アレ……」

崩れ落ちた玄関から外を覗くと、降りしきる雨の中、一匹の黒猫がちょこんと座っていた。

「黒猫……?なんか不吉……」

「そうか?オレの住んでたトコじゃ、黒猫は幸運の象徴だったぞ?」

「なんか尻尾二本あるし……」

あの猫が喋ったの……?」

「とりあえず普通の猫じゃないな。」

尻尾の多い怪物は珍しくないが……」

当の黒猫は雨の中微動だにせず、二人を見つめている。

「おい、そんなとこにいないでこっちに来いよ」

と、ロンガが廃屋から身を乗り出した瞬間。
彼の身体は宙に浮いていた。

「な……………!!!?」

「が……………つ!!!」

ドシヤアアアアア

泥の中に叩きつけられ、呻くロンガ。

その数瞬後、アイアが杖を持って雨の中へ躍り出る。

「誰……………!? あんた達!!!」

おそらくロンガを吹き飛ばした張本人であろう、幼い印象の少女。
その僅か後ろに控えるのは……………

「あんた……………確か……………!!!」

「改めまして……………」

ボサボサの黒い髪を、手袋をした手でかきあげて、彼は名乗る。

「キロ・ウッドブレツジだ。」

ロンガ・シーライドに用がある」

「オレに……………用……………?」

泥の中から立ち上がったロンガが不審そうに言う。

「そう、お前に用がある。」

そんなわけでお嬢さん、通してもらおうよ」

キロの足元の泥が跳ねる。

「……………ッ!!!」

あっという間に、ロンガとの間にいたアイアをかすめ、距離を縮めてしまった。

「こいつ……………速い……………!!!」

「ロンガ……………!!!」

ヒュザ!

「!!!!!! 痛ッ……………!!!?」

ロンガのほうへ振り向いた、アイアの右頬に“何か”が切り傷をつけた。

「キロの邪魔しないであげて、おねーちゃん。」

次、向こうへ行こうとしたら……首を飛ばすよ」

にこやかな顔で、恐ろしいことをサラッと口にする。

「く……」

アイアは杖を構えたまま、齒噛みするしかなかった。

殴りかかるキロの攻撃をかわしたロンガは、応戦するべく自らに宿る能力を発動する。

「スキル 神器”【風霊の大剣】！！！」

左手から溢れ出る魔力が、光を放ち、風を纏う巨大な剣を具現する。

「へえ……やっぱブレイド“大剣”なだけあってデカいな……重くないの、ソレ」

「……ぶつちやけ重い。だが安心しろ。扱いには困らねえ。」

それより、教会のヤローがオレに何のようだ」

その顔は、不機嫌そのものだった。

「やめてくれよ。確かにあの時は仕方なく教会の一信者として名乗ったが……」

その顔は、嫌悪感に満ちていた。

「神なんてクソくらえだ。信じる信じない以前に、ダイツキライだね。」

そもそもオレも“スピリチュアル精霊憑き”だ」

「……なんだ、気が合いそうじゃねえか」

そういいながらもロンガは切先をキロに向ける。

「おっと……何の用か」だったな。

それは……」

一呼吸。

「オレと戦って生きてたら教えてやるよ」

「残念だけど……邪魔しないでって言われてそう簡単に引き下がる女じゃないの、私は」

「そう……じゃーどうする？」

グラムの間延びした声は、されど殺気を帯びていた。

「なんとしてでも。邪魔してやる……!!」

両手に持った杖を振りかざし、魔法使用の為の呪文を詠唱する。

「エイク・ブリザ・ウオク（氷属性：冷気の弾丸）

エイク・ブリザ・ウオク

エイク・ブリザ・ウオク……!!」

「（連続同時詠唱……!!?）」

「三連……!!」

アイアの魔導具である杖が振り下ろされると共に、三つの冷気の塊が、グラムへ襲い掛かった。

アイアの魔力により生成された冷気弾を、それと同じくらい冷めた目で、グラムは見つめる。

「（氷による物理ダメージより、“凍らせる”ことを優先する 冷^ッ気^{リザ}の呪文かあ……

……つままない）」

ス……と、グラムの右手が肩の高さまで上がる。

「……?」

「—ウイドン・アスピ（風属性：槍の呪文）」

その瞬間、命中する直前だったアイアの冷気弾がすべて、かき消された。ただでなく。

「ぐ……!!!??」

図太い風の槍が、アイアの胴体をかすった。

ニコリ、とグラムは微笑む。

「（やっぱりこの子……強い……）」

諦めたように、溜息をつくアイア。

次の瞬間、泥が跳ねるのも構わず、ロンガ達とも、グラムとも違
う方向へ全速力で駆け出した。

「キロお」

近くでロンガと睨み合うキロに声をかける。

「ああ、追え。オレはコイツと戦ってるから」

「うん。わかった」

「……………」

「さて。こっちもおっぱじめようか」

「……………ああ、その前に一つ」

「なんだ？」

「あの女、お前の趣味か？」

「……………！ ま、頼れる相棒、ってところさ」

ズグ、とキロの足がわずかだが、泥に沈み込む。

一瞬で距離を詰め、後ろに引いた右手の拳を打ち込む。

「（素手……………！？）」

ガキイイイン

雨の村に響く金属音。

キロのしている手袋は、手甲なみの硬度があるようだった。

「“神器”^{スキル}は使わないのか……………？（手袋をしているとは言え……………リ

イチの長い大剣相手に、素手同然でやる気か？ 何考えてる……………）」

大剣でキロの拳を押し返そうと力を入れた瞬間。

ビキ

「……………！？」

キロの顔には、凶悪な笑みが貼りついていていた。

右手を押し付けたまま、左の拳底をロンガの剣に打ち込む。

ビキッ

「な……………」

ビキイイイイツ

粉々に碎け散る大剣。

「ちいっ！！」

キロの追撃を、ギリギリのところであわして、泥に深い足跡を残し距離をとる。

「ち……あたると思ってたんだけどなあ。

いい運動神経してるじゃねえか」

軽い口調でキロは言う。

「……バカな……」

（魔力で生成したものは言え、鋼を超える強度の大剣を……拳底で砕いただと……！？

しかも……あんな軽い一撃で……！）」

「ホラ、次のを生成しなくて良いのか？」

「うるせえ、考えてんだよ！」

「悪いが、シンキングタイムは長くないよ」

「うおっ……！」

ボクシングのように、連続で拳撃を放つキロ。

「チツ、とりあえず……」

「ん、」

ゴツ、バキイイイイイイイ

攻撃を避けるばかりのロンガに、キロがほんの僅かの焦りを感じ、生じた隙。

ロンガの右ストレートが顔面にクリティカルヒットした。

「ごぶあああああ……！！？」

泥の中へ転がり落ちるキロ。

「が、き……きさまあ……」

鼻血をどくどくと垂れ流しながら立ち上がる。

「ハ、わりいが、素手の喧嘩でも負ける自信は無いんでな」

「なるほど……さすが、あのクソ重たそうな大剣を振るうだけはある。怪力だ……」

「（とは言っても……奴の能力がはっきりしない以上、あまり近づきたくはねえな……）」

「（さて……二度とあんなの顔面に喰らうのは勘弁だな……やっぱ

慎重にいくか……)」

両雄の視線は、雨の中、交錯する。

「は……………」

「おねーちゃん、もしかして体力無い？」

「！ うっさいわね！！敵に心配されたくないわよ！！」

「でも、どうしてこんな所まで？」

キロたちと大分離れちゃったじゃん」

「……………どうせあそこにおいても、あんた達の邪魔なんて出来ないし、むしろロンガの邪魔になっちゃ悪いからね」

白けた眼でメイコは応える。

「ふーん……………でも、勝つのはキロだよ」

「……………それはどうかな？ロンガだって強いんだから。」

それに……………ここなら私も本気で戦えるわ」

鋭い眼で、グラムを睨む。

二人の視線が、雨の中、ぶつかり合う。

それが合図だったかのように。

アイアは杖を、グラムは手を、雨粒の落ち続ける天に掲げた。

「一エイク（氷属性：）……………」

「一ブリザ（冷気の）……………」

「一ウオク（弾丸）……………」

「一アスピ（槍）……………」

ぶつかり合う、二つの魔法。

しかし、アイアの魔法は、あっさりと掻き消える。

「ぐっ……………！！」

風の槍は、アイアの肩をかすった。

「くっ……………（ダメだ…風の魔法に冷気の魔法じゃ、打ち勝てない…」

… それに……」

グラムが、緩く開いた手をアイアに向ける。

「……！！また……」

「—ウイドン・レオ・ブロー・ウォク（風属性：轟風の巨弾）
……！！！！」

ドゴオオオオオオオ……

バラ、バラバラ、バラ

虚しく崩れていく【フレード・オブ・シルフ風霊の大剣】。

ロンガの左手首は、キロに掴まれていた。

「（振り払え、ない……？）

いや……力が入らない……！！？」

ドッ

キロの拳底が、ロンガの下顎に決まる。

「があ……っ」

受身を取りながら、空中で再度“神器”を生成する。

風纏う大剣は、泥の中に足と片手がつくのと同時だった。

「ち……（何だったんだ今の……）」

「おいおい……いくつ目だその大剣。

そんなデカイの、生成するにも限度があるだろうに」

「とりあえず、敵のお前が気にすることじゃ……ねえっ！！！！」

「ん？」

ゴウ……！！

ロンガが縦に振り切った剣から放たれた風の刃が、地面の泥すら

巻き上げて、キ口を襲う。

「……無駄なんだなコレが」

キ口は左手を前に突き出すだけで、他は一切動かない。

風の刃はその左手、否、手袋に触れるだけで、ただの風と化した。

「……！！なるほどな……」

剣の切先を後ろに流し、ロンガは突進する。

「こいよ、お前の剣はオレにはきかねえ」

「ハ……それはどう……」

ザグッ

キ口の目前で、斬り上げる軌道で放たれた斬撃は、降り続く雨でぬかるんだ地面に食い込んだ。

「……かなっ！……」

「……！！？」

剣が纏う風圧が強くなり、ロンガが思いっきりその剣を振り上げる。

強い風に、やわらかい地面が抉られ、泥が激しい波のようにキ口を襲った。

「ぐ……」

後ずさり、顔にかかり、目に入った泥をぬぐうキ口。

「……は……！！！！」

しまった。と思った瞬間は、少しばかり遅かった。

がら空きのキ口の胸へ、思いっきり泥を蹴って、ロンガの斬撃は放たれた。

「あ、防げたんだあ」

「く……間に合った……」

「エイク・レオ・ロウル（氷属性：巨壁の呪文）、巨大な氷の壁を造りだし何とか防ぎきったものの、分厚いソレは半分近く抉られていた。

「（やつぱ、”弾丸”じゃ、破壊力はあっても、貫通力は無いなあ……）」

グラムが、手を突き出し、次の呪文を唱えようとしたとき。

「ねえ……あんたも“魔法使い”^{ウィザード}なら知ってるよね？」

氷の壁の向こうからアイアが話しかける。

「氷属性から派生した氷属性は、ある程度なら水も操れる……ってさ」

「なにを……」

「エイク・リセド」

アイアがぼそり、と呟いたその呪文。意味するのは…… 解氷。

水となつて弾けた氷壁が、地に落ちないうちに、杖を前に 落ちる水の流れの中に突っ込んで、さらに呪文を唱える。

「エイク・ガトル・ウオク（氷属性：雹弾連射）……！！」

水が、すべての水が、大量の雹弾となつてグラムに襲い掛かかる。

「なっ……く、きゃあああああ！！！」

盛大な音を立てて、廃材の中に崩れ込んだ。

「……………！！ はあ……はあ………」

キ口は脇腹を押さえ、片膝について喘いでいた。

されど、その顔には笑みが。

「クク……やつぱりお前もきつかったんじゃないかねえか……そらあそうだ、もう六振り目だぜ、その大剣」

ロンガは、地面に突き刺した剣を支えに、こちらも片膝をついてい

た。

「ハ……きつちり数えてんじゃねえか……

でも………」

「？」

「きいたな、オレの剣」

その眼には、鋭い闘志が。

「ククク……だが、オレの有利はかわらねえぞ？」

痛みに震えてはいるものの、その声には、戦いで優位に立つ者の自信がこもっていた。

「気付いたんだろ？オレの能力」

「……この、身体の中が空洞になるような感覚……魔力を奪う能力ちからか」

「そのとおり。正確には“触れた魔力を吸収し蓄積する能力”ちから。

グローブ・オブ・ベヒーモス

【暴食獣の手袋】。それがオレの“神器”スキルの名だ」

ゆっくりと立ち上がりキロは言う。

「魔力と生命力は密接な関係がある」

一歩、ロンガに近づく。

「つまり、急激に大量消費すれば、生命活動に支障をきたす。ってことだ。

お前は、決して魔力消費の少ない“神器”を連発で生成した上に」

また一歩。

「さつき、掴まれたよな？オレに」

「ハ……直接魔力を奪った……って訳か」

「そう、そのとおり」

また一歩近づいて、左の手のひらをロンガに見せ付けるように突き出す。

その行動に、ロンガの脳は超速で回転を始める。つまりは、『予感』する。

「（奪った魔力は……）」

「吹っ飛ばるか？」

「ヴォミットブローアー！！！」

「るおおおおおお！！？」

キロの左手から放たれる、高密度の魔力の散弾。

ロンガは思いつきり、剣もその場に置いて、両手まで使って後ろに跳び退る。否、飛び跳ねる。

ほんの数瞬前までロンガのいたところは、放射状にごっそりと抉られていた。

「あぶな……」

「まだかわせるか……」

キロは少しばかり苛立っていた。

そもそも、最初は地道にロンガの魔力を奪い、立つ事も出来なくしてやる予定だったのだ。

それをコイツは……

「ああ……もういい、もうダルイ。

出て来い、ムラマサあ！！！！！」

「！！？」

少しばかり、ではなかった。

すでにキロの苛々は、沸点ギリギリだったようだ。

雨空に、響いたキロの声。

数瞬遅れて、茂みの中から現れる、小さな黒い影。

「あつ……！！さつきの猫！！！」

「フウ……全く。結局小生が出張る事になるとは……

自分に合わぬ戦い方をするからジャ」

小さな羽根を震わせて、化け猫はばやく。

「悪かったよ。

そもそも、この能力自体オレの趣味じゃねえんだ。それに相性が

悪い」

「ン？」

「魔力量が多い……ってのもあるが、魔力の回復速度が異常だ」

「ナルホド」

「風絶一閃！！！」

「……どおおおおおおお！！！！？」

キロとムラマサの間を、巨大な風の刃が通り抜ける。

「おい、この際その猫が何でしゃべるのかとかどうでもいい。

かかってくるならさっさとかかって来い」

「どうやらこちらも。苛々していらっしやるようで。

「OK、じゃ、第二幕といきますかあ！！」

その声を合図とするかのように、ムラマサが上に飛び上がる。

ゴキ、メキビキバキピキ

「え……………！？」

パシッ、とキロが右手で掴んだ、ムラマサだったもの。

反りを持つそれは、大振りの、鞘に納まった日本刀。

もつともロンガ達の世界には、『日本』という国など存在せず、

したがって『日本刀』という概念も存在しないのだが。

「猫刀^{マオトウ}”ムラマサ…………オレのもう一人……いや、もう一匹の相棒さ」

「ハ、喋るばかりか、刀に変身とは…………」

何なんだその猫…………？ただの刀でもないんだろ？」

「そのとーり」

キロは鞘に納まった状態のその刀を左手で引き抜くと、

「コイツは、魔力を加えることで、その魔力に『変質』を与える。

つまり、こういうことだ」

ほとんど手首のスナップだけで、軽く振る。

ロンガの背後の細い木が、真つ二つになって、墮ちた。その切り

口は、鑢をかけたようになめらかだった。

「……………！！！！」

「“放つ”だけから“切断”への『変質』。コレがムラマサの能力。

そして」

チャキ

「なに……………？」

ガラガラガラ……………

木屑や木片の山を崩して、起き上がり、目の前のポニーテールを睨む。

「さすが、おねーちゃん…………… っところかな。」

連射カトル の呪文の弾数をあんな方法で増やすなんてさ」

頭から流れた血が、右目を越え頬まで流れている。

「…………… なんで？キミは何で戦ってるの？」

あのキロって人のため？」

グラムとの戦闘が始まって以来、ずっと消えない疑問の一つを訊いてみる。

「…………… そう。キロは私を救ってくれた。」

だから私は」

自らの右手首を掴むと、

「キロの為に戦ってる」

無造作に、引き千切った。

「ふえっ、ちよっ、何やってんの！！？」

飛び散る鮮血。グラムの肘から下は、左手に掴まれて、垂れ下がっていた。

「焦らなくていいよおねーちゃん。」

こっという風にできてるんだから」

「でき…………… てる……………？」

見ると、左手の中の右腕は、全く別のモノに変化していた。

「呪式魔導具【ブラッドボックス】開放」

血液が集まってできたような、赤黒い立方体は、グラムの魔力に反応し、縦に横に、乱雑なリズムで回転する。

「なんて…………… 禍々しい……………」

ああ、そうそう、と、右腕に内蔵されていた魔導具を開放した少女は言う。

「コレ、キロに使うの止められてるんだ。だから、黙っててね。」

って言っても、おねーちゃんが生きてたらだけど」

「なっ、物騒なことをさらりと……」

アイアの言葉は無視し、左手の半浮遊状態で回転をする魔導具を天に掲げる。

「ああ、もう！」

アイアも杖を握りなおし、グラムと対峙する。

「ウイドン・レオ・」

黯くろいハコが、不規則な回転の速度を著しく上げてゆく。

「サイ」

ズドオオオオオオオオオオ……

「……！！！！？」

グラムジョーカーの切り札は、出す前に、巨大な地響きで遮られた。

「まさか」

二人の思考にできる、一瞬の空白。

「……キロ！？」「ロンガ……！！？」

女の勘は鋭い。

このときグラムが、持っていた右腕だったモノを元に収め、アイアより先に、アイアには追いつけない速度で走り出したのは、彼女アイアにとって大きな幸運であり、同時に小さな不幸だった。

鎌鼬を伴って放たれる、大質量の風の奔流。

その場だけ、超局所的に竜巻が来た、と言っても、事情知らぬ他人なら信じるだろう。

しかし、大地にそんな傷跡を残した大技も、魔力の回復が完全ではなかったためか、威力は四割減。そればかりか、魔力の枯渇による筋弛緩で、身動きすら取れない。

「くそ……そう易々と“テラ”なんかやるもんじゃねえな……………」
いつの間にか雨のやんだ曇天を、泥の上に大の字で見上げる。

その首を掠めるように、地に突き立てられる、反りのある刃。他でもない、キロ・ウツドビレッジである。

「油断した。全く、やってくれる」

満身創痍。触れた魔力を吸収し、ソレに攻撃性能を加え吐き出す
“神器”【暴食獣の手袋】は両手共に消え、特に左腕はボロボロで、もう二度と　　ということは無いだろうが、当分の間は役目をなさないだろう。

「さて……とりあえず、オレの勝ちだが……お前、『七罪星』って知ってるか？」

「しち……ざい……せい……？」

大地に身体を投げ出したまま、ロンガは上から落とされた固有名詞を鸚鵡返す。

「ああ。ぶっちゃけるが、オレの目的は勧誘だね。協力する気は無いか？」

「……何の為にだ」

「それは今は言えない。というか、オレも事実よく分かってないんだ」

「は？」

『ハ』ではなく、『は？』

泥の上に大の字、という情けない格好でありながら、『こいつなに言ってるんだバカヤロー』と、本音のこもった視線と共に口から漏れた音。

「まあ、それでも……探してるんだろう？」

「キロの言い放った人名は。刹那、ロンガの思考を停止させた。」

「てめえ、どこまで知って」

「チャキリ、という音が、ロンガの反応を遮った。」

「もう一度訊く。協力する気は無いか」

「なんのことはない。キロが右腕を動かせば 即ち断れば 才
レの首が飛ぶ。それだけだ。」

「と、ロンガは今の状況を冷静に、正確に観ていた。」

一方、冷静ではあるものの、自分の居る場所さえ、正確に攫めない憐れな迷子が一人。

「あの子……あんなに足が速かったなんて……キロって人よりも速いんじゃない」

「その気になれば、ロンガ達から離れることなど叶わず、あつという間に追い付かれていただろう。」

「あれ……？ココ、ドコだ……？」

自身の憐れさを今更気付いたアイア・シルストームだった。

グラム・ブロックエッジが目撃したのは、まさにその瞬間だった。

答えはNO。それも、思いつきりの侮蔑と、意地と、見栄を込めたNO。

その返答に、キロは、

「そうか。じゃ、」

泥に刺さっていた猫刀ムラマサ。それを上に引き抜くと同時、放り上げた。

くるくると、ロンガの上で回転しながら落ちる、墮ちる、オチル。もう駄目か。思わず眼を瞑った、その刹那。

ドズン

鳩尾に、ムラマサが突き刺さった。

「キロお〜」

「ん、おお、グラム。……一人？」

「大丈夫。殺してないよ。って、キロこそ大丈夫!？」

キロ左腕を見た瞬間、血相を変えて走ってくる。

「げほおっ!げほ、げほ、がは……」

何者かが咳き込む声。

「げほ、…ハ……どういっつもりだよ、ったく……」

そこには、腹を抱えてうずくまる白い奴。

「そんな眼で睨まれてもノお。恨むなら小生でハ無く、キロじゃろ」
落下する最中に、猫の形態に戻ったムラマサは、宙返りよろしく、落下の勢いでロンガの鳩尾に突き刺さったのである。

「どういっつもりか、と言われてもな。オレにお前を殺す気はもとよりなかったんだ。」

まあ、その一撃は左腕の借りかな」

「ハ、随分安い借りだな、オイ」

多少痛みと魔力枯渇から回復したのか上体を起こす。

「ん、だつてさ」

「ホリイ・チーク」

グラムの手が優しい光に包まれる。その光を浴びたキ口の左手の傷が、みるみるうちに塞がっていった。

「ほら、わりと簡単に治るし。つっても、少々リハビリがいるだろうがな」

「治癒……魔法……？」

「さて、ま、オレはお前の勧誘には失敗したわけだが。ロンガシライド。お前がアレを追うなら、きつとまた合う事になる。」

どっちにせよ、お前はまだ力不足だ」

言つて、ロンガに背を向ける。

「おい……」

「ああ、そうだ、どうせ旅の身なんだろう？」

“ヒフトフ” って街に行つてみる、いいところだぜ、ありゃあ最後に一度だけ振り向いて、

「じゃ、またな」

と言つ。それに続いて、

「またね、おにーちゃん。多分あのおねーちゃん、迷子だから迎えに行つてあげなよ」

「精進しろヨ、若者よ」

ハ……あの猫は一体何歳なんだ……？
そんなことより。

あの魔法少女め、最後に余計なことを……

しかしいつまでも放っておくわけにも行かないので、ゆっくりと立ち上がる。

「ヒフトフ……か」

「あ、ロンガあ！！！」

「！！ ハ、ウソ、マジ？」

ロンガの視界に現れたポニーテールの迷子。

あ、いや、もう迷子じゃないか？

「よかった、戻ってこれたよあ」

「何、涙目で『奇跡が起こった』みたいな顔してやがる。普通だバカ。……まあ、お前にしたら奇跡か」

「むう。って、あいつらは？」

「去ってったよ。なんか、意味深なこと言ってな」

ふう、と溜息一つ。

「アイア……」

「ん？」

「どうやらオレは、まだまだ強くならねばならんらしい」

自嘲の薄笑い。

気持ちを切り替えるように、ロンガは頭を振る。

「さて、ファフロットだったな。しばらく休んだら出発しよう」

「ふえ……さすがロンガ、切り替え早っ」

ホント、笑ってしまう、切り替えの早さだ。

ロンガにとつて、目的の為だった旅が、いつの間にか目的の達成を先送りにしても、続けていたいものになっている。

この時間を縮める、訳の分からない奴らの誘いなど言語同断である。

でも、そういえば、と。

ロンガをそうさせた一番の要因である、隣に座る方向音痴^{ポニーテール}。

コイツが旅をする理由はなんだ？ 一度訊いた気がするが、たしかはぐらかされた。

まあ、いい。また機会のあるときでいい。

「時間は ある」

「ん、なんか言った？」

「いや、なんでもねえよ」

空を覆う雲は割れ、其処から射した日が、なぜか気分を軽くさせた。

「あ、そうだロンガ、“ヒフトフ”って知ってる？」

第三閃

END

第四閃『魔法使いと妹』

第四閃『魔法使いと妹』

「猫が刀に？変身？」

先刻まで降っていた雨が嘘だったかのように晴れ渡った空の下、銀髪の“精霊憑き（スピリウル）”ロンガ・シーライドと、ポニーテールの“魔法使い”アイア・シルストームは、廃村デイルズを後にするところだった。

「ああ、なんかこう……『メキメキ』っ……と……」

「その擬音でどう刀に変わったのよ」

「いや、ホントなんだから仕方ないだろ。そんなトコ文句つけられても」

「まあ、いいわ。そうね……多分それは、“呪具”じゃないかな」

「“呪具”？」

「うん。正確には“呪式魔導具”って言って“魔導具”は、その名の通り魔を導く道具。“魔法使い”が魔法を使うために必要不可欠なモノなんだけど……」

人間は元来、魔力を扱えるようにはできていない。世界に溢れる、“常識を破壊する”エネルギー、魔力。それを何とかして利用しようと、先人が英知を働かせた結果が“魔法”という技術なのだ。

「“呪具”ってというのは、その存在自体が魔法のようなものなの」

ロンガは渋い顔。

「……解るように言ってくれ」

「つまりは、そこに在るだけで魔法のような効果や、能力を発揮する道具ってこと。」

ロンガから聞く限りじゃ、“ムラマサ”という刀の形の呪具が、

魔力の攻撃性質を変化させる能力を持っていた……ってことじゃない？

「なるほど……でも猫に变身する刀……いや、猫に变身する刀か？ そんなのあるのか？」

「同じ事二回言ってるよ！？『刀に变身する猫』ね。うーん……それも呪具の効果なのかもしれないし、別の何かがあるのかもしれないわね。（あの女の子が使ってたのも……確か呪式魔導具って言うてた……）」

「そこに在るだけで魔法……ねえ……」

「精霊憑きの“神器”も呪具に近いよ」

「なんか呪具って響きがなんか嫌だな……」

だが、その定義なら、神器もやはり呪具なのか。

と、ロンガが半ば無理に納得していると、

「それにしても、風を纏ったり魔力を吸収したり、精霊の能力って多彩ね」

と、唐突にアイアが言う。

「ん？ちよつと待て。お前、本当にオレ達が精霊を宿してるなんて思ってたねえよな？」

「え！？違うの！？」

驚きの新事実。

「まあ……覚醒と同時に自分の“神器”の能力や名前が自然と理解できたり、奇怪な能力を見ると、精霊がいるって方が説明がつくんだが」

そこで一度言葉を切って。

「表向きは、そうだな……それこそ、自分の魔力でその“呪具”とやらを生成しているに過ぎないんだよ」

「その能力の出所が精霊なんじゃないの？」

「八、魔力の影響で、凶暴化したり、異常な能力を持つてる動物を怪物モンスターっていうのは知ってるな？」

怪物モンスター。かいぶつ 化物。

大昔、世界に溢れた魔力で、そうなった動物や植物を、人間はそう呼んだ。

「しってるけど……………」

「それと変わらないんだ。通常種たる人間から異常に進化した怪物^{モンスター}。それが“精霊憑き”だ^{スピリチュアル}」

ロンガは、少し心苦しそくに言い切った。

「……………」

「ハ、精霊、ねえ……………」

眩きながら、ロンガは廃村デイルズでアイアと交わした会話を思い出していた。

「ヒフトフ……………って知ってる？」

アイアの口から出た名詞は、街の名前。

それも何の因果か、キロとかいう、よく分からん奴に『行ってみろ』とか言われた、その街だった。

「ああ……………名前は聞いたことあるな。(…ってか今さっき聞いたんだが)」

「それで、そこに連れてってもらいたいんだけど……………」

「ん？いや、別にかまわねえけど……………」

何故急に？ 言う前に、アイアが訳を語る。

「いや……………なんとなく……………というか、ロンガ風に言うなら気が向いたから、というか」

気が向いたから。体のいい言い訳ではあるが、ロンガ自身、多用するので追求もできない。

「で？じゃあ、行き先変更？」

「いや……ココからじゃ、直線でも距離があるし、一度フアフロットによった方が」

「……」

違和感。間違いなく決定的な違和感。

「お前　なんでそんなことが分かるんだ？　地図もロクに読めな

かつたくせに」

「……！！」

そうである。アイアには、方向感覚、というより、“目的地に辿り着く”という結果の為の能力が著しく欠けているのである。

「お前

「いや、大したことじゃないんだけど、一度家に帰って調べたいことができたというか、なんだかんだで近くまで戻ってきてるみたいだし……」

「まだ何も言っていない。それどころか鍵括弧も括れてない」

少し間を空けて、ロンガは再度口にする。

「お前……少なくともヒフトフト、その周辺……多分フアフロットにも、行った事があるな？」

それも何度も、と付け加える。

少し迷ったように、やがて観念したように、アイアは答える。

「私……家出してきてるんだー」

決まり悪そうに、頬をかきながら。

「家出ですか……」

また、なんとも……

ポニーテール。方向音痴。家出少女。

「（ハ、なんかコイツばかりキャラが濃くなってく気がするのには気に入らないなあ）」

そんな感想を抱いてしまうロンガ。

「白髪、大剣、……え〜っと……」

「……勝手に人の心読んだ拳句思いつかねえのかよ！なんか傷つく

なあ…… しかも『大剣』はキャラ付けになり得るのか……？って
かそうだ、白髪って言うな！！」

「ツッコミキヤラ？」

「なっ たつもりはねえ！！」

「うっひゃー、でつかー」

ファフロットは、大きな川が流れ、その恩恵で流通の中心として
栄えた街だった。

「ハ、なんか、今までで一番都会だな」

今まで通ってきた森の終わり目、街の全貌を見ることができ崖
の上で、アイアとロンガは肩を並べていた。

「さて…… とりあえずココ降りねえとな」

ガザッ

「……………」

背後の草むら。何かの足音。

「…… ったく…… ココまで無事に来れたってのに……」
現れたのは。

《ブルル…… ブルファアアアアアアア！！》

化けイノシシ。体中に骨の棘が生えた、異常なイノシシ。怪物だ。モンスター

「ああ、もう！！！！ なんて脈絡の無さだ！！」
嘆くロンガ。

「この作者は『伏線』って単語を知ってるのかな……？」
「知らなかったら小説書きとして失格だ！！！！」

言うなり、ロンガはアイアを担ぐと、

「え、ちょ、何を！？」

「ハ、こんな奴こんなところで相手にしてらんねえよ！！！！」

硬い地面を蹴って

「ひゃっはああああああああああ！！！！」

「まじかああああああああああああ！！！！」

崖からダイブした。

「ちよつとロンガ！！宿の三階このまえとは大違いだって！！ “ぐちゃっ

”で、“ぐちゃっ”てなるって！！」

「ええい！ わざわざ引用符でグロさを強調するな！！ この程度

の高さなら原形は残る！！」

「原形だけ残っても意味ないんだよお！！」

当然ではあるが。ロンガも残るのが原形だけでいい筈は無く。

「神器スキル”【風霊の大剣】ブレード・オブ・シルフ！！！！」

崖の壁面に突き刺された剣が、ガリガリと、ガリガリと、岩を削りながら、落下のスピードを緩めてゆく。

「……………」

「……………」

宙ぶらりんだった。

右腕にアイアを抱えて、左手で大剣の柄を握り、ロンガは宙ぶらりんだった。

「『で？』もなにも……………降りるんだよ」

「ふえ、きゃっ！」

ドサリ、と地面に落ちる。

何のことはない。少しばかり停止位置が高かっただけである。

「よっ……………」

崖に足をかけ、剣を引き抜いて共に、地面に降りる。

「……………ハ。やっぱそうなるか……………」

ロンガの眺める魔力の結晶、風霊を宿す大剣の神器は、凄絶な刃こぼれをしていた。

「……………」

「……エイク・ウオク」

「ふああー！」

氷の塊が、ロンガの後頭部を直撃する。

振り向くとそこには、ふくれっ面で涙目になってへたり込んだアイアがいた。

「ハ……なんだ？」

頭を摩りながら、恐る恐る訊いてみる。

「……あんなねえ！！」

何も、あんな方法で逃げなくてもよかつたんじゃないの！？

「まあまあ、腰抜かしたまま涙目で怒られても……」

『可愛いだけで恐くないぜ？』そう言う前に口をつぐんでしまったのは、アイアの眼が鋭いプレッシャーを放っていたからでも、握り締めた杖に殺気を感じたからでもない。

「（オレ……絶対こんな軟派なキャラじゃなかった……！！！）」

「まったく……ツッコミキャラにあるまじき暴挙ね」

「いや、だからなつたつもりは無いと」

「ま、いいや。ホラ、そんなトコで頭抱えてないで　　って、あり

や？」

「どうした？」

「……マジで立てない……」

「……」

ますます頭を抱えるハメになるロンガだった。

一方

日の暮れかけたファフロット。

「……食いすぎだグラム」

「むう、もごまが、もぐ、そんな事むぐ……ない、むぐぐ……もん」
そういった少女の両手には、具を挟んだパンがまだ山ほど抱えられていた。

「それが食いすぎでなくてなんなんジャ……」

その台詞はグラムの足元から。

小さな翼と、二本の尻尾を持った黒猫、ムラマサである。

「それより、キロよ。ホントに今日の最終便なのか？」

ボサボサの黒髪をした男は答える。

「ああ……そろそろ出る頃だな」

「むう、もうちよつとゆつくりしたあい」

「そうは言ってもなあ……」

そのとき、後ろから、

「あ、あの、もしかしてっ」

「「ん？」」「」

声をかけられ振り向くと、そこには一人の少女。

「もしかして、旅の方ですか？」

「ん？まー、そんなところか？」

「あの、こんな人、見かけませんでしたか？」

そういつて差し出した一枚の顔写真。

「「！……！」」「」

「あの……どうですか？」

「……ん、ああ、ちよつとわからねえな」

「そうですか……」

「いや……まあ、もうしばらくこの街で探してるといい。じきに見つかるぞ」

「……？はあ……」

「じゃ」

そういつて去っていくキロ一行。

「あ、ありがとうございました！」

その声は後ろから。

キ口は振り向かず、手を振って応えた。

「いやー、しかし……………似てたな」

「うん。にてたねー」

「ウム。髪形変えたらそっくりじゃ」

「世間は狭い、とはこのことが……………」

「しかし、何ゆえホントの事を言っただらんじゃ？」

「ん……………まあ、なんとというか、そんなに聞わらない方がいい気がするな……………」

「それにどうせ、もうじき来るでしょー？」

「キ口の誘導にあやつらが乗ってこればじゃけどな」

「なあに、絶対乗ってくる。今までアイツにとって手掛かりなんて無いに等しかったんだ。ここで乗ってこないなら 所詮その程度、つてことだろ」

「それにしてもさあ、さっきの子……………」

「ああ……………」

「ム？」

「絶対キヨウダイだよな（ね）」

ロンガ達がファフロットに到着したのは、日が暮れた直後だった。道中、アイアを負ったロンガが『重い』と口を滑らせ、後頭部に杖の打撃が決まること都合四回。

流石に四回目には、アイアもロンガの背から降りたが。

「……………どした？」

傍らで頭を押さえてうずくまるロンガに声をかける。

「ハ……なんか、今回オレの扱いが酷い気がする……！！ しかも後頭部ばっか……」

「気のせいじゃないの？」

「……はちゆ割方お前のせいだよ！！！」

「八割方、ね」

ちなみに残り二割は作者のせい。

「一割は自業自得だと思うけど……」

と、まあ、宿探すなら早くしないと、野宿だよ」

「ハ、昔なら野宿が当たり前だったかな」

「……」

夜、とは言え、未だ人通りの絶えない時間。

街の通りを二人は歩く。

珍しくも、アイアが前で

「ねえ、ロンガはさ、誰か……人を探してるんだよね」

「……ああ。正確には探し出して、そして、殺すんだ。今までソイツに対する怨みだけは忘れたことが無い」

「ふーん……やっぱり、それは忘れられないの？」

「あたりまえだ。何の為に今まで　ここまで来たと思ってる」

「でも……なんか淋しいよ」

「……お前は？何の為に旅……家出なんてしてたんだ。しかも半ば強引にオレについてきやがって……」

アイアは軽く笑って振り返り、

「迷惑だった？」

と言う。

「……いいや」

笑い返すロンガ。

「ふふ。んー、まあ……実は私も人探しなんだけどね」

「ん、そうなのか？」

ロンガの応えに、

「確かに家も大嫌いだけど」

そう付け加える。

ロンガにはそちらの方が本音に思えた。

「……………」
前を歩くアイアの顔は、ロンガからは見えない。

「……………あ!！」

「!?! どうした!?!」

もう一度振り返ったその顔は、苦笑이었다。

「……………ココ、どこかわかる?」

夢を、みた。といっても、夢だと判ったのは当然、夢が覚めた後のことだが。

上下左右三百六十度真つ白の部屋……………いや、部屋なのかどうかも怪しい空間。

白色がまぶしすぎて、壁への距離どころかその存在すら判らない。その、?い部屋シロの中心に、オレは居るようだった。なぜか、自分の居る場所が中心だということには確信を持てた。

「なん……………だ?何処だココ……………誰もいないのか……………?」

「いるよ」

「……………!?!」

背後から声。振り返ると、子供がいた。

薄緑の服を着て、耳まで覆い隠す布の帽子をかぶっていた。性別

は わからない。

クスクス

その子供が、こちらを見て笑っていた。

「誰だ？お前はココが何処か知ってるのか」

クスクス……

笑い声。

「『ココが何処か』だって？それはキミが一番よく分かってるはずだよ、ロンガ・シーライド君」

今思えば何故なのか。この子供がオレの名前を知っていることに、そのときは何の疑問も抱かなかつた。

「……………じゃあ、お前は、誰だ？」

「それも」

子供は笑う。

「キミがよく知っているはずだよ」

子供との距離は少し遠い。けれどはつきりと、声は聞こえていた。

「……………」

少し考えて、次の問いを口にする。

「ココから、この部屋セカイから出るにはどうしたらいい」

クスクス、クスクス……

子供の笑い声が大きくなる。

「このセカイから出る？何を言ってるんだキミは」

嘲るように子供は言う。

「なにも解ってなかつたの？薄々感づいてるんだろ？ ただはつき

りとは認識できてない」

「……………？何を言ってる」

そのとき、視界に入った“何か”。

球形をした何かは、宙に浮く穴のようにも見えた。真っ白のセカイで、オレと子供以外に、ソレだけが色を持っていた。

「よかつた、戻ってこれたよあ〜」

「何、涙目で『奇跡が起こった』みたいな顔してやがる。普通だバ

力。……まあ、お前にしたら奇跡か」

「これは……確かデイルズの……」

その“何か”は、アイアとの会話　記憶を映し出していた。
気付けば、そこらじゅうに、色のついた球が浮かんでいた。

「あたりまえだ。何の為に今まで　ここまで来たと思ってる」
「でも……なんか淋しいよ」

「これは……ココは……」

「そう。ココはキミの精神世界。意識の底にある、カタチの無いセカイ」

「……お前の後ろにあるのも……」
子供の後ろに、幽かに、いくつかの球が見える。

「あれは……」
その球に、その子供に近づく　が。
「なんだ……!?!」

一步、また一步と近づいても近づいても、その子供との、その球との距離は縮まらない。

「言つたる? ココは意識の底のセカイだと。」

意識の底つてコトは、浅い無意識でもあるんだ。主導権は基本キミの意思にあるけれど、キミが本当の無意識下においているモノはその例外なんだよ」

「何なんださつきから!! 他人のコトを知ったようにペラペラと……!」

……!!
「待て……何でオレの精神世界で、オレのまったく知らない奴がい

るんだ……」

クスクス

「さつきも言つたように、ココは意識の中でも無意識に限りなく近い領域だからね。」

ボクも、キミの無意識下の産物なんだよ」

「別の人格……か、なにか……か……？」

子供の目は、少し悲しそうだった。

「そんな安いモノと一緒にしないで欲しいな……ま、ボクも存在を忘れられたままなのは気に入らないし。知りたいんだろ？無意識に封印した、自分の記憶を」

後ろに浮かぶ例の球体を指差して言う。

「……………！！！」

「ボクに勝てたら、教えてあげる」

朝。空は曇り。

「う、ふあああ~~~~」

木賃宿の粗末な寝具のせい、身体が少し痛い。背を伸ばせば、ペキペキと音が。

何か夢を見てた気がするんだけど、なんだったかなあ……

「あれ、起きてたの？」

開いた窓から外の街を眺めていたロンガに声をかける。

「ん、ああ……」

応えつつも、窓の外から眼を離さない。

「何か面白いものでも見えるの？」

「ん、ああ……やっぱ都会だな。」

「こんな時間から外に人がいる」

「ああ、朝市でもあるんじゃない？」

「『あるんじゃない？』って、お前、この街には来たことがあるんだろ？」

「んー、でも久しぶりだしなあ」

「いや、ホント久しぶりなんだよね。」

すると、ロンガは思案顔で言う。

「ここからヒフトフまではどれくらいなんだ？ 地図を見る限りじや、まだ大分距離があるだろ」

「船で川を下るんだよ。時間的にはそんなにかからないよ？」

「なっ！ふ、船え！？」

！！！！！！

それは、思わず身を縮めてしまうような大声だった。

「何、どうしたの、大きな声出して」

「ハ、な……にやんでもねえよ……」

その程度の台詞で囁む辺り、絶対なんでもなくないだろう。

「って、そーいや船つつつても、金とか大丈夫なのか？ メイコ達から貰ったのも、そこまで多くは無いだろ」

「……………」

「おい、ちゃんと中点は三点リーダーに変換しろ」

「……」話目は中点のままだったじゃない」

「過去の話蒸し返すんじゃない！」

あんどきは、作者も無知だったんだよ！」

じゃあ直せばいいのに、作者。とは、口には出さない。

何だか解らないけど、誰かが『それは言わないお約束だ』とか言ってる気がする。

「ハ、それは多分作者本人だ…… 多分面倒臭いだけなんだろうけどな！」

そうじゃなくて、とロンガは続ける。

「だから金は足りてるのかってことだよ」

「別に豪華客船に乗るわけじゃなし、たいした額にならないよ」

要は川を下ればいいのだから、小さな船を借りるだけでも事足りる。確か半日ぐらいで着いた筈だ。

そろそろ日の昇りきる頃。

二人は宿を出て街を歩いていった。

「で、どうするよ、とりあえず船着場か」

「そうね……そろそろ、ポケッツコミの関係をはつきりさせたいわね」

「何の話をしている!？」

見れば、アイアは何か物思いにふけていた。

「もつとこう……完全に“ポケ”か完全に“ツッコミ”か、どっちかのキャラがもう一人いればうまくいく……と、思うんだけど、どう?ロンガ」

「だから何の話をしてるんだお前!

この作者の実力じゃ、どうせ中途半端なキャラしかできねーよ!

! むしろ無駄に人数増やすな、收拾がつかなくなるだろ!!」

「『ふやすな』と、私に言われましてもですね」

なぜか敬語だった。

そのとき、アイアは、街に行く人の群れの中に、何かを見た。

それが何だったのか、ロンガには分からなかったが

「ロンガ! ちょっと走ってくる!!」

「ハ、はぁ！？ いきなり何を……！？」

真剣、というよりも、非常に焦っているような顔。

「あっ！ちよ……」

走り去るアイア。ロンガならば、本気どころか軽く走れば追いつける筈だが、あまりに突然の行動だった為か、ただ呆けていることしかできなかった。

「……………」

思考停止。

いくらか呆然として、呟いた独り言。

「欲求不満……………か？」

大きく溜息をついて、空を見上げる。

「あ、あの、もしかしてっ」

と、声をかけられたのは、まさにそんな時だった。

「はぁ、はぁ……………」

アイアは路地の壁に手をついて、息を整えていた。

「馬鹿な……………なんで、なんで……………はぁ」

杖で身体を支え、長く息を吐く。

全力疾走だった。

「なんで、キアラがいるの……………」

嘆くようにアイアが呟いた言葉は、弱々しく、風に流されていった。

キアラ・シルストーム。

ロンガの横にいる、アイアより頭一つ　ロンガからすれば頭二つ　背の低い、髪の長い少女は、そういう名前らしい。

で、何故そのキアラがロンガの前ではなく横にいるのか、だが、キアラが若干拳動不審気味にロンガに声をかけた後、

「こんな人、見かけませんでしたか？」

と言つて、差し出した写真に写っていたのは、見覚えがあるどころか、今さつき猛ダツシユで消えていった旅の連れである。

「ハ、なるほど、アイアの妹か」

そんなわけで、その旅の連れとの関係を訊いたり、軽い自己紹介などした流れで、当のアイア・シルストームを二人して探すことになったのである。

「つまり、家出した姉貴を探しに出てきた、というわけだ」

「ええ、そうです。まったく、何も言わずに家を飛び出して……

でもよかったです、えつと……」

「ロンガ、な」

「よかったです、ロンガさんと会えて」

「ハ、まあ、肝心のアイアには逃げられたわけだが……逃げるようなことなのか？」

キアラに声を掛けられて気付いたが、アイアはおそらく、街の人ごみの中でキアラの姿を認め、反射的に逃げ出したのだろう。

「でも、逃げることに無かったんじゃないか、あいつ……」

「そうですよねえ？話を聞く限りじゃ、家に帰ろうとしてるんですよ？

実の妹の姿見て、声かけるよりも逃げるって……」

「（なんだろう、コイツ、詐欺師か偽善者かの匂いがする）」

ロンガがそんなことを思っていると、キアラからじつ……と、見

もう一つは、これはアイアにも関係があることだが、シルストーム家は、富豪じみた金持ちの家だった、ということ。そして。

キアラが現れて、アイアとロンガの旅路に影響が出たことは二つ。一つは、アイアの顔が少し憂鬱そうになった、ということ。もっとも、勝手に飛び出してきた家に、もうすぐ自分から帰ることに、少なからず気が進まないのもあるのだろうが。

そしてもう一つは。

ヒフトフへと、川を下るために乗る船の代金の心配が要らなくなった、どころか、“豪華”までいかなくとも、しっかりとした客船に乗れたことである。

「アイア姉え、家帰ったら、お父さんとちゃんと会ってね？」

その声には、ドスが利いていた。

ロンガからはその顔は見えないが、背後からでも充分、黒いオーラがうかがえる。

「は、はい……」

「ロンガさんは、お客人としてあたしが話をつけますから。ご心配なく」

一方、ロンガに向けられた顔はカラリと、晴れやかだった。

「ハ、ありがたいな」

こつも、同じ空間にいる人間に対して、全く違う話し方ができるものなのか。

「でも、いいのアイア」

「ふえ？」

「妹がいるってコトは、別にオレがお前を連れてく必要は無いぞ？」
「何言ってるの、あんたもどうせヒフトフに行くんでしょ。ていうか……」

そこまで言うと、アイアはロンガに詰め寄り、キアラに聞こえないよう、声を潜め、

「私をキアラと二人つきりにする気!？」

絶つ……対、嫌よ!！」

と、後ろのキアラをこっそり指差し言う。

「(仲悪い……のか?)」

船は川を下り、ロンガとアイア、そしてキアラの三人は一路、ヒフトフへと向かう。

「……よかったですかね、“風霊”^{シルフ}以外にも、“オマケ”^{ウイザード}がついてくるみたいです」

ヒフトフのとある洋館の中。

キロは、目の前の椅子に座る男と会話をしていた。グラムとムラマサの姿は、無い。

「かまわないさ」

座ったままで、男は言う。

「その“魔法使い”^{ウイザード}が、グラムちゃんを退けるくらいランクの高い者なら寧ろ大歓迎だ」

ギシリ、と椅子が鳴る。

その男の身の丈は、キロを遥かに超え、その筋肉は、服の上からでも威厳にも似た存在感を放っていた。

「……直接会ってみて、ハッキリしましたよ……聞かされたときは、正直冗談だと思ってた」

「ん?何のことだ?」

「あんたが、アレの 父親だって話ですよ」

大男、イミル・ルカーソンは、邪悪な笑みを、浮かべていた。

END

第四閃

第五閃『揺れる夢と極寒の魔法』

私の髪は、軽い癖毛で、毛先が軽くはねている。

妹の髪は、羨ましいぐらいにストレート。

姉の髪は、私よりもっと癖が強くてボサボサだ。

それでも、髪の色合いは、若干の違いはあれど、みんなほとんどおんなじで。

性格も違う三人で、顔以外で似ている所はそのぐらいしかなかった。

けれどそんなもの、それで充分で。

私はどのキョウダイも、そんなに好きじゃなかった。

川を下る船の上。

耳を覆い隠す、白い髪を風になびかせながら、ロンガ・シーライ

ドは船の手摺に体重を預けていた。

「（もうすぐだ……）」

今までずっと、捜し求めてきた。

「イミル……」

口にするのも忌々しいが、その名を口にすることで恨みを、怨みを、確かなものとする。

「イミル・ルカーソン……」

会える確証は無い。けれど、予感はある。

「ロンガさん？」

背後から声。振り返れば、キアラがいた。

旅の連れ、アイアの妹。

実際、アイアとキアラはよく似ている。

多少、アイアのほうが背が高く、お互い腰まである髪の毛を、アイアは纏め上げてポニーテールに。キアラは切りそろえてさらりと流している。

「なんだ。アイアはどうした？」

「え〜っと、あのバカ姉え、ちよっと酔ったみたいで、船内で休んでます」

「ハ、そうか……」

キアラには、ロンガの顔が心なしか、青ざめているように見えた。

「ロンガさん？気分でも……」

遮って、ロンガは、

「ああ、いや、だいじょ……う、ぶおおえ、ええええええええ……」

……

吐いた。

「え、ちよ、ロンガさん!??」

手摺から身を乗り出し、川に向かって吐く。嘔吐する。吐く。

「お、おえっ……カ、は。う、げぼあっ……おええええ……」

「だ、大丈夫……ですか？」

キアラが背中をさすり、心配そうな声を向けてくる。

「はあはあ、はあ……くむっ、ご、おえ、ええええええええ」

「まだ吐く!? ホント大丈夫ですか!??」

ロンガは船が苦手だった。

「あはは、なるほど、『船』って聞いたときに、慌ててたのはコレかあ」

「うええ……ぎもぢわるい……」

船内ロビーに並ぶ長椅子の上で、ロンガは寝転んでいた。船内にいる他の客がたまに視線を向けてくる。

一方、アイアは気分がよくなったようで、笑顔でロンガの隣に座っている。

「アイア姉え、笑い事じゃない。

ロンガさん、はい」

と、キアラが水を持ってきた。

「ハ、悪いな……」

水を受け取り、一気に飲み干す。

「なんで、酔うって言わなかったのさ」

「いや……船なんて久しぶりだから……」

「まさかここまでとは思わなかった？」

アイアが言葉足らずなロンガの台詞を補足する。

「ああ……」

「（こんなに元気の無いロンガ初めて見た……）」

「……まだヒフトフまで結構ありますよ、頑張ってくださいね……」

キアラが気遣うように言う。が、それはロンガにはキツイ言葉にしか聞こえなかった。

「ハ……マジか……」

天井を仰ぎ、大きく溜息をついた。

「しばらく寝てたら？」

「……ああ……悪いが、そうさせてもらえるか」

アイアの提案に、力なく頷いたのだった。

夢を、見た。流石に、昨夜見た夢の続きなんて、見れる筈がない
と思っていたが、しかし。見たのだ。

上下左右三百六十度真つ白の部屋……いや、部屋なのかどうかも
怪しい空間。

白色がまぶしすぎて、壁への距離どころかその存在すら判らない。
その、？い部屋しよの中心に、オレは居るようだった。なぜか、自分
の居る場所が中心だということには確信を持てた。

「ハ、前と同じ……か」

オレの、精神世界。意識と無意識の狭間の、カタチなき世界。

「やあ、来たね」

またも背後から。

誰かは考えるまでもない。あの子供だ。

クスクス

前と同じ笑い声。

「ハ……前回、ものすごく中途半端なところで眼が醒めちまったか
らな……」

振り向いて、子供のほうを見る。

前と同じ、薄緑の服、頭を覆う服より濃い緑の帽子。

「確か……お前に勝てば、お前が何なのかも、オレが無意識に閉ざ
している記憶とやらも、教えてくれるんだっけ？」

クスクス

さつきより大きな笑い声。

「なにをいつてるんだい？ロンガ・シーライド。そのどちらも、ボ

クが教えるんじゃないよ」

「……………」

オレが沈黙を挟む余地を作ってから、子供は告げるように言う。

「キミが。自分で。気付くのだ。」

まあ、そのうち一つはすぐにでも理解できると思うけど」

オレの記憶を映し出す、色のついた球は、そこかしこに浮かんでいる。

「……………で? 『勝つ』とか『負ける』とか言うんだから、何かしらで戦うんだろ?」

何で戦うつもりだ?

取っ組み合い……………じゃあ、オレに分がありすぎる気がするが。

クスクス……………

子供の笑い声。嘲笑にも聞こえた。

「本気で言ってるの?」

え……………

子供の右腕が鋭く、光を放ち始めた。

まさか……………

「『戦う』んだから、これしかないでしょ?」

常識を破壊する、魔力。

そのもつとも単純かつ、もつとも純粹かつ、もつとも強力な使用法。

それすなわち 物質の生成。

【風霊の大剣】……………だと!?

その形状、その大きさ、見間違っはぶがなかった。

「ホラ、キミも出しなよ。自分の“神器”^{スキル} だろ?」

……………!!

ハ、いいだろう。やってやる。

左手を強く握り締め、今まで、幾度となく振るってきた、その剣をイメージする。

「^{スキル} “神器” 発動…………… 【風霊の大剣】」

映し出されたのは

「やめるおっ！……！」

剣を振り回し、“球”を掻き消す。が、またすぐに浮かんできた。同じ、“球”が。

「くっ……！！」

クスクス

子供は笑う。嘲る。

「ソレは、キミが忘れてたくても忘れられない記憶。封じ込めた記憶とはちよつと違うね」

はー……、はー……。

今のは……そうだ……この時から……。

「何をばさつとしてるの？」

……！！

ガキイイイイン

今度は剣と剣の直接のぶつかり合い。

二回。三回。四回。幾度も。大きな剣が幾度もぶつかり合う。

「お前は！」

ギイン

「あの日から！」

ギギッ

「……おおおおっ！！！！」

ひととき大きなぶつかり合い、そこから鏢迫り合いになる。

「くっ……！！？」

あるうことか。体格からしてオレに劣るはずの子供が、オレと、互角の鏢迫り合いを演じていた。

「クスクス……。気付いたかい？」

「僕の存在を、認めるかい？」

……！！

後ろに跳んで、距離をとる。

「お前が……あの日から、オレの“中”にいるなら……！！」

だが、そんな馬鹿な。コイツらは 存在しないはずだ
が
「お前は……」

ス ……ス ……

あれから。ロンガは、完全に眠ってしまった。
警戒心0（ゼロ）、だ。

しかし……

横で椅子の上に丸くなるロンガを見る。

しかし……これは……

顔が火照ったのが自分でもわかった。

これは……

「アイア姉え？どうかした？ 顔赤いよ」

キアラの声で、思考が寸断された。

「ふえ、あ、いや、なんでもないよ」

「ふ〜ん……」

「な、何よ……」

キアラが悪戯っぽい笑みを浮かべる。この子がこっぴつ顔をする
ときは、本気で面白い悪戯を思いついたときだ。

ただ、その悪戯が、キアラ以外にも面白かつた例ためしはないが。

「アイア姉えってさ」

ゴクリ

自分の唾を飲む音が聞こえた。

「ロンガさんのコトさ」

バツ！

「……………！！」

反射的に。杖を、キアラの目の前に突き出してた。

「そ、それ以上言ったら……凍らす……!!」

「アハハ、顔真っ赤だよ、アイア姉え」

「くっ……!!」

溜息をつきながら、椅子に深く腰掛ける。

「……そういえばさ、キアラはなんでファフロットにいたわけ？」

「なんで、って……そりゃ、あんたを連れ戻す為でしょ」

「そんな、いつ来るかもわからないのに、ずっとファフロットに？」

すると、キアラはさも当然のように、

「お父さんが『どうせアイアのことだから、しばらく迷子になった後近くまで帰ってくるだろう』だって」

あのオヤジ……!!

『近くまで』が、実際の距離的にはそんなに近くない辺り、信用の低さを感じる……

仕方ないんだけどね？

急速に戻ってきたことを後悔した……

「そんなわけで、そろそろ頃合かと、探しに出てたわけ」

なるほど……

「あ、そうだ」

何か思い出したのか、キアラが声を上げた。

「ん、どうしたの？」

その顔は、満面の笑みだった。サディスティックな方向に。

「アイア姉え、リックスとテイレイ姉えも会うの楽しみにしてるからね！」

「……!! わ……わす……っ……れてた……」

頭が真っ白になって、そこに、二人分の顔だけが浮かんだ。

弟リックスと、姉テイレイ。

私は、家が嫌いと言うよりは、この……

キアラを含めた兄弟関係が、苦手なのだ。

なるほど……そうか……

「ハ、納得がいったぜ。」

お前が【風霊の大剣】を使えることも、お前がオレの精神の中にいることも」

クスクス

「お前は、シルフ。」

風の精霊　風霊シルフだな」

クスクス、クスクス

子供の　否、シルフの笑い声が一際大きくなった。

「クスクス、そう！その通りだよ、ロンガ」

満面の笑みで子供、いやシルフは言う。

「僕は風霊シルフ。キミに宿る風の能力ちからの象徴、結晶、そしてソレそのものの」

「だが……“精霊”なんてモノは、在り得ないはずだ。

全世界ひっくり返せば、オレ以外に風霊の神器を持つてる奴なんて、一人や二人じゃないんだろう？」

とは言え『“精霊憑き（スピリウル）”の神器スキルは、同種、同列のものが発生する場合がある』というどこかで聞いたことを根拠にしてはいるものの、オレ自身、会ったことが無いから確証はない。

目の前の精霊……子供は言う。

「それは、ボクの存在が、世間一般……普通に言われている精霊とは違うからだよ」

「どついうことだ？」

「言つたる？　ボクはキミの能力ちからの結晶だと。」

つまり、キミの魔力の結晶。キミのイメージが魔力により、精神世界に具現した存在」

「そんな勝手な存在が在り得てたまるか。大体、なんでオレの“風霊”のイメージがお前みたいなお子供なんだ」

すると子供は口を尖らせ、

「そんなの知らないよ。むしろボクが聞きたい」

「……そうか………で」

剣の切先を相手に向けると、チャキリ、と音が鳴った。

「まだ、勝負は終わってない」

「そうだね、でも……」

そう言う、シルフの姿がぼやけだした。

「でも、そろそろ、時間切れみたいだ」

「なっ……!!!!」

「クスクス、また今度だね。ロンガ」

「ふざけるな!!こんな意味のわからない夢、『第六閃』まで持ち込む気が!!!!」

前々から思っていたが、この小説、行き当たりばつたりに書きすぎじゃないのか!

「キミが望むなら……また会えるよ」

「いセカイが暗転する中　　子供の後ろに浮かぶ“球”を見た。」

思いに反して眼は醒める。

いつの間にか掛けられていた毛布を払い除けて、ロンガは起き上がった。

「あれ、あいつらはどこに行った……？」

アイアとキアラの姿は、そこには無かった。

船の中には他の客もいるため、割と騒がしい。

「（ハ、よくこんなところで寝てたなオレ……）」

それほど体調が悪かったのだろうか。

しかし今は幾分かマシだ。

毛布をくるんでその場に置くと、おそらく外の空気でも吸いに行っているのだろう、アイアたちを探しに、ロンガは立ち上がった。

ジツとしていたくなかったのだ。

確かに船酔いは治まったが、胸焼けのような気分の悪さは、未だ続いていた。

明確に思い出せる、あの夢のせいで。

果たしてアイア達は甲板にいた。

「あ、ロンガ！起きたの？」

「ロンガさん、気分はどうですか？」

ほぼ同時に声をかけてくる二人。

「ああ、おかげさまで大分マシになったよ。

しかし……随分寝てたみたいだな」

ロンガは空を見上げた。

西の空に少し茜色を残し、他は紺色に染まった空を。

「ええ、ヒフトフももうすぐですよ」

ニツコリと、キアラが笑った。

キアラの台詞に、ロンガが安堵の溜息を漏らした、ちょうどその頃。

「ひ、ぎゃ、あああああああああああああああああああああああああつっ！！！！」

深く暗い、森の中。

ダレかのヒメイが木霊した。

地に這い蹲った、そのヒメイの主の目の前には。長身で、長い赤茶色の髪をもち、黒いコートに身を包んだ、女。

その右手には、巨大な松明のように燃え盛る、大剣が握られていた。

「えーっと？なんだっけ、“七罪星”？」

『強い“精霊憑き”^{スレリウル}がたくさんいる』？

この程度で“強い”なんて、その組織も程度が知れるわね」

嘲笑うかのような、否、実際嘲笑っているのだろう、そんな表情で、女は這い蹲る男を見下ろしていた。

「くっ……まさか、“火竜”^{サラムンダー}キョウコ・フレアライズがココまでとは……」

「ああ、助けを求めても無駄よ。」

この辺には集落は無いし、もう一人の方も、今頃私の妹が相手してるわ」

ギリ、と歯軋りの音。

「ふざ、ける、なあっ……！！！！」

男は木に右手をつけて、よろよろと立ち上がる。その身体は文字通り満身創痍。満身火傷。左腕は中間 手首と肘の間 から先が無かった。

「このオレサマが！「憤怒」のラージアが！！こんなところで！！！！」

ラージアの残っていた右腕が光を放ち、“神器”^{スキル}を生成する。

が、それより速く、早く。

ブレイド・オブ・サラマンダー
【火竜の大剣】による、燃え盛る一閃が 炸裂した。

「お姉ちゃん、終わった？」

背後の茂みから、キョウコの妹、メイコが現れる。ちなみに彼女は“魔法使い”だ。

「この人たち、なんだったんだろうね？」

傍らに転がる、左腕の無い男をみて、メイコが言う。

「さあ？ でも、“火竜”サラマンダーとか言ってたし、私というよりは、私の能力が目当てだったみたいね」

「“四大精霊”がどうとかも言ってたよ」

「ん？誰が」

「私の戦った子が。まだ転がってるよ」

後ろ、メイコが現れた方向の茂みを指差して言った。

「いろいろ聞き出したけどさ。ヒフトフに四大精霊の“精霊憑き”スヒリウル集めて何かする気みたいよ」

『何か』が何なのかまでは教えてくれなかったけど、と付け加える。

「フン、なににせよ、私たちには関係ないわ」

右手を開き、燃え盛る大剣を地に落とす 落ちきる前に、それは消滅した。

それを見て、メイコがわざとらしくも思い出したように声を上げる。

「そつえば、さ……」

「？」

「“風霊”シルフも四大精霊……だったよね？」

キョウコの方を横目で見据えるメイコ。

「……何が言いたいのかしら……？」

メイコは、屈託の無い笑顔を浮かべていた。

ロンガ達がヒフトフの地を踏んだのは、日がのつとりと落ちてからだった。

「んっ……んっ」

身体を伸ばすアイアを尻目に、ロンガは胸を抱えていた。

「……まだ気分悪いの？」

「……いや………大丈夫……だ」

「さて、と」

数歩前に行くキアラが振り返り、二人に話しかける。

「では、もう夜ですし、さっさと家に行きましょうか」

「うっ……」

と、言葉に詰まったのはアイア。

それを見てロンガは、

「お前が『帰る』って言い出したんだからな」

と、言つてやる。

「！！ なによ、まだ私何も言つてないじゃない！！」

「いや、帰るのが億劫になったのかと」

「……億劫にならない訳無いでしょ……」

家を飛び出してきたのだ 当然である。

しかし今は、戻らねばならない。

「（呪式魔導具ブラッドボックス………、猫刀ムラマサ………）」

右腕に変化する黯い箱型呪具、魔法的効果を持った刀に変身する猫。

調べる必要が、ある。

「（キロ・ウッドビレッジ………オレをこの街に来させて何ががある？）」

教会の街セドソンで、廃村デイルズで、オレ達を、いやオレを導くような真似をして見せた男。

少なからず、イミル・ルカーソンへの手がかりを握る男。

「（後で誰かに訊いてみよ……）」

「（お父さんなら、何か知ってるかな……）」

二人の思考は、前に行くキアラが立ち止まることで、寸断された。「ん？どうしたキアラ……」

問いかけて、ロンガも異変に気付く。

一目でそれとわかるほどの豪邸。その門の前に、黒い人影が二つ。十字架をあしらった黒い革のコート、同じく黒い革のマスク。

見覚えがあった。

「キアラ……あれ……」

アイアが震えた声を出す。

「うん……“断罪者”だ……」

魔力や異能力を認めない教会。

その中で、自らの能力を罪、もしくは神の為に奉げるべきものと考え、教会が危険と判断した“魔法使い”や“精霊憑き”、場合によつては凶暴化した“怪物”等を削除する。

そんな者達が、シルストーン邸の前にいた。

「とりあえず……様子を見たほうがよさそうね……」

物陰に隠れ、断罪者二人を観察する。

「……不用意に出ていっても面倒なことになりかねんしな……ってか、何をやってるんだあの二人、さつきから全然動いてないぞ？」

その二人は、お互い視線を合わせたり、辺りを見回したりしているものの、門の前からは動こうとしない。

「多分……待ってるんだと思います」

キアラが言う。

「ん？待ってる？」

「あ……、アレか……」

心底嫌そうな声で、アイアが言った。

「アレ？」

「なに、まだ治ってないの、姉えちゃんの放浪癖」
額に手を当てて、気だるそうに言う。

「え、姉えちゃん？放浪癖？？？」

ロンガは困惑しっぱなし。

「治るところか……アイア姉えが出てっってからさらに酷くなったよ！」

噛み付くように、キアラが言う。

「それ、私のせい！？」

「あ、コラ、大きな声を出すな！」

ロンガがアイアの口を塞ぐが、もう遅い。

「お前達、何をやっている？」

「ハ、ほら言わんこっちゃねえ……」

見つかった。

「何をやっているのかと聞いている」
ずい、と、詰め寄ってくる断罪者。

「くっ……」

「お前らまさか、奴の関係者……」

数歩後ろにいたもう一人の断罪者が、そこまで言って、口を閉じた。とは言え、顔はマスクで覆われているので、ロンガ達には始めから口など見えないが。

「？ どうした？」

ロンガ達に詰め寄っていた方の断罪者が軽く振り返り、相方を見る。

「おい、お前、あれ……」

指差す先は、ロンガ達遙か後ろ。

そこには、白衣の女がいた。

医者が着るような、丈の長い白衣。ボサボサ癖毛は顔の周りを護るようにつねり、その髪の間から覗く眼は、瞑い光を宿していた。
「でたな、ティレイ・シルストーム……！」

断罪者が、声を上げる。

「シルストーム……!!?」

「姉えちゃん!!?」

「テイレイ姉え!!?」

声はほぼ同時。振り向いたのも同時だった。

「ほほう……やはりアイツの関係者か……」

「よく見ればその杖、貴様も“魔法使い”ウイザードだな？」

断罪者たちがアイアの杖を指差して言う。

「“神器”スキル発動!!」

「!!! こいつら、“精霊憑き”スピリウルか!!!」

一人目、わずかばかり背の高い方。

「【毒鳥の長槍】スピア・オブ・コカトリス ツ!!!」

長く、濃い紫色をした槍。幅広の刃には、派手な装飾が刻まれている。

二人目、よりガツチリとした体格の方。

「【大蛞蝓の曲刀】サーベル・オブ・マッドスラッグ!!!!」

大きく手元の方へ反り返った鍔を持った、大き目の曲刀。その刃は、ぬめる液体で包まれているよう。

「ハ、ちようどいい！ 暴れたかったところだ!!!」

ロンガは凶悪な笑みを浮かべ、左手に魔力を込める。

「“神器”発動！【風霊の大剣】ブレイド・オブ・シルフ!!!!」

風を纏う左右対称の白銀の刀身。巨大なソレを、ロンガは片手で横に一振りした。

「ほほう、“精霊憑き”スピリウルだったか」

曲刀を持ったほうの断罪者が驚いたように言った。

「……ロンガ、私も手伝う」

アイアが杖を構えて前に出る。

「いや、いいさ、お前はキアラと……そこでさっきから突っ立つてる姉貴連れて離れてろ」

振り返りもせず、開いた右手の親指で後ろを指して言う。

「でも……」

「庇い立てをするなら、容赦はせんぞ!!!」

いいか、その女、ティレイの魔法技術は、世界にとって非常に危険なのだ！」

「そうだ、それに今日は街中で魔法を使ったというではないか。

教会は、ソレを見逃せないと判断した！」

「ハ！教会の言い分なんて知るかってんだ！

聞く耳もたねえコトぐらい解るだろ！

ゴタゴタ言つてねえでさっさとかかってこい!!!!」

大剣と、長槍と、曲刀。三つの魔力を持った刃物と、三人分の殺気は、その場の空気を沸騰寸前にまで高めていた。

「ひっ……なんか、いつになくロンガがハイテンションなんだけど!!!」

「と、とりあえず、ティレイ姉え連れて逃げよう、アイア姉え」

そのときだった。

ゾク

「!!!!!!」

背中に走る激しい悪寒で、ロンガは思わず後ろを振り返った。

完全な隙。しかし、その隙を突かれる事は無かった。

なぜなら、ロンガが振り向いたときには、その場にいた全員が、その悪寒を感じ取っていたから。いや、おそらく本当に、急激に気温が下がったのだろう。

我が名と、我が血を以って命ず。氷の精よ、我が敵を封殺せよ。

詠唱される古代呪文。そして

「デッドリィ・フローズン」

ティレイ・シルストームが、その魔法の名を呟く。
その瞬間だった。

パ、キイイイイイイイイイ！！！！

「……！！！！！！」

ソレを目の当たりにしても。ソレは絶対在り得ないと、はっきり
言い切れてしまう。

それほどの勢いで、スピードで。

アイアの姉、ティレイと断罪者二人の間の道が、空気すら巻き込
んで、凍りついた。

否、この場合逆かもしれない。直線上の空気が、周りのあらゆる
物体を巻き込んで凍りついたのだ。ティレイ本人を除いて。

ソレを僅かだが、早く察知したロンガと、ソレの正体を逸早く見
抜くことのできたアイア、キアラは、範囲外にダイブするようにし
て難を逃れたが、断罪者二人は、完全に凍りついていた。

比喩ではなく。本当に。

「ハ……………な、何だ……………！！？」

魔法……………！？ なの、か……………？」

「……………アレは……………確かに魔法ですが……………私達の使う魔法とは魔
法が違います」

幾つもの巨大な水晶が、一瞬にして其処に現れたかのように、ま
るで其処だけが、極寒の世界に堕ちたかのように。

風景すら完全に変わってしまう魔法。

「古代魔法……………」

キアラからアイアへ、台詞は引継がれる。

魔法とは、“言霊による魔力の行使”である。

本来魔力を扱う能力を持たない人間が、魔力を扱い人を襲う“怪物”や、“精霊憑き”に対抗しようと編み出した、特殊な魔力の使用法。

それは、一定の言霊を含む“呪文”の組み合わせがキーになって発動する。もちろん、それだけで発動できるわけではないが。

しかし、そういった仕組みが固定化され、それが“魔法使い”の間で常識として定着したのは120年ほど前の話。

それ以前、特に“呪文の組み合わせ”による魔法ができる以前、今から300年以上前の魔法は古代魔法、と呼ばれ、消費する魔力量、強すぎる威力、長く複雑な呪文詠唱、どれをとっても馬鹿馬鹿しくなるくらいに扱いづらく、今ではそのほとんどが忘れ去られたという……………

「……………わかった？」

「……………いつオレが、魔法についてのレクチャーを求めた？」

ロンガは額を押さえて苦笑い。

「あれ？」

「オレが言いたいのは、他人を巻き込むほどの魔法を、他人を巻き込みかねない放ち方して、悪びれるどころかずつとあそこで突っ立つたままの、お前の姉貴らしき人物は一体何なんだってことだ……………！！！」

「あはは……。ご明察の通り……」

アレが私の姉です、と。

アイアは頭を抱えつつ、空いた手でテイレイを指差した。

「テイレイ姉え!!! なんてことすんのよ!!!」

危うく私たちまで凍死するところだったじゃない!!!」

キアラが火のように怒り、ポーっとしていた白衣の女　テイレイに突っかかる。

「あれ〜?キアラちゃん、帰ってきたの〜?」

「今更気付いた!?我が姉ながら恐るべしっ……!!!」

「んー……あぁ〜、なるほど〜」

今更ではあるものの、説明を受ける前に状況を理解できたらしい。

「あはは、ごめんね〜、つい周りが見えなくなっちゃって〜」

頭を搔いて、ニコリと笑う。

「それでも、あんな魔法撃つことないんじゃないの……姉えちゃん
そこにアイアが近づいてきた。

「ん?んん!?　アイアちゃん!?!」

テイレイは不思議そうな顔のまま固まったかと思うと、ニパツと
笑い、

「アイアちゃん!!! 帰ってきたんだ〜!!」

と言つて、思いきりアイアに抱きついた。

ぐりぐり、ぐりぐり

「ふえ、あ、姉えちゃん!?　ちょ、苦し……ロンガ止めてー!!!」

ぐりぐり、ぐりぐり……

「ん?　ロンガ?」

「ハ……今気付いたのか……」

アイアを抱き締めたまま、顔をロンガのほうへ向けた。

「ん……」

ジツと、ロンガの顔を見つめる。

「(なんだ……?)」

じーっと、ロンガの顔を見つめる。

「……………」

じいー、っと、ロンガの顔を見つめる。

その間ずっと、アイアは抱き締められたままだった。

「だ……だから、くる……し……」

「えーっと、とりあえず、アイア離した方がいいんじゃない……」

「ん、わ！」

開放されるアイア。

「ハア……全く……。えっとね、ロンガ、この人が」

「ちょっとまって、アイア姉え、テイレイ姉え」

さつきまで、哀れな動物を見る眼で姉達のやりとりを傍観していたキアラが、割って入る。

「とりあえず家の中入ろうよ。こんな魔法使って……面倒な人に見つかる前にさ」

その台詞は、まるで地面から突き出した水晶の群れのような、氷を見ながら。

「ん、じゃー、ちょっとまって」

そういうと、白衣の裾を翻し、凍りついた断罪者二人に近づいて行き、ポケットから、文庫本サイズの本を取り出した。

「

我が声聞きし熱の精よ、その熱き腕にて彼らの身体を癒したまえ。

一瞬で、これもまた在り得ないぐらいの速度で氷が溶け、どさりと、黒いコートが二人が地に落ちる。

その身体からは、白い煙か湯気のようなものが、音を立てて立ち昇っていた。

「うん！ まあ、これで死なないでしょ」

「……………！！！！」

言葉を失う三人に、ティレイはボサボサの髪を掻き上げて振り返り、
「さ、じゃー家に帰りましょうか」
と、笑顔で言ったのだった。

第五閃

END

第六閃『シルストーム邸と親子喧嘩』

第六閃『シルストーム邸と親子喧嘩』

昨夜のシルストーム邸は、実は大騒ぎだった。

「お前、どれくらい家出してたの？」

ロンガの問いに、アイアは気まずそうに、

「半年……くらい………かな………」

と答える。

「あー………ハ、納得した」

「やあ！ ティレイにアイアにキアラ！ おかえり、我が娘達よ！
！」

「「エイク・ブリザ・ウオク……！」」

アイアの魔導具である杖と、ティレイの魔導具である本が同時に空を切り、両腕を開いて近づいてきた人物に冷気の弾丸を放った。

が、その二発の冷氣弾は、虚しい音を立てて、壁に命中した。

「はっはっは！！ 流石我が娘、氷のような冷たさだ！」

「……！！！？ なっ………！？」

その男は、アイアたち四人の背後にいた。

しかし、それでも、それが当たり前であるかのように、アイアもティレイも、少し悔しそうな顔をしただけだった。

「でもいくらなんでもアイア、半年振りの再会でそれはないんじゃないの？」

「おい……いま、オレにも見えなかったぞ………？ アイア、アイツ

は、誰だ……?」

「誰って、そりゃあ……」

「お父さん、ですよ。ロンガさん」

「ん?ロンガ? 君はロンガ君というのか。」

僕は君みたいな大きな息子を持った覚えは無いが………」

そこで言葉を切り、ジッとロンガを見る。

「な、なんだよ……」

「君は僕の息子か?」

「「「んなわけねえだろおー!!!」」」

今度は、ロンガ、アイア、キアラの三連続の拳を、ひらりと避けて距離をとる。

「はっはっは! 今のは冗談。アイアのボーイフレンドだろ?」

「「なっ……!?!? ハア!?!?」」

うるたえるロンガとアイア。

「お父さん……」

頭を抱えるキアラ。

「はっはっは!!! 少々お遊びが過ぎたかな?」

一応、自己紹介しておこうか?」

「オレは……ロンガ・シーライドだ。なんだかんだでコイツに連れてこられた」

「なんだかんだって!!!」

連れてこられたって!!!」

しかもコイツ呼びわり!!!」

ツッコむアイアを無視して、ロンガは目の前の男を見る。

「そうかい、ロンガ君というのかい。僕の名前はグレイン・シルストーム。」

そこにいる、娘達の父だ」

「ああーっ!!! もう!!! 毎度毎度、何度言えば分かるのよおとっさんっ!!!」

キアラが真っ赤な顔で怒る。

「父だの娘だの、恥ずかしいことばかり言わないでよっ！！」

「おい、アイア」

遠い眼でその光景を見ながらロンガが呟く。

「ん……何？」

「お前の家は、いつもこんな感じなのか？」

次の日の朝。

「ふえ、なんて？」

「いや、だからさ、お前の親父だよ。」

なんか武道の達人だとか、そんなのじゃないのか？」

「うーん……昔は傭兵団にいたとか言ってた気もするけど、何か気になるの？」

ロンガとアイアは、赤い上等そうな絨毯がひかれた、ただっ広い部屋にいた。

「いや、昨日のあの動き、どう考えても素人じゃなかったぞ？」

扉のある壁の逆側の壁にある、大きな窓。其処から差し込む光が、豪華な調度品や家具を照らしていた。

「確かに……私と姉ちゃん、魔法覚えてからは、何度もアイツに仕掛けてるけど……」

そういえば一発もあつたことがない、とアイア。

ちなみに、テイレイは昨日、アイアの父親、グレイン・シルストームとゴタゴタを演じているうちに、いつの間にかどこかに消えていた。

「しかし……ハ、本当に豪邸だな……」

ロンガは部屋を見渡しながら言った。

落ち着かないのか、赤い絨毯の上に胡座をかき、ヒザを揺すっている。

「椅子に座ればいいじゃない……」

アイアは椅子に座ってはいるが、背もたれを前にして、いかにも行儀がよくない。

「で？ こんなところで待たせて いや、まあ、一宿一飯の恩もあるし、別に構わないんだが……何をさせる気だ？」

「さあ……そんなの知らない」

よ。と、最後の一言は、勢いよく開かれた扉の音に掻き消された。

「はっはっは！ おはよう我が娘！そしてロンガ君！！」

アイアの父、グレイン・シルストームのテンションの高い登場に、二人は苦笑いだった。

「ん、姉ちゃん……はまだ寝てるだろうけど、キアラとリックスは？ もう起きてるでしょ？」

「（リックス……？ 犬か何かか……？）」

「ああ、あの子達なら自分の部屋で朝食を摂ってるよ」

「……？ おい、じゃあ、何でこんな部屋にオレたちを呼んだんだ？」

訝しげな表情でロンガは問う。

「まあ、それは、君にも関係があるんだけど、いや、君にこそ関係があると言つべきか。とりあえず、」

「にこやかな笑顔で、グレインは言う。

「とりあえず、朝ごはんを食べよう」

白く柔らかなパンと、目玉焼き。そして大皿に盛られたサラダ。

それらを運んできたのはあるうことか　いや、いつそ子の大きな屋敷には相応しい　身も蓋も無く言ってしまうえば早い話、メイドだった。

「……………お前の家には、あんな奴らもいるのか…………？」

部屋を出て行く二人のメイドの後姿を見ながら、しばらく呆けていたロンガが、アイアに小声で言った。

「え、いや、まあ……………いつもいっつもじゃないけど……………」

「はっは！　中にいるのはたったの五人だけど、家は無意味に広いからね」

グレインが、アイアの言葉を引き継ぐ。

「維持する為にはある程度、人手が必要なのさ。かといっていつもいるわけではないけれどね」

そこまで言うと、グレインはパンを一つ驚掴みにして、そのままかぶりついた。

「ハ……………ツツコみたいところは幾つか在るんだがな……………」

そろそろ、何のつもりなのか話してもらおうか」

仮にも、である。

仮にも、少なくとも、目上であろうグレインに対しても、全く媚びることの無いロンガ。

その目線は、しっかりとグレインを捕らえている。

「はっは！　そうだね。じゃあ、単刀直入に言おう」

広い部屋に、紅茶をすする音が響いた。

「キミは何で……………ヒフトフまで来たのかな？　いや、連れてこられたんだっけ？

じゃあ、何故……………おとなしく連れてこられたんだい？」

「……………」

「ロンガ君、だったね。僕は君の事をほとんど知らない、全く知らないと言ってもいい。

でも　まあ、これは僕の勝手な想像だから間違ってたらごめんね　君は、自分より他人を優先するタイプではないはずだ」

『勝手な想像だ』と言いながら、はつきりと言い切ってくるグレイン。

「それこそ、僕の娘たるアイアに惚れたのでもない限り、意味無くヒフトフまでくるとは思えない」

「……………」

苦笑いを浮かべるアイア。

「……………ハ、昨日からロクに会話しちやいねえってのに、えらく見透かしたようなことを言ってくれるじゃねえか」

ロンガの言葉に、にこやかな、やわらかい笑みを作って、グレインは応える。

「はっはっは！ まあ実際 見透かしてはいるよ」

「……………」

「お父さん……………」

「それは……………」

訝しげな表情で、ロンガが口を開く。

「オレの目的も、ってことか……………」

何の根拠も無い。コイツが知っているはずがない。

ロンガはそう思って それでも、『まさか』という思いがあつての発言。

ソレにグレインは、

「はっはっは！ うん。大体は察しがついてるよ」

にこやかな笑顔を保ったまま、そう言い放った。

「なっ……………！？」

「ちょ、ちよつと待ってよ、ロンガの目的なんて私も聞いた……………」

聞いたことが無い、と。旅の伴で友であるロンガと、己が父であるグレインを交互に見ながら、アイアはそう、言いそうになった。

言いそうになった。

聞いたことが無い、と。大嘘を。

既に何度も ではないが、何度か、聞いているはずだ。

それは、実も蓋も無く言ってしまったえば 復讐。
『とある奴を探し出して殺すこと』

『今までソイツに対する怨みだけは忘れたことが無い』
如何しても忘れられないと。そう言っていた。

その対象が誰なのか、どういう経緯で旅をしてまで復習をするに至ったのか。

詳しいことは、わからないけれど。

「まあ、詳しい話を聞いてあげようと思ってね。 念のために、キアラ達には席を外してもらってるよ」

あまり大勢に聞かれたくは無いだろうしね、とグレイン。

「……………お前……………一体ドコまで知ってるんだ？」

「知っているトコまでは知っているよ」

「……………」
「……………」

沈黙。

ロンガは、目の前の男を、信用していいものか、本当に詳しいことを話してもいいのか、見定めようと、鋭い視線をグレインに向ける。

逆にグレインは、そんな視線もどこ吹く風、目の前の銀髪の少年が言葉を発するのを、朝食を摂りながら待っているようだった。

睨み合い と言うには、一方的で、益体の無いその沈黙に、ア
イアも同じく沈黙しか挟めない。
しかし

「ああ、そうだ」

唐突に、グレインがそう声を上げる。

「どうやら、ロンガ君の方はなかなか決心がつかないみたいだし…
… 案外ヘタレなのかねえ、先にアイアの用件から聞いちゃおうか」

「なっ……………！！！！」

へタレだと!!!?

「え、私の用件？」

「隠さなくてもいいよ、アイア。」

君がわざわざ自分から、この家へ帰ってきたんだ。何かしら用があるに決まっているだろ？

もつとも、ロンガ君とは違ってその内容までは、分りかねるけどね」

「……………ん……………」

自身の親相手ということもあってか、アイアは、ロンガとは対照的に、すんなりと、その『問い』を口にした。

「お父さん、“ブラッドボックス”って、知ってる？」

「……………」

その『問い』を受けてグレインは。

グレインの顔は、今だ笑みのまま。

しかし微妙に、されど、他人であるロンガにも、それが感じ取れるぐらいには、表情が変化した。

「おいアイア、なんだその、“ぶらっとぼつくす”って」

「うん……………ちょっと、デイルズでね」

いくらか前、ロンガが、アイアが、この街、ヒフトフへ来る理由を作った場所。

今はもう、廃村となったデイルズ村。

そこで、ロンガは、何故か自分を狙う『七罪星』の一員を名乗るキロ・ウッドビレッジと。

アイアは、そのキロと行動を共にしていた、“魔法使い”^{ウィザード}グラムと。

それぞれ戦闘を繰り広げた。

デイルズを去る際、ロンガは、キロとの戦闘の内容　猫刀ムラマサや、キロの“神器”などについて　アイアに話していたが、アイアのほうは、ロンガには何も話していなかった。

「百歩譲って、形を変える呪具や魔導具はアリだとしても、身体の

一部になる　いや、身体の一部として結合する呪具なんて、あるの？」

アイアとの戦闘の際、グラムは、その左腕を何の抵抗も無く、恐れも、惧れも無く、引き千切り、その腕は四角い箱の形をした魔導具にカタチを変えていた。

アイアには、それが、そのときのグラムの表情や、飛び散った鮮血や、その他もろもろが、頭について離れなかった。どうしても、気になったのだ。

「『ブラッドボックス』ねえ……………」

「他にも、刀と猫の両方に姿を変える呪具とか」

「ハ、アレはなかなか強かったな……………」

キ口との戦いを思い出して、ロンガは苦笑いを浮かべてしまう。

しかしその表情も、次の瞬間には驚愕のものに変わる。

「はっはっは！　なるほど…………君たちはキ口君に会った　　それどころか戦ったのか」

「……………！！！？　知ってるの！？　か！？」

「はっはっは、意外なところで二人の話が繋がったね」

「オレはまだ何も話してないぞ」

グレインは、少し楽しそうな眼で、ロンガを見る。

「そう？　じゃあ、話してみるかい？」

「……………」

本当に、どこまで知ってやがるんだコイツは…………

「『七罪星』……………って……………知ってるか」

堅い口から、音が、言葉と成って流れ出す。

「『七罪星』！？」

されど、その言葉に驚きの声を上げたのは、アイアの方だった。

「ん？　なんだ、お前も知ってるのか？」

「知ってるも何も……………ねえ？」

そういつてアイアは父親の方を見やる。

グレインは、一口、紅茶をすすってから、話し始める。

「“七罪星”、つてのは、簡単に言えば傭兵団みたいなものなんだ」
「傭兵団……………」

「ただ、普通一般と違う、特異な点として、ソレを構成するメンバーの九割九分が異能者……………つまりは、“スピリチュアル精霊憑き”や“ウィザード魔法使い”なんだ」

「異能者だらけの傭兵団……………」

ロンガの言葉に、グレインはコクリと頷いた。

「もちろん、と言っていいのかわからないが、その特異性故に、マトモな傭兵団の仕事だけじゃなく、『人間』の手に負えなくなつた怪物の始末』、『同じく“人間”の手に負えない異能者の犯罪者の始末』なんかも、依頼を受けてるみたいだね」

「ハ、つまり、異能者をつかつた“何でも屋”ってところか」

苦々しげに放たれた、ロンガの呟きに、

「はっはっは！ その通り！」

快活な調子で、グレインは言葉を返す。

「でもね、ロンガ君、今言ったようなことは、この町の人間なら誰でも知ってるコトなんだよ」

「なに……………」

「それくらい有名なのよ、この街じゃね。」

つて、じゃあ、あのキロって奴は『七罪星』のメンバーだったんだ……………」

「ん、言つてなかったか？」

「聞いてないよ？」

「あれ……………マジか」

ロンガとアイアのやり取りを、グレインは柔らかな笑みで見っていた。

それとは対照的に、ロンガがグレインへと向けた視線は、鋭く冷ややかだった。

「で？ お前は、本当にオレの目的が分かつてるのか？」

「イミル・ルカーソン」

「……………」

「……………」

「君はこいつを探してるんだろう?」

「……………」

広い部屋に、沈黙が降りる。

「それがロンガの……復讐の相手?」

それを破ったのはアイアだった。

「……キロから聞いたのか」

「たしかに、直接聞いたのはキロ君からだけど、それをキロ君に教えたのは本人みたいだね」

「ハ……全く……どういっつもりか分らんが」

そういっつつ頭をかきつつ、ロンガは椅子から立ち上がる。

「その『七罪星』、アジトみたいなのがあるんだろう? 場所を教えてください」

「アジトって、ロンガ、今から行く気?」

「ああ。もう行ってみるしかないだろ」

「ちょ、ちょっと待ってよ、それで」

「まあ、ちょっと待ちなよ、ロンガ君」

あくまで軽い調子で、グレインが言う。

「アイア、君は『七罪星』のアジトの場所を知ってるのかい?」

「うっ……………」

「しらねえのかよ……………」

ロンガはピシヤリと、自分の額に手を当てた。

「それに僕は……………」

『ちょっと、やめなよリックス!!!!!!』

『うるさいキアラ! やると言ったらやってやるんだ!!!!!!』

ドアの向こうから、唐突に聞こえてくる、大きな声。

「なんだ……………」

「がちゃあ!!!!!!」

と、大きな音を立てて、扉が開いたかと思うと、部屋の中に、ア

「アイと いや、キアラと同じ髪の色をした、青年が乗り込んできた。」

「リックス！ お客の前だ、おとなしくしてなさい」

リックスと呼ばれた、その青年の耳には、グレインの言葉は入っていないらしく、素早く、部屋の中にいた三人 すなわち、ロンガ、アイア、グレインの顔をそれぞれ一瞥すると、

「お前か、ロンガ・シーライドってのは」

そう言って、腰に差していた剣を抜き放ち、切先をロンガに向けた。

「ん……？ なんだ、オレに何か用かよ」

そういうロンガの口元はうつすらと、笑みを形作っていた。

「（ロンガ……楽しそう……？）」

アイアが感じたその微妙な違和感も、次の瞬間には驚きによって上書きされる。

「ロンガ・シーライド。僕と決闘しろ」

第六閃 E N D

第七閃『乱入者と乱入者』

「僕と決闘しろ」

部屋の中に乗り込んできたその人物は、ロンガの顔を見るなりそう言い放った。

「何言ってるのリックス……」

背はロンガと同じくらい。短く切りそろえた髪は、アイアよりも色が薄く、丁度キアラと同じ色。

「ロンガ・シーライドだっけ？ 決闘だ。お前がアイア姉えに相應しいかどうか、見極めてやる」

「ハ、なんだいきなり、お前誰だ？」

耳を覆い隠すほどの量の銀髪を揺らして、ロンガが立ち上がる。

その問いには、隣にいたアイアが答えた。

「リックス……私の弟よ」

「！……犬じゃなかったのか」

「……何の話をしてるの？」「んだ？」「い？」

アイア、リックス、そしてその父グレインからの語尾の揃わない同時ツツコミ。

「ちよつと、リックス……！ どういうつもりよ……！」

リックスの後ろから、顔を真っ赤にしてキアラが怒鳴る。

「なんだよキアラ……僕のやることには口を挟まないでくれるかな。それにどういうつもりかはさつき言った」

「そうは行くわけないでしょ！？ 大体何よ『アイア姉えに相應しいかテスト』で『決闘』って……！」

「そうよ、それにロンガが私に相應しいかどうか……何に關係があるのよ」

アイアとキアラが姉妹で揃って捲くし立てる。

「はあ……」

温度が上がっていた部屋の雰囲気、そんな溜息で断ち切ったの

は、あるうことか、グレインだった。

「どうしたアンタ、テンションの高いキャラじゃなかったのか」

「いや、こっちとしてもそのつもりなんだがね。」

とりあえず、我が娘キアラよ、ロンガ君のことを僕の息子に話したね?」

「え、あー……………うん」

少しづつが悪そうにするキアラ。

「フム……………なるほどねえ……………」

グレインはロンガの顔を見つづにんまりと笑む。

「で? どうするんだ、その白髪。僕の挑戦を受けるのか。それとも尻尾を巻いて逃げるのか」

「あ……………」

アイアがそれに気付いたときはもう遅かった。

「しら……………が? はくは……………つ?」

正に鬼の形相。ロンガの顔に、怒りによる皺が幾本も刻まれている。

「銀髪って言えばよこの野郎」

いつも以上に、異常に、低くドスの聞いた声。

ロンガは、自分の髪の毛を白髪と言われるのを嫌がるのだ。

「どう言い張つても、『銀髪』は『白髪』の同義語でしかないのだが。」

「はっはっはっはっはっは!!!!」

「……………!!!?」「……………」

重くなった空気を切り裂く、一際大きなグレインの笑い声。

「どうやら、ロンガ君もやる気みたいだし、やってみるか? 決闘」

「お父さん、それ本気!?!」

「おいおい、誰がやる気だつて?」

「なんだ、やっぱりヘタレか」

「リックスも! もうやめなさいよ!」

リックスは、アイアにそうたしなめられると、一瞬弱ったような

顔をしたが、

「悪いけど、アイア姉えの言葉でもそれは聞けないよ」

「リック……って」

「ハ、ヘタレ……ねえ……親子揃って同じコト言いやがって……」

「ロンガも！！ 安い挑発に乗らないの！！！」

アイアの言葉は全く耳に届かず、ロンガとリックスは、二人、嗜虐的な笑みを浮かべ、凶悪な目線で威嚇しあっていた。

そこに、一人気楽な傍観者が 本来最も早くリックスを止めに入らねばならないはずの、父親であるグレインが、決定的な言葉を放つ。

「ロンガ君、君が僕の息子に勝てたら、君の知りたがっていたことを教えてあげるよ」

「ココに来て何をいっとなんじゃあああああああ！！！！」

アイアとキアラの拳が、グレインの顔面に炸裂する、と思われたが、グレインはあるうことか、椅子に座ったままの姿勢で その姿勢を崩しながら、もっと言えば椅子から落ちながら それをかわし、後ろに二回ほど飛び退いて、立ち上がった。

「くっ……」

苦々しく、舌打ちをするアイア。

「フン、もう付き合ってられない。ロンガ・シーライド」

アイアの弟、リックスは、

「中庭で待っておく。お前が、アイア姉えの傍に居たいなら そして、僕の挑戦も受けられないような腰抜けでないのなら、昼過ぎにそこに来い」

そうとだけ言って。キアラの脇を通り過ぎ、部屋から消える。

キアラは、憎々しげにそれを見送っていた。

「ロンガさん、あんな奴の言うこと、気にすることないですよ！ それに決闘だなんて……」

「……フン」

ロンガは、一度鼻を鳴らして、グレインのほうを向く。

「勝つたら、オレの知りたいことを教えてくれるんだって？」

「え、ロンガさん!？」

「はっはっは!そう!一つと言わず そうだな、三つぐらいは答えてあげてもいいかな!

もちろん『七罪星』のアジトも、だ」

「ハ、充分すぎるな」

「ロンガ……まさか……」

「ああ、そのまさかさ。どうやらこのままじゃ、グレインは『七罪星』の居場所を教えてくれる気はないみたいだし、それに」
それに

「あんな好き勝手言われて、何もせずにいられるかっての」

ロンガのその顔に張り付いた、嗜虐的な笑みは、同時に、随分と楽しそうだった。

シルストーム邸中庭。大きく開けた柔らかい芝生の上に、ロンガとリックスは向かい合っていた。

その二人の中間から少し離れた位置に、にんまりと笑うグレイン、心配そうに二人を見守るアイアとキアラの姿があった。

「全く……どういっつもりよ、お父さん……」

何で今日に限ってリックスの我侷なんて聞くのさ」

非難がましくアイアが言う。

「はっはっは! 言ったる?これはテストなんだ。

ロンガ君が、自らの復讐を果たす権利があるか否かの。

そして、ロンガ君がアイアに相応しいかのね。

こんなところで、しかも僕の息子に負けるようじゃあ、絶対にイミルは倒せないし、僕の娘の傍に置くには心許ないね」

「……………さつきも言ってたけど……………ロンガの復讐の相手……………その、イミルって人、知ってるの？」

グレインの台詞の後半はほぼ無視して、それでも、少しだけ顔を赤らめて、それを覆い隠すように、アイアは問うた。

「まあ、古い知り合い、ってところかな」

アイアには、父親であるグレインの、その表情が、とても懐かしそうにしているように見えた。

「ねえ、お父さん」

そこに、キアラが声をかける。

「ん？ なんだい、キアラ」

「いくらロンガさんをテストするためって言ったって、私はコレ…

…やりすぎだと思っうな」

「……………どうしてだい？」

「……………」

少し諦めたような、そんな表情で、キアラは草の上に腰を下ろして、父親の問いに答える。

「だってコレ、“決闘”なんでしょ？」

歩数にして十二、三步ほどだろうか。そんな距離を飛び越えて、アイアの弟だというリックス・シルストームの声は、ロンガの耳に届く。

「分っていると思うが、ロンガ・シーライド。

「これは“決闘”、手加減は無用だ」

リックスは、腰に帯びていた長剣を引き抜き、切先をロンガに向けて、

「ココで僕なんか殺されるような奴に、アイア姉えは護り切れない」

「ハ」

『オレがアイアを護りきる』などとのたまった覚えは無いが……ってか何から護るってんだ。

「フン、何ださつきから、アイア、アイアって。

シスコンかお前」

「そうだ。僕はシスコンだ」

「……………っ！！！！」

予想外！認めやがったこいつ！！！！

「ただし僕は、テイレイ姉えにもキアラにも興味は無い。

僕の愛情の対象はこの世でただ一人、アイア姉えだけなのさ！！！！」

「ハ……お前、多分この作品で一番キャラ濃いぞ……」

自分のキャラが飲まれないかと、心配するロンガに対し、

「ところでお前、武器はいいのか」

と、ロンガの正体を知らぬリックスは、まさに要らぬ心配をする。確かに、ロンガは一切の武器をその身に帯びてはいない。

「ハ、なんだ、キアラから聞いてないのか」

そこでロンガは、一瞬迷ったように視線を逸らし、そして軽く溜息をつく。

「オレは“スピリチュアル精霊憑き”でね。武器ならここにあるんだ」

左手の親指で、自分の胸を差しながら、ロンガは言った。

「……………！！なるほど。」

これはますます、アイア姉えに近づけておくわけにはいかなかったな

その言葉にロンガは顔をしかめるが

「それじゃ！ そろそろ始めようか二人とも」

と、近づいてきたグレインの声が、会話を断ち切った。

「……………」

後は二人、無言のまま睨み合う。

「それでは！！」

グレインの右手が天高く上がり ロンガは姿勢を低くし、

リックスは剣を構える

「始めっ！！！！」

「ハ！」

柔らかな草を 地面を踏みしめて、ロンガは、リックスへと猛
スピードで突進してゆく。

もちろん、利き手である左手には、魔力を集中させながら。

「フン」

やはりな。

武器を持たぬことで、全力での疾走を可能にし、直前で武器

“スキル神器”というのだったか それを生成する事で、そのリーチや

形状を相手に悟らせない…………… “スレリウル精霊憑き” だからこそできるいい手
だ。

「だが！！！！」

エイク・ロウル！！！！」

剣を横に薙ぐと共に、唱えた呪文。

放たれた魔法は、その場に、両雄の身長を越える大きさの氷の壁
を作り出した。

「……………！！！！ ハ、知るかそんなもん！！！！」

突如として現れた障害物にも、全くスピードを緩めることなく、
【ブレード・オブ・シルフ風霊の大剣】！！！！」

風纏う大剣を生成し、氷の壁へ叩きつけた。

ガアアアアアアツ！！！！

「な……ぐあああああああああ！？」

その剣の、そしてそれが纏う風の破壊力は、氷の壁を打ち砕いたばかりか、その裏にいたリックスすらも吹っ飛ばした。

「が……あ、く……なんで……っ」

地面にしこたま身体を打ちつけ、苦しそうにうめくリックス。それもその筈、である。

全力疾走が可能。相手に武器のリーチを悟らせない。

それは『武器を始めに生成しない』理由としては完璧である。

しかし『武器を後から生成する』理由としては後一步、である。それ即ち、剣閃の初速。

何も持たずに腕を振るう、その速度のなかで大重量の大剣を生成し、さらに勢いをつける。

重量と速度が生む破壊力！ それは完全にリックスの計算外だった。

いや、完全に、と言うならば、“大剣”^{ブレイド}の重量、そして何より“風霊”^{シルフ}の風の威力こそ計算外だったが。

「が、く……そ」

目を白黒させながらも、起き上がるリックス。そこに

「ハ、食らえボケ」

「え　？」

リックスが魔法で作り出した氷の壁があつた場所、即ち、リックスが吹っ飛ばされる前にいた地点から、たったの一步でロンガは、リックスに肉薄し、その鼻面に思いつき蹴りを叩き込んだ。

「ごあああああああああ」

みつともなく再び地に転がるリックスに、ロンガはさらに追撃をかけようと、接近し、右手に持った剣を振り上げた。

「く、くそっ……！！！」

ロンガに向かって剣の切先を向けようとするリックスだが、

「！！！！」

その切先は、ロンガの左足で地面に踏みつけられていた。

「ハ、身の程知らずが。これで終わりだな」

振り上げた剣が纏う風圧が、僅かに強くなる。

「な、ちょ　　待て、待ってくれっ」

手を前に出し、助けを請うリックス。

「手加減なし、なんだろ？」

「う、うわあああああああああああ！！！！」

風纏う大剣が、無慈悲に、迷い無く、一直線に、振り下ろされた。

「はっはっは！　いや、ちょっと本気で殺^ヤっちゃったかとおもった
ね！」

そんなグレインの声に、固く目を瞑っていたリックスはその目を
開く。

ロンガの“神器”^{スキル}【風霊の大剣】^{ブレイド・オブ・シルフ}は、リックスの左側の地面を深
く抉っていた。

「ハ、こんな遊びみたいなんでいちいち殺すかよ。　それに仮に殺
つちまったら、アンタが黙ってなかっただろ？」

グレインのほうを向きながら、ロンガは言う。

「まあ、そりゃあ、ね」

「ははは……なんだよ……本気で殺されると思ったじゃねえか……」
引きつった笑みを浮かべながら、安堵の台詞を口にするリックス。
「リックス、鼻血出てる」

キアラがぶつきらばうに言い、白いハンカチをリックスに投げて
よこす。

「ああ、ありがと……」

「全く……ホント無茶するんだから」

「うるさい……ホントなら勝てるはずだったんだ」

決まり悪そうに言うが、

「はあ！？ どころが！ ボロ負けだったじゃない！！！」

ばっさりと切られてしまった。

「キアラ……お前はもうちょっと言葉に気をつけたほうがいいんじゃないのか……？」

「……ロンガは、大丈夫？」

弟達のやり取りを、優しい眼で見ていたアイアは、ロンガのほうを振り向いて言う。

「ハ、一発も食らってないんだ、怪我也何もねえよ」

「そう、よかった」

にこり、と笑うアイア。

ロンガはその顔を見て、『顔は似てるが、笑い方は似てないな』と、益体のないことを思った。

「……………くっ」

「リックス？」

リックスは、よろめきながらも立ち上がると、キアラの声も無視して、館の方へ進んでいく。

「おい、リックス」

その背中にロンガが声をかける。

「また今度戦るか？」

ピタリと、一度立ち止まって。数瞬の時間が流れた後、

「やだよ」

振り返りもせずそう言って、また歩き出した。

「ハ、どうやら嫌われちゃったみたいだな」

「もとより好かれる要素無かったけどね？」

「ロンガさんがアイア姉えと仲良いのがそんなに気に入らないんだ

ね

「はっはっは！ 流石に僕の息子に僕の娘はやれないよねえ」

「ああ、そうだ、グレイン。勝負は俺の勝ちだ。さっさと『七罪星』のアジト、教えてもらおうか」

「はっはっは！ そういえばそういう約束だったね。仕方ない」

そこで一度言葉を切って、口調を変えてグレインは続ける。

「けれど、これだけは約束してくれ。たとえ『七罪星』のメンバーと戦うことになっても絶対に

ド
ン
ッ
！！！！

「！！！！」

「なんだ！？」

空気を、そしてその場にいるものの鼓膜を揺らす、爆発音。

見れば、邸の壁が崩されていて、そこから侵入者が中庭に入ってきた。

耳を覆い隠すほどの漆黒の髪。見るだけでその力強さが伝わってくる、鍛えられた大柄な身体。

「久しぶりだなグレインよ。相変わらずのようだなにより」

顔に幾本か刻まれた皺と、低く響くその声は、その持ち主の年齢をうかがわせる。

「……お前は……！！！！」

その驚きは、声をかけられたグレインではなく。

「イミル……！ ルカーソン……！！！！」

「……！！ アイツが……！！！！」

「ん？ フ、やはりここにいたか。お前も、随分と久しぶりだな」
言い終わらぬうちに。ロンガは“神器”^{スキル}を生成し、その大男へ飛び掛っていた。

「ま、待て、ダメだロンガ君！！」

グレインの制止も、ロンガの耳には届かない。

第八閃 『逃亡と再会』

「俺が目下興味があるのは、君が我々の用件を理解してくれているかどうか、ということだよ、グレイン」

リックスとロンガの決闘が終わり。

多少なりとも緩やかな時間が流れるかと期待された午後。

それを屋敷の壁とともに粉々にして、中庭に現れた二人の乱入者。

「……………くっ……………」

ロンガは、頭を押さえながら、なんとかその身を起こす。

「ロンガ……………」

アイアが声をかけるも、ロンガのその眼は完全に、イミルという大男と、もう一人の乱入者、短く切りそろえた金髪の少年のほうへ向いていた。

「どういうことだ、イミル・ルカーソン。お前らは、オレに用があつたんじゃないのか」
立ち上がってロンガは言う。

「フ、もちろんそのつもりだが、先に確認すべきことがあるのだよ」

「エイク・ブリザ・ウォク……………!!」

突然に、イミルに襲い掛かる冷気の弾丸。

それをイミルは、左腕で受ける。

「……………フ」

凍りついた左腕には何の感情も示さず、歪んだ笑みを、グレインに向ける。

「……………出て行け……………ッ……………!!」

「……………!!? お父さん……………!!?」

娘であるアイアですら、見たことのない、父の怒りの表情。

「フウ……………それがお前の“答え”か、グレイン」

「前々から言っているだろう?」

グレインは、傍らで震えていたキアラに、

「キアラ。お前は、リックスをつれて、出来るだけココから離れるんだ。屋敷からもね」

そう声をかけた。

それを聞いてキアラは我に返り、

「わ、わかった……」

と、金髪の少年の横で倒れるリックスを、勇敢にも助け起こしに行き、何度かグレインたちを振り返りつつも、中庭から去っていった。

「……残念だよ、グレイン」

イミルが凍りついた左腕を右手で掴むと、ミシリミシリと音を立てて、その氷が崩れ去った。

「………フン、やはり効いていなかったか」

憎憎しげに、グレインが呟く。

「まあ……今回は、君への用はついだったわけだしな。今日のところはもうどうこう言わんよ」

その台詞は、左手を開いたり閉じたりしながら。

「だが、本来の目的……」

それまで無表情だったイミルの顔が、途端、嗜虐的なものに変わった。

「“風^{シルフ}霊”の回収はさせてもらっぞー!」

「くっ……!」

イミルの声に反射するかのように、ロンガは立ち上がり、大剣を構える。

「ちょ、ちょっとまってよ………“風^{シルフ}霊”の回収って、どういこと?」

………どうしてアンタは、アンタ達はロンガを狙うの!??」

ロンガの隣のアイアが、イミルに向かい、恐る恐る言う。

「………黙ってるアイア。これはオレと、こいつの問題なんだよ」

「そんな……!」

「ほう……他人を巻き込まんとするか。 なかなかいい心がけじゃないか……なあ、我が息子よ」

「い ……!?」

ポニーテールを、振り乱して、アイアがロンガのほうをむく。

「い……いま、なんて……?」

「ハ、聞いたとおりだ。 オレは、そのイミル・ルカーソンの息子なんだよ」

「んな ……!?」

再び驚愕の声を上げたアイアを尻目に、ロンガはイミルに向かい、「おい、糞親父。 オレがおとなしくお前についていくって言ったら……こいつらを傷つけないって、約束できるか?」

「ロンガ……?」

「フ、五年でずいぶん利口になったな…… 生意気なのは気に食わんが、いいだろう、約束しようじゃないか」

大男イミルが、ロンガに手を差し伸べる。

「ダメだ!」

そういつて、ロンガの腕を掴んでとめたのは、グレインだった。

「……はなせ。 このままここにいたら、お前らにも迷惑がかかる」

「はっはっは、それが案外、そういうわけにも行かないんだよねー」

「? どういうことだ……?」

訝しむロンガに、そしてイミルにも、グレインは柔らかな、刺の無い声で言う。

「ロンガ君はさつき、『自分とイミルの問題』だと言ったけど、案外そうでもなくてね。 関係のある人は、結構他にもいるんだよ」

「……何が言いたい……?」

「それは ……」

「 ……!!! ビリー! 奴を止める!!!」

イミルは、傍らにいた金髪の少年に向かい叫ぶ。

その少年は、イミルの言葉に一瞬遅れたものの、すぐに反応し、右手に魔力を込めるが

ズブリ

ビリーと呼ばれた、金髪の彼の“神器”^{スキル}の発動より、ずっと早く。グレインは、その中指を、自分の右目に突っ込んだ。

「なあっ……！！ 何やってんだお前！」

「お、お父さん！？」

気味の悪い音を立てて、グレインの眼窩から引き抜かれる何か。それと共に、グレインの口から、高度な魔法を発動する呪文が零れ落ちる。

「―― (大地よ) ー」

(凍れ)

「Sharpenn (鋭く) ー」

(尖れ) ー」

一瞬にして、ロンガとエア、イミルと金髪の、その間の地面から、水晶のような、氷の塊が立ち上る。その鋭い切先を、すべてイミル達に向けて。

「く ー！？」

「……………！！」

それを避けるべく、イミルと共に、ビリーは“神器”^{スキル}の生成を中断して、後ろに飛び退く。

ロンガとエアは、その場から動く必要すらなかったものの、その驚きは、イミルたちと同程度のもだった。否、エアにいたってはそれ以上だろう。

「お父さん……その……手の……」

「はっはっは！ まあ、事情は後でゆっくり説明するさ……」

グレインの右手に握られていたのは、眼窩から引きずり出した自分の眼球……ではなく、血を固めたように赤黒い、立方体だった。

「ブラッド……ボックス……」

にこりと笑い、グレインは、次の魔法を詠唱する。

「―― (開け) ー」

(飛べ)

「―― (消えよ) ー」

「―― (此処は彼方に) ー」

(光は翼に)

— , A i a ,

！（われらが消息は何処）！！！！」

「何をする気だ、グレイン！！」

叫ぶイミルの目の前で、グレイン、ロンガ、アイアの三人が、青白い光に包まれる。

ビリーは右手を彼らに伸ばすが

「スキル“神器”……」

「……！！」

光に包まれていく、ロンガの視界。

そこでロンガは、金髪の少年、ビリーの“スキル神器”の姿を、ハツキリと捉えていた。

「……イミルさん……あいつらは？ どこに消えやがった」

それまでほとんど声を発しなかった、金髪の少年、ビリーが、不思議そうにかつ、苛立たしそうに、イミルに問う。

「フ……俺としたことが……やられたよ」

「やられた？」

グレインの創った氷。その残滓を眺めて、ビリーが眉をひそめる。

「ああ、テレポーター空間転移魔法なんて……洒落にならないほど高度で、希少な魔法を使うとは思わなかった」

「古代魔法……ですか……」

「フン、まあいい。あんな魔法を使ったんだ。少なくともグレインはしばらく動けないだろうし、とりあえず一度帰るとしようか」

「う、が、お……うえ、えええ……」

「ロ……ロンガ……大丈夫？」

ヒフトフの街の外、木々のまだらな森の中で、アイアは、嘔吐するロンガの背をさすっていた。

「がは……っ……はー、はー、サンキュー、もう大丈夫だ……」

「はっは……ごめんね、ロンガ君。アレってさ、やっぱり気分悪くなるよね」

「……そういうあなたは大丈夫なのか？ 相当へバってるみたいだが」

グレインは、地面に座り込み、背中を木に預けていた。

「はっはっは……やっぱり、そう見えるかい？ 正直ちょっと……動けそうにないんだ」

心なしか、笑い方もぎこちなく、額には汗が滲んでいた。

「お父さん、本当に大丈夫なの？ 空間転移なんて……」

「はっはっは、アイア、君は絶対真似をしないことだね。ただでさえ果てしなく高度なのに、三人一緒なんて、間違いなく寿命を縮めるよ」

「笑い事かあっ！」

「ハ、確かに笑い事じゃないぜこれ……これからどうするんだよ……」

まあ、それはおいおい考えるか」

そういつて、ロンガはグレインの前に腰を下ろす。

「……いろいろ聞きたいこともあるしね」

アイアも、その場に足を抱えて座った。

「やれやれ……まあ、話さないわけにも行かないか……」

だが、何から話したものかな……」

「もしかすると、薄々感づいているかも知れないけれど、僕はずっとまえ……そうだな、キアラとリックスが産まれる直前ぐらいまで、『七罪星』のメンバーだったんだ」

「……………」
グレインの話を、神妙に聞くロンガとアイア。

「その、『七罪星』について、もっと詳しく教えてくれないか？」

ロンガが言う。

「ああ。『七罪星』はね、前にも言った通り、“スピリチュアル精霊憑き”や“ウイザード魔法使い”ばかりの傭兵団……いや、何でも屋なんだけど、そのトップに位置……というか、名目上の幹部と言えるのが、原罪になぞらえた「称号」を持つ七人だ」

「七人もいるの……？」

「まあ、これは『七罪星』発足時のメンバーが七人だったとか、いろいろ理由はあるんだけど、実質、そのトップ七人の中のさらにトップ……『七罪星』のヘッドとも言えるのが、あの“「強欲」のイミル”こと、イミル・ルカーソンだ」

「……………」

ロンガは、左手の親指を唇に当てて、少し考えてから、

「あなたの實力なら、その七人の中に入れるぐらいの地位にはいれたんじゃないのか？」

と言った。

もっとも、ロンガは、まともにグレインが戦ったところを見てい
るわけではないので、その實力の判断材料は、先ほどの転移魔法ぐ
らいしかないのだが、それでも。彼の實力が並から掛け離れてい
ることぐらいは、理解できた。

「はっはっは！ 僕なんかがまともに戦ったって、七人中五位ぐら
いが関の山じゃないかな。特に今の“「称号」持ち”はね」

「え……そんなに強いのか、あいつら……」

アイアの顔は苦笑い。

「まあ、そりゃあ、ね」

「なあ、さつき『今の』って言ったけど……」

ロンガが眉をひそめて、問う。

「ああ、あれか。『七罪星』は、完全に実力主義だし、「称号」持ち”も、僕が抜けた後で、死んだり新参者に取って代わられたりして、ころころとメンバーが代わってるんだよ。僕が居た頃から代わっていかないのは、イミルと、後はせいぜいもう一人ぐらいだ」

「あの金髪の野郎は？」

ロンガは、その金髪の少年、ビリーが一瞬見せた、“神器”^{スキル}の形を思い出していた。

「彼は……僕も知らないなあ……けれど、前に言ってたろ、キ口君。僕が居た頃は、彼はまだ新米だったんだけど、なんせ、存在だけで特異な“精霊憑き（スピリウル）”の中で、さらに特異な“神器”^{スキル}を宿してたし、僕の引退後も何度か会ったことがあるんで、覚えてるんだよ」

「キ口……か……」

「ああ、そうだ！ 何でお父さんが、その……“ブラッドボックス”を持つてるのさ」

「ああ、これか」

グレインは、下瞼を中指で押し下げて、自身の すでに“右目”として眼窩に収まった ^{ブラッドボックス} 右目を露にする。

「当たり前といえば、当たり前なんだよね。僕がこれをもってるのは。」

だって、“ブラッドボックス（これ）”は、僕が製作^{つく}ったんだから

「え……！？」

「『七罪星』の中での僕……というより“魔法使い”^{ウィザード}の役目は専ら^{せい}、戦うことよりも、そういう“魔力”とか“魔法”とか、そういうモ

ノの研究が主なんだ。

そのせいか、主に先頭面を担う今の「称号」持ち”は全員“ス精憑き”だそうだ”

過去を懐かしむように話すグレイン。

「もつとも、ブラッドボックスの開発は、僕とイミルが共同でやったんだけどね」

「じゃあ、それで完成したのが……」

「それがさ、完成じゃないんだ。“ブラッドボックス”の完成は、まだ完成じゃない」

「？ どういうことお父さん」

アイアの問いに、グレインは、その右手の人差し指を唇に当て、残念ながら、これ以上は話せないんだよねー」

「はあ!？」

「おいおいおい……話せないってどういうことだよ……」
アイアだけで無く、ロンガも呆れたように文句を言う。

「……後の楽しみがなくなるだろう？」

「「そんな問題かつ!!!」」

ビシィッ!

「ガファあつ!!!」

アイアとロンガの、息ぴったりの裏拳が、グレインの鼻面に決まる。

「う……動けない相手に……それは酷いんじゃないか二人とも……せめて鍵括弧ぐらいくる暇をくれよ……」

鼻をおさえてうめくグレイン。

「ああ、わりい、つい……」

「あはは……」

詫びるロンガと、笑って済ますアイア。二人して罪の意識は薄いようだ。

「ハ、まあ、話せないのなら別にいいからさ……」
仕切りなおすように、ロンガが言う。

「その、なんだ、“ブラッドボックス”っての、もっと詳しく教えてくれないか？」

アイアから名前聞いたのと、お前がさっき使ってたやつ見ただけなんだ」

「ああ、そっか、ロンガはあの女の子と戦ってないもんね」

「あのキロと一緒にいたやつだよな？」

「キロ君と一緒に……？ あの子は他人と一緒に行動するタイプじゃなさそうだったが……まあいいか。ブラッドボックスだったね」
「……………」

改めてグレインの方へ向き直るロンガ。

「その前にロンガ君。君は、魔法を使おうと思ったことはあるかい？」

「無いわけでは……ないなあ……こっそりアイアの杖借りたりもしたし……」

「したのかよ！ 何で勝手に！」

「ハ、別にいいじゃねえかよ……」

だって“神器”^{スキル}と“魔法”両方使えたら最強じゃん？」

ちよつとばつが悪そうに言う。

「そう！ それだよロンガ君。 “精霊憑き”^{スピリチュアル}の殆どが一度は考えてみるからだ。」

で。魔法は少しでも使えたかい？」

「ハ、全く無理だったぜ。 やっぱ見よう見まねで出来るもんじゃな」

グレインは人差し指をロンガの目の前で立て、ロンガの台詞をためた。

「見よう見まね？ ロンガ君、たとえ50年100年かけて勉強しようとも、君に魔法は使えないよ」

「！？ ……どういうことだ？」

「そもそも魔法というのは、大昔、まだ“魔力”の存在に気がつき始めたころの人間が、同じくそのころから現れ始めた魔力生物モンスターなんかに対抗しようと、その乏しい魔力を利用して生まれたものなんだ」

魔法の歴史を語るグレイン。

「ここまで言えば、アイアには分かるんじゃないか？ ロンガ君がまったく魔法を使えない理由が」

そういつて、悪戯っぽい笑みで、アイアのほうを見る。

「ふえっ……なんで私に振るのよ…… えーつと……」

もしかして、ロンガが“人間”じゃない“精霊憑き”だから？

「そう、その通り！」

「……まったくわからんぞ、何でオレが“精霊憑き”だったら、魔法が使えないんだ？」

頭をかいて、しかめっ面のロンガ。

「簡単に言えば、魔力の“型”が違うんだ」

「型？」

「そう、“魔法”は、複雑で難解な古代魔法だろうと、簡素化されて、決まった組み合わせで容易に発動できる現代魔法だろうと、あくまで人間が、自分たち人間用につくったものなんだ」

“精霊憑き”も、人間だ」

「見た目と考え方によつてはね。けれど“人間”と“精霊憑き”、その二者の間には、蜥蜴と竜ぐらいの差があるんだよ」

「……………」

“精霊憑き”。それは、“魔力”をより高度な次元で扱えるように進化した人間。怪物の人間版、である。

「で？ それと“ブラッドボックス”、どう関係があるのよ」

アイアが、この話の主題を引っ張ってくる。

「はっはっは！ つまりね、『魔法を使える精霊憑きを創ろつ』それがブラッドボックス製作のコンセプトなんだ」

「……………！？」

「“魔導具”は、魔法使いが自分の魔力を集中させ、魔法の発動のよすがにする物だが、“呪式魔導具”、すなわち“呪具”は、それにさらに魔法的な効果を付け加えたものをいう。

つまり“ブラッドボックス”の場合、『付け加えられた効果』が、『魔力の“型”を変えること』なんだ」

自分の右目の下を指で撫でながら、グレインは言った。

「でも、お父さんは“精霊憑き”^{スピリチュアル}じゃないでしょ？」

「そりゃあね。でも魔力の“型”を変化させるコトのメリットは他にもあるんだよ」

そういうなり、グレインは自分の右手の中指を、同じく自分の右目にズブリと、先刻イミル達の前でもやったように、抉り込ませる。

「ひっ！」

「……………っ」

アイアが声を上げ、ロンガは顔をしかめる。

抉り出された眼球は、黒く鈍い光と共に、少しずつ形を変え嵩^{かさ}を増し、やがて手のひらよりも少し大きい、赤黒い立方体変わった。

「ふう……………」

「い……………痛くないの？ ソレ……………」

「ん、ああ、まあ多少は……………ね」

右目を瞑ったその顔は、ウイंकをしているようにも見えなくは無いが、空っぽの右眼窩からは、一筋、赤い血が流れていた。

「なんで体の一部なんだ？ わざわざ自分の肉体から切り離さないと使えないなんて……………」

「はっはっは！ そりゃあ、大分と無理のある技術だし、僕が持つてるのは試作品だし、自分の肉体の一部を媒介にしないとうまく機能しないんだ」

そう言つて、グレインは、アイアに向けて軽く、ブラッドボックスを投げてよこした。

「あ、わ！」

落としそうになりながらも、それを手に取るアイア。

「え……これをどうするの……?」

グレインは不思議そうな顔をする。アイアが持つブラッドボックスに触れ、

「一封印 (Lock)、一 一時解除 (Temporarily Release)、一 使用者開放 (Owner Freedom)」

詠唱を終えると同時に、一瞬、ブラッドボックスが青白い光を放った。

「お父さん……?」

「アイア、これで……そうだな……火属性の魔法を使ってみなさい」

「え……私は氷属性以外の魔法は……しかも火って……」

「いいから、使ってみなさい」

グレインにそう言われ、しぶしぶアイアは魔法を唱える。

「……フェリ・ウオク!」

火属性、弾丸の呪文。

ここで一つ確認しておくべきことは、魔力にはそれぞれ、どのような属性を扱うのに向いているかという“適正”があり、そして、アイアの魔力適正は、氷属性だけば抜けて、後はてんでダメという、非常に歪なものだということである。

「あつつあああああああああ!!!」

急に頭を押さえて転がりまわるロンガ。

「ふえ、え!? 何!!!? ロンガ!? 大丈夫!!!?」

「アイア……ダメじゃないか、そんな人の近くで魔法を使っちゃ」

「あんたが使えって言ったんでしょ!!!?」

ああ、ロンガ……えーと、エイク・ブリザ!!!」

アイアの手の中のブラッドボックスから放たれた冷気が、燻ったロンガの頭を冷やす。ただし、急激に。

「ちょ、やめ、痛い! 冷た痛い!!!」

「あ、ごめん!」

「~~~~~つ……たく……」

ボサボサ白髪のをさすりながら、ロンガは体を起こす。

「はっはっは！ 見ての通り、魔力の“型”を変えることが出来れば、その適正も同じく変えることが出来る」

「ハ……なるほどな。コレを応用すれば、“精霊憑き”スピリチュアルでも魔法が使えるってわけだ」

ロンガのその台詞は、未だに頭を押さえながら。

「もう……返すわよ、コレ」

ブラッドボックスをグレインに差し出すアイア。

グレインはそれを受け取りながら、

「はっはっは、お気に召さなかったようだね。残念だ」

と、言った。

「……結局、あの野郎は何がしたいんだ？ こんなもん作って……それに今更オレに何の用がある？ オレとしても、あいつの首を捕ることを目的にしている以上、近づいてきてくれるのは有り難いが……」

憎悪や嫌悪感を露にして、ロンガはばやく。

「……僕も気になってね、いろいろと調べてはみたが、“四大精霊”と、そう呼ばれる“精霊憑き”スピリチュアルを集めている、という事までしか掴めなかった」

「四大精霊……！？ それってまさか……」

「……………！！」

眼を見開き、自分の利き手ひだりてを見つめるロンガ。

「ロンガ君が持つ“風霊”シルフ、そして“火竜”サラマンダー、“水精”ウンディーネ、“地王”ノーム」

……

その四種の精霊……“神器”スキルに宿る能力を総称して“四大精霊”

「四大……ってことはやっぱり強いのか？」

「ハ、そんなに強くなーよ」

悪態をつくように言うロンガ。

「そうなの？」

「はっはっは！ 『強くない』という表現は正しくないな。正し

くは『もっと強いのがいっぱい居る』んだよ」

「……………!!」

グレインの台詞に、アイアの背筋が凍る。
アイアから見ても、ロンガの能力はずいぶんと高い……………強いもの
だった。

セドソンでのキヨウコ・フレアライズとの決戦、ディルズでのキ
ロ・ウッドビレッジとの戦闘、それらを間近で見ることの無かった
アイアには、それで傷ついた姿を見ていても、ロンガが実際に苦戦
する姿が、明確には想像できなかったのだ。

「そういえば、キヨウコさんも……………」

ロンガの方に目をやるアイア。

「あ……………ああ？」

キヨウコの名前が出てもしまいち反応の薄いロンガ。

「ほら、セドソンで戦った、“サラマンダー火竜”の！」

「ああ！ あいつか！」

「忘れてたんかい!!」

「ん、キヨウコ？ 誰だいそれ」

「旅の途中で（主にロンガが）戦った相手だね。その人の精霊が

“サラマンダー火竜”だったんだよ」

「ハ……………あいつか……………下手すりゃキロより強いかもな……………前は何と
か勝てたが、二度とは戦いたくないし、会いたくもないな」

「んん？」

ロンガの台詞にアイアが怪訝そうな顔を向ける。

「会いたくないってのはどうして？」

「単純に、あの性格が面倒くさいんだよ……………」

「……………」

アイアもそれ以上は、口を噤むしかなかった。

「はっはっは！ 誰にでも、苦手な人はいるものだね。……………よい
しょっと」

そういいながら、グレインは立ち上がる。

「ん？ どこかいくのか？」

「はっはっは！ まあー、歩けるくらいにはなってきたし、そろそろキアラとリックスを迎えに行かないとね」

「あ」

「ロンガとアイアが、同時に『しまった』と、口をぽかんと開ける。……君たち……絶対忘れてたろ……」
その時だ。

「あら、どこかへ行くの？ なら私たちも連れて行ってよ」

「……！！？」

唐突なその声に、アイアとグレインの二人は急激に振り向く。

「え……まさか……」

「ハ……」

ロンガは一人、ぎこちなく、ゆっくりと、その首を回してゆく。

「はぁーい、ロンガちゃん久しぶりー」

「星だど！？ ってかやつぱりその声は……」

ふわりとした、赤みがかった長い茶髪。背はロンガよりも高い。黒いコートを羽織った彼女の名は、

「キョウコ……フレアライズ……！！！」

「わ、私も居ますよロンガさんにアイアさん！！」

キョウコの後ろから現れたのは、アイアほどの身長で、色の濃い赤毛のショートカットの少女。

「メイコちゃん！ ひさしぶりー！」

「お久しぶりです、アイアさん！」

フレアライズ姉妹。協会の街セドソンで、ロンガたちと出会い、姉のキョウコとロンガは死闘を繰り広げたのだ。

「ロンガさんたちがセドソンを発ったあと、私たちも旅に出たんです」

「へえー、そうだったんだ！」

楽しそうに会話をするアイアとメイコを尻目に、ロンガの顔はうなづかなかった。

「あれ？ ロンガちゃん、どうしたの？」

「ロンガちゃんて！ やめるよ……」

「ぷ……くく……ロンガちゃん……ぷくく……」

「はっは……はっはははは……！！！」

「そこお！ 親子そろって必死に笑いこらえてんじゃねえ！！！」

「アイアとグレインに向かってロンガが叫ぶ。

「はっはっはっはっは！ いやあ、なるほど、さっき言ったのはこの人達だね」

「ん？ さっき？」

グレインの声に、メイコが反応する。

「それにあなたは……？」

「ハ、アイアのお父様だそうだ」

グレインの代わりにロンガが言う。

「「え……」」

「ふえっ……メイコちゃんにキョウコさん……？ なにその反応……」

「はっはっは！」

頭に手をやってカラカラと笑うグレイン。

それを見て、あきれたようにロンガが言う。

「ハ、ったく……噂をすれば影が差すとは言っつが……ほどがあるだろ……」

「いま、ちょうどキョウコさんの話をしてたんだよ」

「ああ、こっそり聞いてたから知ってるわ」

「ハ、な、何！？」

うるたえるロンガ。当然では、あるか。

「あはは、まあ、ロンガちゃんには後で地獄を見てもらおうとしてえー、『七罪星』について、私たちにも話、聞かせてくれない？」

「はっはっは！ ああ、構わないよ」

かくして。ここに“風霊”^{シルブ}と“火竜”^{サラマンダー}、四大精霊の内の二種がそろったのだった。

そして。いよいよ『七罪星』の目的が判明する。

「……なんか、前より性格が酷くなってる気が」
「んー？　なんか言った、ロンガちゃん？」
「ハ、にやんでもねえよ……」
「すっごくなんでもなくなさそうなんだけど」

第八閃

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8850t/>

【精霊憑きと魔法使い】

2011年10月2日22時00分発行